774
Su96ウ
1200500752631
774
Su96ウ

始

774
Su96

774
Su36

鈴木春浦著

歌舞伎の型

興文社出版部版

序文に代へて

伊原青々園

鈴木春浦がたうとう死んでしまつた。告別式の行はれたのが四月廿四日で、その日がわたしの誕生日なのも不思議な因縁である。

わたしの誕生日であると同時に、わたしの先祖が事へた松平不昧公の祥月命日である。わたしは春浦の告別式を濟ましてから、音羽護國寺の不昧忌に駈けつけた。春浦は酒、不昧公は茶これも亦不思議な因縁である。

春浦の死んだ家は四谷左門町で、その左門町はお岩稲荷の舊跡である。南北の「四谷怪談」にお岩の父親を四谷左門と名づけたのは其れから來て居る。明治の初年になつてお岩稲荷は越前堀へ引けたが、今でも元地に別なお岩樣があつて、丁度その脇の路次が春浦の家である。告別式にわたしが小山内君と二人で溝板の上に立つて來會者を送迎して居ると、お岩樣で叩く太

鼓が耳の側で聽こえる。芝居を食ひあるいて居た春浦が芝居で名高いお岩樣の隣りで息を引取つたのも、やはり不思議な因緣である。

春浦には七人の子があるが、其の二番娘のT子は、春浦が死ぬる前の月から、わたしの家庭へ手傳に來て居る。わたしの妻も養女も芝居見物に行つた留守で、T子と二人で夜食をすると鯛の刺身をたべながら、こんなイキのいゝものを自分で食ふのは勿體ない、おとつさんに食べさしたら何んなに悅ぶでせう、と獨りごとのやうに言つた、わたしは側で其れを聞いてT子のやさしい心掛に感じた。

芝居から妻が歸つて此の咄をしたが、丁度そのあくる日に、春浦の容體が怪しいから、T子に歸つて來いといふ電話が掛かつた。妻は前日の事を思出して、殘つた鯛の切身をことづけたが、T子の歸つた時はもう息を引取つて、其の鯛が間に會はなかつた。

それから、わたしが悔みに行くと、吉山旭光のほかに、藤井六輔がやつて來て、ウキスキーの瓶に白牡丹を挿したのを佛前に備へた。其の瓶の中味は曾て藤井が春浦と一緒に飲み盡くしたのださうな。わたしは藤井のしをらしさに涙ぐんだ。

春浦は酒について色々逸話を殘したが、邪氣がなくて根氣のいゝ人であつた。三木竹二氏の所へ役者評判記の序文を集めたのを持つて來たのが始めで、それから三木氏の助手として雜誌「歌舞伎」に關係するやうになり、劇場へ出入して遂に名物男となつた。三木氏が歿して、わたしが「歌舞伎」を經營してから、やはり春浦の力を借りた。

「歌舞伎」に載せられた鷗外先生の飜譯脚本は大かた春蒲の筆記したものである。そのほかにも鷗外先生の著作で、春浦の筆記したものが澤山ある。それは悉く「鷗外全集」に收められて居る。

春浦のしたモウ一つの仕事は歌舞伎の型であつた。これは近きうちに歌舞伎出版部から單行される筈である。春浦は病褥で其れを待つて居たが、出版を見ないうちに死んでしまつた。

口をきく毎にグニャ〳〵身體を動かす癖があつたので「蒟蒻の鈴木」といふ綽名があつた。「石原防風」といふ別號は、三木氏と千葉鑑藏氏とわたしと四人で、或る處へ遊んだ時、大分上機嫌になつた春浦が、刺身のツマのボウフウを見て盛んに其の講釋をしはじめたので、千葉氏が「ボウフウ」といふ綽名をつけ、それに當時の居處だつた本所の石原をかぶせて、自分の

號としたのである。

或る集會の席上で、春浦が鷗外先生に會つて、何日に筆記の爲に行くといふと、先生は忘れないために手帖を取出して、其の日のところへ、春浦の名をしるす代りに、當人のすわつた姿をスケッチされた。其の輪廓が春浦そつくりなので席上の人が悉く笑つた。その手帖は今でも先生の家に殘つて居るのであらうが、鷗外先生に自分の肖像をかゝした者は恐らく春浦一人であらう。

春浦が死んでから、其の雜記帖のうちに小山内君とわたしとへ宛てた遺言の書いてある事を發見した、日附は死ぬ前月になつて居た。その時から死を覺悟して居たのである。

春浦のやうな仕事をする人は此れからも出るだらうが、春浦のやうに脫俗した人はもうメッタに出ない。春浦の死んだのが悲しいと共に、わたしは其れが淋しい。(昭和二年六月、演劇新潮)

尙ほ此の書の編纂も大部分はT子さんの手に成つた事を附記する。

序に代へて

小山内薫

鈴木春浦君はまだ然程の年でもなかつた。それだのに死んでしまつた。誠に寂しい氣持がする。

春浦君は震災後糀町に住み、轉じて四谷に移つた。それが私の住居の直ぐ近くだつたので、毎日のやうに往來した。

春浦君の筆錄した「型」の本を出したらといふ話があつてから間もなく、春浦君は病褥の人となつた。春浦君は病軀を呵して、この書物の整理にいそしんだ。物を筆記することの精力に就いては、昔から敬服してゐたが、老年藥餌に親しむの身となつて、尙且この精力があるのを親しく見て、私は少なからず驚嘆した。

原稿の全部が歌舞伎出版部へ渡されると、間もなく病が重つた。春浦君は終にその校正刷の

一頁をも見ずに死んだのである。

私が春浦君とはじめて識つたのは、雜誌「萬年草」の會が、千駄木の森鷗外邸で開かれた時であつた。その頃、春浦君は鷗外先生の令弟三木竹二氏の主宰する雜誌「歌舞伎」の唯一の助手であつた。春浦君は三木竹二氏が亡くなるまで「歌舞伎」を助けた。單に文筆の上で助けたばかりでなく、雜誌が出來ると、それを風呂敷包にして場末の小賣店へ配つて歩くやうなことまでした。三木竹二氏が歿して、伊原青々園氏がその後の責任を負はれるやうになつて、からも、春浦君はやはりこの非營利的な「歌舞伎」を離れなかつた。

その長い間に、春浦君が筆錄した歌舞伎の「型」は實に多量に及んでゐる。その内の精髄を選み集めたのが、この書である。

この書の價値は、筆者がなまじひな主觀を加へずに、何も彼も「在りの儘」に書いてゐる点でるあ。資料としての價値は、實にその忠實な記錄の上にある。

歌舞伎の研究者は勿論、吾々のやうな一般演劇の研究者にとつても、誠にこれは有難い記錄である。

春浦君生前の爲事は極めて地味だつたが、その集成たる本書は必ず將來に花を咲かす種となるだらう。春浦君以て瞑すべしである。

歌舞伎の型目次

第一　春浦自記

□七福神（明治三十五年七月於市村座出演）……（三）
□熊谷陣屋（明治三十八年三月於東京座、中村芝翫主演）……（九）
□新版歌祭文（野崎村）（明治三十八年五月於東京座、中村芝翫主演）…（一八）
□猿若（明治四十年六月於上野博覽會演藝所、十五代目中村明石、四代目中村勘五郎所演）……（三五）
□猿若の狂言に就て……（四五）
□「猿若」の人形番附及掛物……すの字（四八）
□先代萩の床下（明治四十一年三月於歌舞伎座、市川團藏所演の仁木彈正）……（五一）
□團藏の仁木談……（五三）

□忠臣藏の大序（明治四十二年十月於東京座、市川團藏所演の高師直）…（五八）
□賀の祝（明治四十一年五月於市村座、中村歌六の主演白太夫）…（六三）
□忠臣藏の四段目（明治四十三年十一月於市村座、尾上菊五郎の大星由良之助）……（七四）
□菊五郎の初段由良之助談……（七九）
□岩倉清玄（明治四十四年一月於新富座上演）……（八二）
□近頃河原達引（明治四十四年十月於歌舞伎座、片岡仁左衞門主演の猿廻し與次郎）……（八九）
□生寫朝顔日記（明治四十五年六月於歌舞伎座上演）……（九四）
□奥州安達原の一ッ家（袖萩祭文の後段）（大正二年二月、於明治座、市川小團次老婆岩手主演）……（一三三）
□涙橋（お七と吉三）（大正三年八月、於帝國劇場上演）……（一五七）
□お夏狂亂（大正三年九月、於帝國劇場、尾上梅幸の狂女）……（一七一）

□梅幸の「お夏狂亂」談……（一七八）
□市川團十郎（大正三年九月、於帝國劇場上演）……（一八二）
□幸四郎の「團十郎」談……（二二〇）
□石橋山（大正三年十月、於帝國劇場、松本幸四郎主演）……（二二三）
□岡本綺堂氏の「石橋山」談……（二三七）
□粟田口初音一節（大正三年十一月、於市村座上演）……（二三九）

第二　三木竹二記　鈴木春浦補筆

□彌作の鎌腹（明治三十五年八月、於市村座、中村時藏主演）……（二六七）
□時藏藝（故人型）談……（二八〇）
□里見八犬傳（明治三十五年十月、於歌舞伎座上演）……（二八九）
□忠臣假名書講釋（明治三十五年十月、於歌舞伎座上演）……（三〇〇）
□菊五郎の喜内談……（三〇八）

□高時天狗舞（明治三十五年十月、於歌舞伎座上演）……（三〇七）
□三十三間堂棟由來（明治三十七年五月、於新富座、中村芝翫主演）……（三一七）
□芝翫のお柳談……（三二八）
□淀鯉出世瀧徳（明治三十七年十月、於明治座、市川莚升（今の左團次）主演）……（三二九）
□莚升の近松世話物研究談……（三三八）
□玉篋兩浦島（明治三十六年一月、於市村座、伊井蓉峰主演）……（三四一）
□「兩浦島」の道具と服裝……久保田米遼（三五四）
□江島育根生兒菊（辨天小僧）（明治三十五年十月、於歌舞伎座）……（三五七）
□女　暫（明治四十年一月、於歌舞伎座、中村芝翫主演）……（三六四）
□「木内宗吾」の渡し場と子別（文久年間小團次が演じたる時の正本に據り團藏が壽座で演じたるものと、芝鶴が重ねて演出したるのと參照す）…（四一〇）
□白井權八（明治三十九年十一月、於市村座　尾上菊五郎主演）……（四四五）

□柏扇之助の權八立腹の合方談……（四六四）
□地震加藤桃山譚（明治三十九年十一月、於市村座、中村吉右衛門主演）……（四六六）
□奥州安達原（袖萩祭文の場）（明治三十九年七月、於市村座、中村吉右衛門主演）……（四八三）
□源氏店（明治三十九年七月、於市村座上演）……（四九八）
□天竺徳兵衛（明治三十九年七月、於市村座、尾上菊五郎主演）……（五一二）

第三　衣裳・鬘・鳴物

□歌舞伎座（明治三十三年十月狂言「信長記愛宕連歌」「鬼一法眼三略卷」「小夜時雨天網島」の衣裳）……（五三五）
□歌舞伎座（明治三十三年十一月狂言「名高忠臣藏」「國姓爺合戰」の衣裳）……（五三八）
□歌舞伎座（明治三十四年一月狂言「增補玉藻前」「鼠小僧春著雛形」「乘合船惠方萬歲」の衣裳）……（五四三）

□歌舞伎座（明治三十四年三月狂言「俗説美談黄門記」「大徳寺焼香」「縁結矢矧戯」の衣裳）……（五四八）
□歌舞伎座（明治三十四年五月狂言「世響太鼓功」「山門五三桐」「芝翫改名口上」「箱書附魚屋茶碗」「六歌仙」の衣裳）……（五五二）
□歌舞伎座（明治三十四年七月、菅公會寄附演劇「川中島配膳」「伊勢三郎」「實盛物語」「二人袴」「市原野」「鞘面」の鬘と衣裳）……（五五七）
□歌舞伎座（明治三十四年七月狂言「鳴海軍記」「伊勢音頭」「門納涼巷賑」の鬘と衣裳）……（五六二）
□歌舞伎座（明治三十四年十月狂言「芳哉義士譽」「戀湊博多諷」「壽靱猿」の鬘と衣裳）……（五六七）
□歌舞伎座（明治三十四年十一月狂言「先代萩」「仲國」「八百屋お七」の鬘と衣裳）……（五七三）
□歌舞伎座（明治三十七年四月狂言「櫻御所」の鳴物、鬘、衣裳）……（五七九）
□東京座（明治三十七年四月狂言「小楠公」「櫻御所」の鬘、衣裳）…（五八三）

□東京座（明治三十七年六月狂言「岡崎の猫」「扇屋熊谷」「高田の馬場」「千本櫻眺戯」の鬘と衣裳）……（五八六）
□東京座（明治三十八年五月狂言「牧の方」の鬘と衣裳）……（五八九）
□歌舞伎座（明治三十九年七月狂言「紙治の河庄」の鬘、衣裳、鳴物）…（五九二）

歌舞伎の型目次終

歌舞伎の型 第一

春浦自記

市村座 脇狂言 七福神

明治三十五年七月於市村座出演

この脇狂言といふもの、今より三十年ほど前まで、各歌舞伎座の吉例として、行はれてゐたものですが、その後は全く絶えて演らなくなつたのです。

ところで、この脇狂言は、猿若座が『酒呑童子』市村座が『七福神』、森田座が『甲子待』、河原崎座が『猩々』と、かういふやうに別々で、稲荷町の連中と、囃子方の見習が、まだ客の顔も見えない時分に演つたものだといひます。

それを今度市村座で、若手俳優にこの『七福神』を嵌めて、久々で昔の俤を寫して演じることになつたのですが、併しそれは昔の樣な儀式的ではないのです。

そこで昔は『七福神』の中で踊つたのは、恵比須と大黒だけのことで、時によつて人の頭が揃はない折は、山臺を積み重ねて衣裳を著せ、鬘をその上に載せ、側へ槍を立てかけて濟ましたこと

もあつたといふ話を聞きましたが、今度はそれとは大いに趣が違ひ、前景氣に青年俳優の顔を並べるといふ一種の興行商略でもありませう。

それからこの脇狂言を演出することに就いては、振附の古老花柳英阿彌（勝次郎）が、同座から依頼され、狂言方と囃子頭の六郷新三郎とが計り、種々役者の都合に依つて、この振事を昔風と變へ、一役づつ踊らせることに工夫したものです。

唐樂で幕が明くと、正面板羽目の書割は松竹梅、上下とも羽目板で見切つた所作舞臺で、上手に長唄囃子連中が居並び、七福神は上手から順好く第一に市勝（今の村右衛門）の布袋和尚、銀之助の辨財天、花助（今の關三十郎）の恵比順三郎、茂々太郎（今の九藏）の毘沙門天は相引に腰をかけ、市松の福祿壽、八十助（今の三津五郎）の大黒天、駒助（今の友右衛門）の壽老人が居並び、吉例の見得があると、唄になり、

〽春霞引くや笑顔の眞帆片帆、いしづきしやんと胴の間に、毘沙門天はかたすきと、見せて日毎に通ふ神」と、この文句の内に皆々振事があり、宜しく見得を切つて元の座へ極まると、

辨天「今宵も吉祥てれんの琵琶に」

恵比須「引かれ廓の若恵比須」

大黒「色大黒の舞ひの手に」

壽老人「合す太鼓の壽老人」

布袋「笑ひ布袋の腹つづみ」

福祿壽「笛を福祿壽を保つ」

大黒「そのつむりさへ長き世の」

恵比須「とふの眠りの」

六人「みなめざめ」

毘沙門「脇狂言の得手に帆を、上げて乘込む寶船」

と、一々白が渡つて唄になる、これが口説きで、

〽長き夜のとふの眠りのみなめざめ、恵方にあたる辨天の、笑顔うるはし立姿」と文句の内に辨天が出て琵琶を持ち、振事があつて元へ極まると、

〽心もうごく壽老人」で、壽老人が座から立つと、

〽ところへ布袋がのつさ〳〵」で、布袋も出て來る。

〽さうはならぬと押し合ふ中へ、行司と入りし福祿壽」で、福祿壽が立つて、兩人が中へ寶團扇

「を持つて行司にはひると、鼓入り相撲太鼓の合方になり、角力を取り壽老人が投げられ、
〳〵わけもなや」で、布袋が勝つて腹鼓を打ち、喜びの見得があり、元の座へ極まると、又々渡り
白になり、

毘沙門「八百萬神のその中にも、寶を護る福神の」
布袋「數も七寶八方の、惠みに榮えし橘の」
弁天「檜久しき花舞臺」
大黒「大黒天が持前の、寶の小槌振事を、又釣り好きの三郎どの」
惠比須「吉例によつて市村の」
福祿壽「實に入船のさいさきを」
壽老人「目出度ここに」
皆々「朝日影」と、ここで又唄になりますが、この長唄は古來脇狂言に用ゐてゐる『七福神』なので、今度は抜差をしたところがあるとのこです。
本調子〳〵それいざなぎいざなみ、夫婦寄合ひ漫々たる和田津海に、天の逆鉾卸させ給ひ、引き明け給ふその溜り、凝り固つて一つの島を、月よみ日よみ蛭子、そさのをまふけ給ふ」の文句の内で、

毘沙門天は寶塔と槍を持ちて、面白き振事があつて極まると、又
〳〵蛭子と申すは惠比須のことよ」で、惠比須と大黒が前へ出て、
〳〵骨なし、皮なし、やくたひなし、三とせ足立ち給はねば、手繰りくりくり來る船に乘せ奉り、
蒼海原に流し給へば、海を讓りに受取り給ふ、西の宮の惠比須三郎、いとも賢き釣針卸し」の文句の内に、惠比須三郎は釣竿を持ち、扇を大黒に投げると、惠比須は釣絲を出してその扇を取り、釣つた模樣を見せる。ここで又、
〳〵萬の魚を釣り釣つた姿はいよさてしほらしや」で、惠比須が元の座へ極まる。
二上り〳〵ひけや引け行け」で、大黒が立つと、
〳〵引くもの品々、さまはきはずみ琵琶や琴、鼓弓、三味線しのゝめよ、漕ぐもそこ引け小車、子供達はござれ、ほうびきしよ〳〵と、帆綱ひつかけ、寶船引いて來た、拍子揃へて、打つや太鼓の音の好さ、鳴るか鳴らぬか山田の鳴子、引けばからころ、からりころり、ころりからころ〳〵〳〵や、くつばみ揃へて、神のじん馬を引連れ〳〵勇み勇むや千代の御神樂」と、始終の内に、大黒が袋と小槌を使つて振事があつて、皆々、手招ぎしても來ぬので、小槌を高く上げて振ると、六人が順々に立つて舞ひかけるのが木の頭で、

神は利生をつけの櫛々」と、この文句の内、下り葉の鳴物で幕になりました。

これは僅か十五分間ばかりのものでした。

熊谷陣屋

明治三十八年三月於東京座、中村芝翫主演

床の「待間程なく」で揚幕の内から「旦那のお歸りー」と呼ばせ、〳〵熊谷次郎直實」で、又「お歸りー」と呼ばせて、〳〵流石に猛き武士もー」で花道へ出て參ります。

顔の拵は團十郎と格別の相違なく、矢張砥の粉の薄肉で、眉毛尻から鬢まで隈を取り、眼頭と下眼瞼へ墨を入れ、頬から顎へかけて青黛で髭の跡を作り、墨で口を割るのも殆んど同樣です。鬘は生締、紺地錦赤絲七寶の裃、黑本天の著附に對鳩の金紋、白羽二重の二枚下著、黃金作朱鞘の大小を帶び、卵黃色の足袋に福草履を穿き、物思ひに沈んだ體で眼を閉ぶり、腕組をし乍ら床の〳〵物の哀を今ぞ知る」迄の間に花道の六四の邊へ來て止り、眼を開き、もう陣屋へ來たといふ心持で組手を解き、左の手で刀を直し、首を一寸左右へ振り、突袖をし、舞臺へ來て、枝折門の外に建てある制札を默讀し、ツカ〳〵と内へ入つて來て軍次の後に女の居るのを怪み、始めて相模だと知り、

床の〳〵妻の相模を尻目にかけて」で一段に右足を掛ける途端に後向にグイに相模を睨み付け、〳〵座に直れば」で左手で太刀を抜出して右脇に置き、腰を下して軍扇を前に突立てる。軍次が景高の待つて居る事を告げるので、「ムウ詮議とは何事やらん、其方は奥に行き梶原殿を饗し申せ」を普通に、「行け〳〵」を輕く謂ひ、軍次の躊躇するので苛立つて、「ハテ何を猶豫、行けと申すに」と強く引張つて云ひます。軍次が引込むと、熊谷は稍下手を向き、「コリヤ女房、そちやここへ何しに來た、國元出立の砌、陣中へは便も無用と堅く申付置きたるに、詞を背くといひ、女の身で」と續け、「陣中へ來る事」と切り「不屈」と短く詰め、「至極の女め」と大く引伸して云ふ。相模が小次郎の安否を問ふと、「戰場へ赴くからは」云々の白があつて、「若し討死でもいたしたら何とすーるう」と屹となり、尙下手を向きます。床の〳〵健氣な詞に顔色直し」で正面に向直り、「先づ小次郎が手柄と謂へば、平山の武者所と爭ひ、拔駈の高名」を勢よく、「手傷少々」を緩く憂を持たせ、「負ふたれども」と輕く伸し、「末代迄の〇家の譽さアー」と大きく引張る。相模が「シテ其手傷は、急所ではござりませぬか」と急込むのを、「コリヤ〳〵〳〵何を申す」と謂ひ乍ら陣扇で一寸相模の顔を指し、要で下をトン〳〵〳〵と叩き、「未だ手傷を悔む顔付、若し急所ならおみやどうする」と手強く突込み、小次郎と共に往つたかと聞くので、「オ、サ危しと見るより軍門に駈入り、小次郎を無理に引立て小

脇に引ん抱き、我陣屋へ連歸り、某は又其軍に搦手の大將、無官太夫敦盛が首を取つて」と早目に云ひ、「功名手柄をいたしたわいイ」と得意氣に聲高に云ふと、床の〳〵後に聞居る御臺所」云々で藤の方が「熊谷やらぬ」と突掛るを、山形にあしらひ、右に持たる陣扇の要で懷劍を打落し、藤の方が前へのめり出る所を、左で襟髪を持て引寄せ、「ヤア陣中にて敵呼はり、不屈至極の女め」と荒立つと、相模が藤の方だといふので少しく驚き、「ナニ」と云ひ乍ら相模の顔を見、これがと半信半疑の體で、扇の要で二度ほど藤の方を指し、左手で藤の方の右手を取り、引起す樣に高く上げて顔を覗き込み、「誠にイ」といたく驚いた調子で云ひ、陣扇をピッタリと下に置き、床の〳〵思ひ掛けなき御對面と」で藤の方が又切掛けるのを矢張山形に外し、左の手を大きく擴げて伸し、足を割り、三四足上手へ藤の方を押して行き、小刀を前へ投出し、早足で中央に戻り、床の〳〵飛退き敬ひ奉る」で袴の股立を取り、束に飛退つて腰を下すと同時に、左手を大きく擴げて屹と見得をして、左手を下し、上手向に兩手を突いて平伏します。兩女の白の間正面に向き直り、床の切に「ヤア愚か、おろーかアー」と重々しく引張り、「ソモ此度の戰、敵と目指すは平家の一門、敦盛は扨置き、鎬を削るに誰彼の、用捨がならうかア」と強くキッパリと云ふと、兩女が詰寄るので、「テエ、たはけものオめ」と相模を窘め、直に氣を替へ、「イヤノウ、藤の御方、戰場の儀は、是非なしと、御諦め下

さるべし」と云つて少しく頭を下げ「其日の戰のあらましと、敦盛卿を討つたる」で又藤の方が息組むのを、「サ、御物語な仕らん、先づウ」で左手を伸して止め、「相模、其方もこれにて承はれ」と云ひながら、床の〳〵物語らんと座を構へ」で左から膝を進めて正面を向き、要を下にして陣扇を前に突立て、兩掌を其上に重ねて極る。そこで「扨も去ンぬる六日の夜、早や東雲と明くる頃」を音通に、「一二を爭ひ拔駈の平山熊谷、アレ討取れよと」を早目に云ひ「打つて出たる平家の軍勢」で向ふを透し見る振をし、「中に一ト際優れし緋縅」で右に持ちたる陣扇を眞直に伸して向ふを指し、次に陣扇を引いて左の掌を敲き、其儘起して左の膝に突立て右手で持添へ、矢張向ふを見込んで居ます。(或時は、陣扇をトンと下に突立て、其上に兩掌を載せて向を見込んで居たと思ふ。)「さしもの平山、應對ひかね」の間も同前で、「濱邊を――さして」で、陣扇を右に持ち、左から右へ二度返し、右足を前へ伸し、同時に扇を左に持替へ、「逃出す」で紘に連れて左から右へ小刻に陣扇を使ひ、右の足を引いて見得、「ハテ健氣なる若武者や」から「熊谷これに控へたり」まで紘に乘り、「返せ戻せ、オ、イ〳〵」で終の「オ、イー」は語尾に力を入れ、始よりは一段張て遠くへ聞えるやうに云ひ、床の〳〵扇を持て打招けばで」左に持ちたる扇を右手を添へて開き、左足を踏出し、後向に右に扇を持つて打招き、直ぐに向直り、右足を踏出し紘に連れて開いた扇を、始は左右に終には

上下に輕く右の手頸で煽り、それを膝へ引付け、開いた儘斜に持つて見得をし、「駒の頭を立直し」で兩手で手綱を搔繰る形、「波の打物二打三打」で扇を窄めて刀を拔く樣をし、二度天地に斬結び、床の切に窄めた儘右手で扇の要を握り、内拳を内に向け眞直に右扇より高く上げ、左手を擴げて突張り、釣合を取り再び見得、「いでや組まん」と大く、床の〳〵いでや組まんと馬上ながらもむんず組み」で扇の要を右脇に付け、左拳を突張り、押合ふ振をし、「兩馬が間にどうと落ち」で扇を開き、煽りてピッタリと下へ伏せ、右の掌で押へ付け、藤の方へ思入をし、兩手を膝の上に置きます。藤の方の其若武者を組敷いてかと問ふので「されば御顏をよく見奉れば、鐵漿黑々と細眉に、年はいざよふ我子の年輩で」をシンミリした調子にいつて、一寸相模を見、「定めて兩親在しまさん、其御歎は如何ばかりと、子を持つたる身の思ひの餘り」と早目に續け、「上帶取つて引立て」と切り、床の〳〵塵打拂ひ」で左の袂を開いた陣扇で二三度輕く拂つて、草摺の塵を拂ふ形を見せ「早や落給へ」と少し頭を下げて云ひ、相模が左樣勸めたかと問ふのを受けて、「オ、サ」と大く、「早や落ち給へと勸むれど」を早く「イヤ〳〵、一旦敵に組敷かれ、何面目に存へん」を力なく、「早首打てよ」で少し間を置き、「熊谷」と聲を顫はせ、「サ、〻、〻サ、其仰せにいとゞ尙、涙は胸に堰上げて、まッ此の如く我子の小次郎、敵に組まれて命や捨てん、淺ましきは武士の」と迫込みて調子を亂し、「慣へと太

刀も」と愈々聲を突き上げ、床の〳〵拔衆ねしが」で太刀を拔衆ねる樣を二度見せ、目を瞑り、打仰いで歎き、又床の〳〵逃げ去つたる平山が、後の山より聲高く」で屹と向ふを見、後向になり、左足を前に伸し、陣扇を颯と打開で、石投の見得をし、それから正面に向直つて、開いた扇は其儘斜に胸の邊へ引付けて、下から山を見上ぐる形をし、坐り六法で前へ進み、右足を三段に踏下し、右手で陣扇を開いた儘高く翳し、左手も十分伸してグット大見得をし、「熊谷こそは敦盛を、組敷乍ら助くるは、二心に極つたり」と乘になり、床の〳〵呼はる聲々」で元の座に歸り、「是非もなや」と萎れて云ひ、床の〳〵御涙を浮め給ひ」で一寸扇の影で泣く仕草があり、「是非に及ばず、御首を」と切り、力なく扇を振上げ、聲を曇らし、「打奉つて御座ります」と云ひて扇を下へ置き、兩手を突いて物語を終ります。藤の方の歎くのを相模が諫め勵すのを聞て、「オヽ出來した、其方が申すも尤ぢや」云々と云ひ、敦盛の首を實檢に備へるとて、首を右に捲りて上手を見、「軍次」と呼び、又左に捲りて下手を見て、「軍次」と深く引張つて云ひ、床の〳〵呼はる聲と諸共に、一間へこそは入相の」で藤の方に一禮し、左で刀の鐺を突いて立上り、袴の襞を右でポン〳〵三四度叩き、少し反り氣味に後向になり、右の袂を反し、思入をして奥へ入る。青葉の笛の件が終つて、床の時刻移ると次郎直實で盲縞へ龜甲の内へ花菱總縫の社衿、茶地へ牡丹唐草模樣織物の著附、白羽二重の二枚下著とい

ふ拵で、左脇に首桶を抱へ、正面の襖を開かせて出て來ると、兩女が取縋るので、内見は協はぬと云つて輕く藤の方を振拂ひ、又「ハッ」と掛聲をして右の掌で強く相模を拂ひ、二重を下り、花道の附際まで來ると、奥から義經が呼留めるので、「ハヽハッッ」と答へて首桶の底に掛けて置いた右手を上に掛直し、體を屈めながら二重に上り、義經の下手に首桶を前に、左で太刀を拔き出して左脇に置き、兩手を突いて平伏する。床の〳〵仰せを聞くより熊谷は、ハット答へて走出で……」一禮して右の肩衣を脫ぎ、緣端へ來て跪き、「制札引拔き、恐氣なく……」で制札を引拔き、懷紙を出して泥を拭ひ、懷紙は其儘緣下に捨て、右手に制札を携へて元の座へ戻り、右脇に置いて平伏し「先頃堀川の御所にて、御實檢下さるべし」と云つて、兩手で首桶の蓋を上げると、相模が駈寄るので直ぐ蓋をし、相模を左脇に引寄せ、藤の方は右手に持つた制札で支へ、「コレ〳〵實檢に備へし後は、御目に掛ける、イヤサ御覽に入れる、立騒いで尾籠千萬」と早目に云ひ、「御騒あるウなア」と大く引張り、床の〳〵熊谷が、諫に流石はしたなく、寄るに寄られず悲しさの、千々に碎くる物思ひ」の間に制札をあしらつて留める形をし、それを引く拍子に兩人は二重を下りて、藤の方は上手に來、相模は下手から取縋るのを、制札を左の肩に引攜ぎ、右足を三段の中へ踏下し、上から冠せてグット大見得に睨付ける。それから床の〳〵次郎直實謹んで」で「敦盛卿は院の御胤……花に擬へ

し制札の面、察し申して討つたる此首、御賢慮に叶ひしか、但し直實が過りにて候や」と總體早目に云ひ、「御批判いかァがァ」と語尻に力を入れて引張り、右手で首の髻を持ち、左の掌で其下を支へ、右膝を立て、十分に腕を伸して首を差付る。義經が「由緣の者に名殘を惜ませよ」といふので、「コリヤ女房、敦盛の御首、藤の方へ御目に掛けよ、サ御覽に入れよ」と沈んだ調子で云ひ、「早く」を短く、「はやーくー」を曇らして引張り、床の〳〵アイと計り女房は、敢なき首を手に取上げ、見るも涙に塞がりや」で相模が「ハ、」と泣落すのを、御前を憚りて「コリヤ」と押へ、眼を瞑り、齒を喰締る氣味合で、無意識に首を渡します。相模の愁嘆が濟んで、床の〳〵問へど夫は瞬も、詮方涙御前を恐れ、外に云ひなす詞さへ、泣音血を吐く思ひなり」で右膝に突いて居た扇を知らず識らず外し、相模と顏見合ひ又義經の方を見て、恥しき思入をする。間もなく揚幕が内で遠寄を打込むとキッとなり、床の〳〵仰せに直實畏まり、急ぎ一と間に」で刀を取上げ、前に横へ、義經に一禮して奥へ入る。又床の〳〵ハッ」と答へて次郎直實、出陣の出立と」で鹿の角の前立のある兜を眼深に冠り、紺地蜀江錦の鎧下、白の上帶で出て來り、鎧櫃を持參致させし事を告げ、相模が何時小次郎と敦盛とを取替へたと聞くのを、「最前も申す通り……エ、知れた事」と云つて窘め〳〵仰せに直實恐れ乍ら」で一禮し、「先達て願上し暇の一件、かくの通り」と沈んだ調子で云ひ、床の〳〵切拂ふた

る有髪の僧」で兜を脱ぎ、半坊主髻になり、〳〵ハァ有難しと立上り」云々で鎧を脱ぎ、白羽二重の著附、黑純子の袈裟となり、驚く女房を「ナニ驚く事のある」云々と重々しく諭し、「今より我名を蓮」と切り、少し考へて低く、「生と改めん」と續け、「一念彌陀佛、即滅無量罪」を早目に「十六年も一と昔」を緩め、感慨に堪へぬ思ひで内へ呼吸を引き、「ァ、夢であつたァ」とシンミリと落して云ひ乍ら、右の掌を頭に當てゝ右から左へクルリと撫で、床の〳〵ほろりと滴す涙の露」で稍伏目になり、左に持つたる珠數を爪繰り、〳〵終に置く初雪の、日影に解くる風情なり」で、下手を向き、右手で懷紙を拔出して前に置き、其二三枚を取つて顏に當て、始めて大く泣きます。それから割白になり紘に乘り、「實に其時は此熊谷、浮世を捨て、不隨者の源平兩家に由緣はなし、互に爭ふ修羅道の」と切り、「苦患を助くる回向の役」を張つていひ、珠數を爪繰る。「我は心も墨染の……君にも益々御安泰」で兩手を突いて二重を下り、下手に來、「命が有らば」と大く義經の「健固で暮せ」の御諚でハッと上手を向き、大く股を割つた態で立禮し、「有爲轉變の世の中ぢやなァ」と一緒にいひ、床の〳〵聲も涙に搔曇り」で珠數を持替へ、〳〵別れてこそは」で相模が首の方に駈寄るのを隔てゝ、「コリヤ」と止るのが木の頭、引張の見得で幕になりました。

新版歌祭文（野崎村）

明治三十八年五月於東京座、中村芝翫主演

在郷唄で幕が開くと、本舞臺は三間の茅葺、竹縁付の二重屋體、上手一間は二枚障子の出入口、下手は二重に續いて土間の出入口、あと一間の納屋、正面二間の内、上一間は上下の戸棚、下一間は上部を二枚障子の開閉の有る小窓、下部を鼠壁にし、戸棚の前に鏡臺を置き、鼠壁の傍に袖屏風少し離れて狙板、其上に大根の切掛けと菜切庖丁を載せ、例の所枝折戸に四つ目垣、家の外には眞盛りな白梅の立木、舞臺の上下は立木の書割で見切つてある。總て野崎村久作住居の體で、最初勘五郎と銀之助の近所の親子が上手向に縁側に腰を掛け、御蔭で娘も一人並になる事が出來て有難いと禮を言つてゐる（これは銀之助が名題になつた時だからである）のを猿之助の久作が、胡麻袋付の鬘に、革色紬米小紋の著附、瓦斯茶紬の帶、黒八丈の襟の掛つた紬袖の襦袢、濃淺黄の足袋で、二重の上手に下手向に胡坐をかき、煙草を喫みながら聞いてをり、其下手には芝翫のお光が島田髷

の鬘、御納戸中形の紬に、桃色の裾の附いた振袖の著附、紫繻子と赤龍卷絞の鯨帶、赤無地の袖ある襦袢、朱鷺色の湯具の拵で、茶を出してゐると謂ふ見得。近所の者が引込むと、後は親子差對ひとなり、一言三言の捨白があつて、久作が「我身と久松と、ソレ夫婦になるのぢや、嬉しからうな」と笑ひながらいふと、お光は左側に挾んでゐた白地の手拭を右の手で抜き取り、顔に押當てゝ恥しき思入をする。久作が「女房に聞かせて喜ばせる」といつて奥へ入ると、直に床の淨瑠璃になり、床へ跡に娘は氣もいそ〳〵、」で立つて奥を覗き、中央に戻つて來て坐り、さも安心した風に「アア、ほんに嬉しや〳〵、日頃の願が叶ふたも、天神樣や觀音樣」といつて正面を向き、兩手を突き、「イヤ〳〵第一は親のお蔭、父さんこれからお禮をいひますぞや」と奥を拜み、「オ、さういふ事なら、今朝あたり、髪も結ふて置かうもの」と左の手で髪に一寸觸つて見、床へ鐵漿の附けやう」で左の膝を立て、左の手拭を持ち、右を使つて鐵漿を附ける眞似をし、床へ挨拶もどういふてよかろやら、」の切れに、「今のうち、髪など撫で付けうわいなァ」といつて、床のメリヤスの間に鏡臺の傍へ來て下手向に坐り、點頭いて立上り、奥を覗き、四邊に人の無いのを見定めて、元の座に戻り紙を細長く疊んで眉毛に當て、女房になつて眉を剃落した時の我姿といふ心で、鏡に顔を寫し、我ながらハッと上氣して、前垂で顔を蔽ひ、俯臥になつて恥しき思入をする。それから忘れてゐたと

いふ心で、右の手で膝を輕く叩き、床〳〵覺束、膾拵へも、」云々で、俎板を持つて出、〳〵末榮刀と氣も勇み、で大根を切り始め、〳〵手元も輕ふちよき〳〵〳〵、切つても切れぬ戀衣や、」で絃に連れて思はず指を切り、一寸口で血を吸ひ取り、前の紙で結へ、其儘下手向に一心に切つて居ると、床〳〵お染は思ひ久松が、跡を慕ふて野崎村、堤傳ひに、」で、風の音をかむせ、揚幕から訥升のお染が、島田髷の鬘、友禪縮緬振袖の著附、黑繻子に緋鹿の子の帶、緋縮緬の襦袢の拵で、供のお芳を連れて出で、花道七三の邊へ來ると、お芳がお染の肩を叩いて向ふを指すので、點頭いて立止り、お芳が餘り聲高にいふので、「オ、、もそつと靜にいやいのう」と右の手に持つた扇で押へ、「そなたは船へ、早う〳〵と」扇で元來た方角を指し、下女を歸し、獨りすた〳〵歩んで、床〳〵立寄りながら越兼ねる、戀の峠の數居高く」で、門口へ來「ものもう、お賴み申ませう」といひながら、床〳〵謂うも恐はゞ〳〵暖簾越し、」で少しばかり戸を開けて覗き込み、「卒爾ながら、久作樣は內方でござんすか え」といつて腰を屈めると、お光は其方に見向きもせずに、「久作は內方でござんす、百姓の家へ改まつた、用があるならッーウッと這入りなさんせ」と早口にいふと、「左樣なら大阪から、久松といふ人が今日戻つて見えた筈、ちよつと逢はして下さんせ」と何氣なくいふと、床〳〵謂ふ言葉付態形常々聞いた油屋の、」で、お光は頸を傾けて不審の思入をし、點頭いて鏡臺を正面に持つて出て中腰

になり、左の手に鏡を持ち、右の手に手拭を持つて、鏡を拭ひ、それを翳す樣にして、お染の姿を遠くから寫し取り、床〳〵扨はお染と、」で、扨はと思ひ當つた心でポンと膝を打ち、驚いて息をはずませ、眼を見張り、床〳〵悟氣の初物、」で、立上りさま手拭を以て鏡に映るお染の姿を打つ眞似をし鏡を下に置き、俎板の傍へ來て坐り、床〳〵胸はもや〳〵搔き膾」でソワ〳〵と向ふにばかり氣を取られてゐる心で、亂調子に音をさせて大根を切り、尙安心の出來ぬ體で床〳〵俎板押遣り戸口に立寄り、」で俎板を片寄せ、下手の柱に左の手を掛け、二重を下り、納屋口から戸口へ來て、頭から足先迄ぢろ〳〵とお染の姿を見下し、「見れば見る程美しい、あた可愛らしい其顏で、久松樣に會はしてくれ、そんなお方はこちや知らぬ、餘所を尋ねて見やしやんせ」と突慳貪にいひ放し、床〳〵阿呆らしいと腹立聲、」で一寸顎をしやくり、紘に連れて後退りをして、緣側に突當り、クルリと廻つて腰を下し、兩手の指を組合せ、掌を外へ向けて反して、右の膝頭を掛け、矢張向ふを見込んでゐると、お染は何の氣も付かずに、帛紗包を差出すので、ツカ〳〵と行き、引奪るやうに受取り、少し開けて中を見、「コリヤ何ぢやえ、大所の御寮人樣、さま〳〵〳〵といはれても、心が足らぬ置かしやんせ、在所の女子と侮つてか」といつて少し間を置き、「欲しくばお前に」でチユッと舌打をし、「遣るわいなァ」で足拍子をしながら香箱を擲り突け、ピッシャリ戸口を閉め、サッサと二重へ上

つてしまふ。お染は仕方なく、小腰を屈めて風呂敷に人形を捨ひ込んで居る處へ、床〳〵中へッカッカ親子連、出て來る久作」で上手の障子を開けて久作の後に德三郎の久松が、若衆鬘、伊豫染縮緬の著附、淺黄縮緬に黒八丈の襟の掛つた襦袢、黒繻子の帶といふ拵で踵いて來るのを知らずに、お光は向ふを見てウツトリとして居るので、久作は「コレお光、お光、これはしたり」と肩を叩き「エ、何をしてゐるのぢや」といひながらドッカと胡座を作いて坐り、久松に肩を揉ませる。久作と久松との白の間に、お光は立つて二重を下り、緣側に腰を掛けた儘、尙も向ふを見込み、右の手に手拭を持つて、遠くからお染を打つ眞似などをしてゐると、久作が「お光よ、三里をするてくれ」といふので、「宜うござんす、そんなら風の來ぬやうに」と門口へ來て、床〳〵何がな表へ當り眼、門の戸ぴつしやりさしも草、」で戸を引開け、覗き込むお染を兩手で押出し、高箒木を栓張にかひ、床〳〵燃ゆる思ひは娘氣の、細き線香に立つ煙、」で早足に二重に戻ると、お染は花道の附際迄來る。二重では久松に肩を揉ませてゐた久作が、「サア〳〵親子として遠慮はない、艾も肩癖も、大攝で遣つてくれ」と著物を捲け、兩足をへの字態に屈めて前へ出し、兩手を其下にて組み合せ、お光が艾を取つて足に付け、線香の火を移すと、顏を顰め、頭を細く左右に振り、「ムウァッウー、ヒエーッ之はえらい、明日が日死なうと、火葬は止めにして貰ひませうかい……（中略）アッ、、、」と堪へら

れぬ風をすると、お光は「父さんの仰山な、皮切は終でござんす」といふてる間に、お染は紙をまるめて、ソッと内へ投り、其拍子に久松と顏を見合せる。お光は「ホンに風が當ると思や……」といつて、閉めに立ち掛けると、久作は「ハテよいわいの、晝中に欝陶しい、ノウ久松、ソウぢやないか」と話し掛けるので、久松は返事もせず表に氣を取られて、思はず久作の頭を叩き、「餘所見をせずと、しつかりと揉め」と窘められる。久松は延び上るやうにして、「サア餘所見はせぬけれど、覗いて見ては惡い〳〵」と表へ聞えるやうにいつて、床〳〵惡いと眼顏の仕方」で上眼遣ひ、お染に呑込ませる。久作はそれと心付かずに、「何所もお光は覗きはせぬぞや」といつて、一寸自分の前を覗き、慌てゝ前を搔き合せる。それから久松の白があつて、久作、「（前略）灸を据ゑる、それで名さへ久作ぢや」と輕く、「アッ、、、」で、前と同じ身振をし、「我身達も達者な樣に、灸でも据ゑるのが、おれへの孝行ぢや」といふと、お光は手拭で涙を拭き、「オ、さうでござんすとも、久松樣には振袖の、美しい持病があつて、招いたり呼出したり」と向ふを見、「美しい」には殊に力を入れて引張り「其病面が入らぬやうに、闕に大く据ゑて置きたい」と當付けていふと、久松が「コレお光殿、振袖の持病のと、いろ〳〵の耳こすり、はしたない事聞いてゐぬぞや」と眞向になると、「ホ、ホ、異な事がお氣に障つた」「オ、障らいぢや」「コリャ可笑しい、其譯聞くぞや」「いふぞや」と、

互に詰寄つてあらがひ、床〳〵我を忘れていさかいを、」でお光は右の手で下に叩き、線香を持つた儘、中腰になり、示指で久松の顔を指し、調子に乗つて、床〳〵外に聞く身の氣の毒さ、」で思はず久作の頭に線香をつける。久作は「……灸据の代り、喧嘩の行司さすのかい、二人ながら窘め〳〵、」といつて雙方を窘めると、お光は手拭で涙を拭き、「父さん、構ふて下さんすな、今の樣な愛想盡しも、病面めがいはしくさる」と伏目になる。久作は「モウ〳〵兩方共、おれが貰ふた〳〵」と兩手を押へるやうに翳し、立上つて、「中直りが直に取結の盃、髪も結ふたり鐵漿も附けたり」と切り「湯も使ふて花嫁御」と大きく、「コオレ」とお光の肩を輕く叩き、床〳〵作つて置けと打笑ひ、」で、泣入るお光を引起す途端に、外のお染と顔見合せて吃驚し、直ぐに氣をかへ、「ウム」と點頭き、床〳〵無理に納戸に連れて行く、」で「サア來い」とお光の左の手を抱へるやうに引張つて奥へ入る。そこで床〳〵其間遲しと駈入るお染」でお染は枝折戸の押へを外し、二重へ駈上り「コレ久松、逢ひたかつた〳〵」と久松の下手に兩袖に顔を押し當てゝ泣き伏すと、久松は兩掌を膝の上に重ねた儘、奥へ憚る風情で覗き込む樣に、「アヽ聲が高うござります、(中略)譯を聞かして下さりませ」といふと、床〳〵問はれて漸う〳〵顔を上げ、」で、涙を拭ひ、「譯は其方に覺えがあらう、私の事は思ひ切り、山家屋へ嫁入せよと」で、向ふを見、「殘して置きやつた、コレ此文」と、懷中から文を出して見せ、「其

方は思ひ切る氣でも」と切り、「わァーしや」と引張り、床〳〵何ほでも」で、久松の右の肩と自分の左の肩とを摩り合せ、「得ー切らぬ」で右の手で文を叩き、「ハヽヽハ」と顔を少く振りながら泣き落し、泣音を知らせじと文を咬へ、「餘り逢ひたさ懷かしさ」で、文を擴げて見せ、「物體ない事ながら」で、右の掌で撫で、「觀音樣をかこつけて」で、文を疊んで中腰になり、兩掌を合せて、其間に文を挿んで拜む形をし、「逢ひに北やら南やら」で、疊んだ文の兩端を兩手でつまむやうに持つて向ふを見、兩袖を合せて立上り、下手から後へ廻つて久松の上手に來、右の手で左の袖口を引き、左の手を左の袖に入れて袂を突張り、體で思に沈んでゐる久松の肩を押し、「知らぬ在所も」で懷手をし、元へ歸り、左の肘を袖の内で張り、少し反り具合に歩いて下手へ來、「厭ひはせぬ」で坐り、體から科をして兩手を突いて辭儀をし、「二人一緒に添はうなら」で、兩手を袖口へ引込めて、兩袖を摩り合せ、「飯も炊うし」で勝手の方を指し「織紡ぎ」で、左の袖を使つて縫ふ形をし、「どんな貧しい暮しでも」の切に、又兩手を突き、「わしや嬉しいと思ふもの、女子の道を背けとは」と、總體早目にいひ、床〳〵聞えぬわいの胴慾と、」で、左の手で久松の右の膝を押し、床〳〵恨みのたけを友禪の、振の袂に北時雨」で、また下手から後を廻つて上手へ來、右の手に右の袂を持つて久松を打つ眞似をし「晴間は更になかりけり」で、元へ戻り、「ハァ、、、、」と泣落すと、久松はモシと押へて立上

つて奥を覗き、お染は袖口を咬へて泣伏す、床〳〵曇り勝なる久松も、背摩でさすり聲をひそめ、」で右の手で泣入るお染の背を撫で、「お恨みは道理なれど」云々の白があつて、「山家屋へ嫁入せよ」と勸めると、お染はそれなれば覺悟は疾より極めてゐると、用意の剃刀を咽喉に突き立てやうとするので、久松は後から抱へるやうに刄物を捩ぎ取り、「そんなら貴方は眞實、命に替へてそもれほどまでに」と尋ねるので、床〳〵思ふが無理か女房ぢやもの、」で、下から久松の顏を見上げ、互に手に手を取り交し、次にそれを解き、別れて背中合せになり、俯伏に泣く、床〳〵始終後に立聞く親、」で、久作が奥から「其思案惡からう」と呼び掛けて出て來るので、ハッと兩人が立掛けると、「大事ないお染樣、久松、一寸下に居や」と留めるが、久松はハイと返事をしながらも、尙腰が落付ぬので、「ハテマア下に居やいのう」と冠せてキッパリいひ、久松とお染の間に住ひ、これから久松の家筋から油屋へ奉公に遣つた譯をいひ、持つて來たお夏清十郎の道行本を藉りて意見をし、「お光めが櫛笄迄賣代なし、漸くつくつた、さつきの銀」で洟を啜り、「爲さぬ仲でも親子と謂ふ、名があるからは、肉身分けた子も同然」と少し早目にいひ、「可愛うなうて」と切り、「何とせう」と聲を潤ませて伸し、絃に連れて「オオ、」と泣き、又洟を啜り、「モシお染樣ではない、此本のお夏とやら」で下手を向いてお染に對ひ、「清十郎を可愛がつて下さつたのは」と、上手に打伏しになり、左で鼻紙

を眼に押當てゝ泣いて居る久松を指し、「嬉しい樣で恨めしい」と、長く引張り、「聞いての通（中略）病苦を耐へるアノ婆に」で、奥を指し、「今の樣な事聞かしたら、何と命がござりませう」と强くいひ、手拭で涙を拭き、「若い水の出端には（中略）戸は立てられぬ世上の口」で、頭を左右に振り、「アノ久松めは」で、久松を指し、「榮耀がしたさぢや」で、右の手に手拭を摑んで向を指し、「みな慾ぢや」で兩手を揃へて前へ出し、床〳〵在所は勿論、大阪中に、」で向ふを見込み、「モシ」とお染に思入をし、床〳〵指さゝれ、」で中腰になり、兩手を前に出し、掌を下に向け、床に乘つて右の掌を搦ふやうに反し乍ら横に右へ持つて來ると同時に、左の手を左の腰の邊迄引き、床〳〵人交りが、」で又久松を指し、床〳〵なりませうぞいのう、」で、洟を啜り、「コヽヽコオレ」と膝頭に兩手を掛け、交ひ違ひに疊みかけてお染の傍に詰め寄り、「爰の道理を聞き分けて」で、思はず下を强く敲き、驚いて奥に思入をし、久松とお染の手を取つて自分の傍に引付け、其中で「思ひ切つて下され、頼みます〳〵」といつて手を合せ、更に下手を向き、「コレ娘樣、御寮人樣、貴女よう物を思うて見さつしやりませ（中略）女の道でござりまするかア」と手强く、又上手を向き、「久松も其通り（中略）侍の子か、人間かア」と左の手で下を叩き、「返事次第で思案がある」と屹となり、「サどうぢや返事せい、これ久松、モシ娘樣と」促すが、二人共只嗚噎るばかりで返事をせぬので落膽して、「へ、

へ、へエ」と泣き落し、「是程謂ふても答のないのは、コリヤ二人ながら不得心ぢやなァ」といふと初めて兩人が思ひ切るといふので少し乘り出し、「エ、そんなら貴女は久松の事を思ひ切つて下さりまするか」と尋ね、久松も「私も弗つり思ひ切り、お光と祝言致しまする」といつて床〳〵互に眼と眼に知らせ合ひ」で、雙方で思入があつて、お染は左の袖の影に右の示指で、久松は左の手に懐紙を持つて、咽喉を突く樣をし、諜し合せて諸共に久作に背を向け、久松は上手、お染は下手に泣伏すと床〳〵心の覺悟は白髪の親父」で、久作は事柄が濟んだれば、お光と祝言の盃をさせうと聲高に振り返るやうにして、「お光やく〳〵」と呼び立て、此方から出掛けて行つて「サ、ちやつとここへ來い、コレ早う來い、何をして居るのぢや、サァこつちへ來い、エ、か、待て待て」と云ひながら奥からお光の手を執つて舞臺へ連出すと、(此間に久松は下手へ來て、お染の上手に住ふ) お光は萠黄黑持裾松竹梅の振袖の著附、桃色縮緬の帶で、久松の上手に伏目に悄然と坐ると、久作は「(前略) 改まつた綿帽子、欝陶しからう、どうおれが取つて遣らう」と、床〳〵脫す途端に笄も、ぬけて惜げも投島田、根よりふつゝと切髪を、」で「コリヤどうぢや」と尻餅を搗き、兩手を後へ突いた儘呆れた態で見上げ、次で起直つて頭を垂れると、久松とお染も同じく驚いた樣で、互に顔を見合せ直ぐ下を向く。床〳〵いふを押へて、」でお光は右で久作の左を押へ、左で手拭を持つて涙を拭ひ、

「コレ申し父樣もお二人樣も、何にもいふて下さんすな」と、紘に連れて、「ハァハ、、、」と泣落し、「最前から何事も殘らず聞いてをりました」で右の手を突き「わたしや弗つり思ひ切り」といひ「エ、」と久作が驚くのを冠せるやうに、「サ、切て祝うた髪形」といつて右の手を切髪に觸れ、床〳〵見て下さんせ」と兩肌を、で一寸招く形に右の手を擧げて久作に思入をし、床〳〵脫ぎ下着は白無垢の、頸に掛けたる五條袈裟、」で、上着を脫ぎ、白絹の振袖、淺黄のあんこう帶、黑の袈裟となり床〳〵浮む涙は水晶の、玉より淸き貞心に、」で、左の膝を立てゝ右の手に珠數を持ち、懐紙を口に咬へ、顔を顫はし、それを取つて眼に當て、其儘泣き伏すと、床〳〵今更なんと詞さへ、涙呑み込み」で久作はにじり寄り、「エ、娘、何にもいはぬ、コレ此通りぢやく〳〵」と手を合せ「女夫に仕たいばつかりに、そこら邊に心も付かず、蕾の花を散らして退けたは」とさも殘念さうにいひ、一寸向ふを見、床〳〵みんな己が鈍なから、」で、兩手を膝につき、頸で科をしながら己の姿を見、右に手拭を摑んで自分の顔を指し、床〳〵赦してくれも口の中(下略)」で、又手を合せると、お光は兩手でそれを解き、久作に顔を押當てゝ泣き伏し、次で顔を擡げ、「アノ冥加ない事仰りませいなァ」と紘に連れて泣き「(前略) 嬉しかつたはたつた半時」といつて、懐紙を眼に當て、床〳〵無理に私が添はうとすれば死なしやんすを知り乍ら、」で、それを使つて久松とお染の方を指し、「どう盃がなりませ

うぞいなァ」で、中腰になり、手拭を擴げ兩手を指にて摑むやうにして盃の形を見せ、それを右の掌で打ち、踉めく樣にして外し、其手拭を眼に當て、崩折れて泣く。此間に秀調の後家お常が丸髷の鬘、小紋縮緬の着附、黑繻子の帶、鶯茶の襦袢襟、白縮緬の帶上げの拵で、供の男に包を持たし、屋體の裏手より廻つて門口へ來、此場の樣子を聞いて居る。二重では、床へ見聞くにつらき久松お染、南無阿彌陀佛と自害の體」で、お染は剃刀、久松は下手の壁際に掛けてあつた鎌で自害をしようとするので、お光は上手でお染を、久作は下手で久松を押止め、思ひ止らずば、親子が共に玆で死ぬると謂ふので、床へ義理と情と恩愛の、搾木にかゝる久松お染（後略）」で、死ぬ事が出來なくなり、諸共に泣き倒れる。それから、「どうかお染を送り屆けたいものだ」といふやうな久作の白があると、門口から、「それは母が受取ませうわいなァ」と呼掛け、合方になり、お常は木戸を開けて正面へ來る、（此間にお光は奥へ入る）と、お染はハッとして、「お前は母樣」といつて術ない思入をする。お常はそれに構はずに、「御免なされて下さりませ」と會釋して、供から紫の風呂敷包を受取り、二重へ上つて下手へ坐り、「コレお染、野崎參り仕やつたと聞いて（後略）」の白があつて包を解き、杉折を久作の前に差出すと、久作は辭退をし、兩手で押戻す拍子に床へ中よりぐわらり　以前の銀、」で、折を落すと、中から銀が出るので、驚く久作をお常は押へて、「ナァ最前に渡

した此銀を（後略）」といつて無理に納めさせ、「取込中長居は無遠慮、もう御暇致しませう」と立掛けると、久作も「（前略）お辭儀致すは却つて無躾、せめてものお土產に」と立つて二重を下り、枝折戸を開き、下手へ來て、床へ今を盛の梅の花、弗つと折て」で枝を折り取り、元の座へ戻り、「大事に勤めて此御恩、忘れぬ證」と一寸辭儀をしてそれを差出すと、「オヽ心有り氣な此早咲（中略）盛の春を待てといふ、二人へのよい敎訓」といつて久松と娘へ思入をし「（前略）コレ久松、そなたは堤、お染は船、別れ〳〵に戻るのが、世上の手前心の遠慮」といふので、久作も「なる程左樣でござりまする、お志ぢや乘つて行け」と久松へ、「娘は船へ」と鉛々に思入があり、床へ親々の、詞に否もいひ兼ねる」で、久松お常は久作に辭儀をして立上り、床へ鴛鴦の片羽の片々に」で、舞臺が廻ると、直に合方になり、水の音をかむせ、舞臺は正面腰高の草土堤の蹴込、上手は假花道に通ふだら〳〵坂、下手は本花道を川に見立てゝ船の足場、其下に川船を一艘繫ぎ、土堤下から揚幕迄浪布を敷き、土堤下には紅白の花を付けた梅の立木が三本、其奥に家の窓を見せ、梅の根下には駕籠一挺を置き、新十郎の駕夫がすつぽりの鬘、黃八丈のねんねこ、千草の半股引、紺の腹掛三尺で駕籠に腰を掛け、腕組をし、其下に翫助の相棒が袋付の鬘、夜具縞の褞袍、紺の腹掛に三尺の拵で蹲んで煙草を喫みながらこれに話して居、下手土堤下の船中には勘五郎の船頭がすつぽりの鬘、

茶で濃く染返した肩入を刺した盲縞の着附、盲縞の腹掛、千草の刺した股引に三尺で寢そべつて居る等、總て久作住居裏手の體。道具が留まると、駕籠夫は「かう手間の取れるのは、大方梅でも見てござるだらう」などいつて川の方を見、船が流れるといつて船頭を起すと、船頭は折角快く寢入たものを、起したと腹を立て、二言三言双方の間に押問答が有て、駕籠屋は息杖、船頭は棹を取つて立掛かると、上手から供が歸つて、もうお歸りになるといつて止まるので靜まると、同じく上手から久作、久松、後家、お染が出て來、お光は窓の障子を開けて半身を出した態で見送る。そこで床〳〵別れて二人乘移れば、」で、後家と娘は辭儀をして舟に乗る。其間にお光は右の肱を窓に持たせた儘、「お染樣御無事で、兄樣健康で」と、シンミリとした調子でいひ床〳〵早改まるお光尼、」で、後向になり、涙を拭ひ、窓を閉めて舞臺の上手へ出て來る。床〳〵哀を餘所に水馴棹、船にも積まれぬお主の御恩、親の恵の冥加ない、」で、久松は久作に向ひ、手を合せ絃に乗つて、「取分けてお光殿、斯うなりくだるも先の世の、定まり事と諦めて、お年よられた親達の、介抱頼む」と懇にいつて矢張お光に向つて手を合せ〻床〳〵泣く音伏籠の面ぶせ、」で駕籠に當つて廻り、後向に立身の儘、駕籠の上に右の肱をつき、掌で額を支へて泣音を忍ぶと、お光は其間に下手川邊に來て蹲む、床〳〵船の中にも聲上げて、」で、お染は船縁に手を掛け、見上げるやうに、「よしないわしゆゑ、お光樣の、

縁を切らしたお憎しみ」といひ「モシ堪忍して下さんせ」と手を合せ、涙を拭くと、お光は同じく絃に乗つて、「物體ないお染樣」と船の中を覗き込んでいひ、「浮世離れし尼ぢやもの」で、我姿を見「そんな心を物體ない」で右の手に持つた珠數で兩方の肩を交ひ違ひに拂ひ、「短氣を起して下さんすな」と押へる。久作も一足程前で、「オ〻、娘がいふ通り、死んで花實は咲ぬ梅、一本花にならぬ樣に、目出度い盛を見せてくれよう」と涙聲。久松「隨分達者で」お光「お前も無事で」母「さらば」皆々「さらば」と一禮し、これから床の連れ彈きになり、「さらば〳〵と遠ざかる」で久松は坂を下り、假花道の附際で駕籠に乗り、駕籠夫は先右の肩を入れ、絃に連れて手と足を交ひ違ひに揃へて出し、船頭は棹を張つて船を遣る。床〳〵船と堤は隔つれど、」の間に一寸久松とお光とが辭儀をする事があり、「思ひ合ひたる戀中も」で駕籠夫は駕籠を下し、弦に乗つて片足宛出して草鞋の紐を締め直し、兩手をはたき、肩を左に入替へ、前よりは少し早目に足と手を揃へて出し、床〳〵義理の櫂、情のかせぐひ、」で、久作とお光は中腰の儘手を取り交して嘆き、お光の涙が久作の襟元に落ちると久作はハッと胸にこたへた心で手を解き、分れて上手へ、お光は下手に來て後向で泣き、再び正面に戻り、床〳〵駕籠に比翼を引分くる、」で、本釣を打込み、久作は始終向ふを見送る心で、土堤際迄來て、思はず足を外し、尻餅を搗くのが、木の頭で、「モシ」とお光が押へ、手を取つて引起し、向

へ思入があり、船と駕籠で名残惜し氣に見返る模様、床の三重で幕になる。

中村座壽狂言　猿若

明治四十年六月於上野博覽會演藝所、十五代目中村明石、四代目中村勘五郎所演

片シヤギリ打上げ、木なしで幕が開くと、本舞臺一面の能舞臺。向ふ松を描きたる鏡板、續いて上手に竹を描き、臆病口がある。下手より橋懸の勾欄を出し、淺黄に赤の揚幕。正面に赤毛氈を敷き長唄連中四人居並ぶ。こひ合になつて橋掛より勘五郎のワキ大名、鬢の低い油附の髱、白い襟、四ツ杵の紋付きたる納戸熨斗目入の著附、長社衿は柿色で、上は肩に白の引兩を出し、下は白く束ね稻の模樣、脇差を挿し、扇を前に挿して、舞臺正面の先へ出て辭儀をして「罷出でたる者は、杵屋の何某と申す大名でござる、某が召仕に心の利いた賢い者がござる、彼が名を猿若と付けてござる、中々面白い者でござる、この間暇も乞はず、伊勢參宮いたしてござる、戻つたならば、ざれながら、屹度異見を加へようと存ずる、エーイ〳〵」といつて、上手のワキ座へ行つて葛桶に掛ける。唄〳〵初春や、君が小袖をきそはじめ、山も色付きや、やーア。で明石のシテ猿若が橋掛から、

元祿若衆鬘、中央に舞鶴を繡出したる緋縮緬の手拭を冠り、頤で結んで縮つて下げ、淺黄襟、淺黄の手筒を掛け、隅切に立銀杏の紋ある緋縮緬に白と淺黄の銀糸の太白で繡をした立波裾模様の著附織物の帶、丸に三ッ柏の定紋を付けた黒羽二重に金摺露芝の裾模様の袖無し羽織、その上に緋の房附の打紐（一丈二尺、俗に振綱ともいふ）を三つ卷き、殘りを左の肩から掛けて右へ垂し、金地に淺黄青海波惣模様のある扇を前に挿し、淺黄地に銀摺青海波模様の脚絆、鬱金の足袋で出で、橋掛で兩手に打紐を持つて、左右へ三つづゝ送り、一つ廻つて、唄へとつと奥山の猿若もおふやれ、心がいとゞわんざくれ、心ときめくうかれ猿若」までに舞臺へ來て、「これは今日の猿若でござる、誠に一夜開いてござれば、何處もかも賑々とした目出度い春でござる、こゝに私のたのふだお方は、杵屋の某と申す大名でござる、この間斷りもなく伊勢參宮のいたしてござれば、定めしお待兼でござらう、急いで參らう、エイ〳〵」と右から舞臺を廻り乍ら、「定めしお樂みすぎてござれば、お話のたびには思ひ出された事もござらう」で元の處へ來て、「參る程にこれぢや」と上手向に仰向いて門を見る科をし、「久しう見ぬ間に御門の御普請があつたかして、何處もかも綺羅美やかな事でござる」と見廻し、「どりや參らう」と入りさうにして考へ、「イヤ入られぬ、たのふだお方は、殊の外ざれ深ふお入なされば、滅多には入られぬ、どうぞ彼方を笑はせ申す工夫がありさうなものぢや」

と下手向になり、少し屈んで考へ、「オットあるある、聲色を變へてやらう」と扇を開きながら正面になつて、扇を左に翳して顔を隠し、「物もふ、案内もふ」といつて、隠れる心でシテ柱の方へ寄る。ワキは下手向に葛桶へ掛つたまゝ、「表にものもうがあるさうな、誰ぞ居らぬか、珍才は居ぬか」で居なりのまゝ奥を向いて扇で左の掌を叩き、德八は居らぬか」と正面を向いて扇で同じく掌を叩き、「誰も居ぬと見える、然らば己が行かずばなるまい」と立つて中央へ出て、「どーれ」と大きく云ひ、四邊を見て、人の居ない思入で「これは粗相な、隣屋敷であつたと見える」と元の座へ戻どらうとすると、シテが其後から付いて、「ものもふ、ものもふ」と忙しく云ふ。ワキは驚いて、「さてま嚴しいものもふかな」と又出で、「どーれ」といふ。シテは又シテ柱の方へ寄つて居る。キワは四邊を見廻して、「どうでも聞き違へであつた」と又座へ戻らうとすると、シテが後から「ものもふものもふ」と三度目に足を踏んでいふと、ワキは又出で、「先づ目に見えぬものもふ、お通なされい」でトンと右の足を踏出してそれにかかり、左の手を開いて右の扇の手と共に上手へ出す。シテは左の扇で猶顔を隠し、「それへ通りまする程のものもふでもござりませぬ」ワキ「して何處でお目にかかりまするな」シテ「御臺所のお釜の前で、一寸お目にかゝりませう」ワキ「はて下素張つたものもふかな」といつて正面を向くと、シテは又「ものもふ〳〵〳〵」と仰山に云つて足をトンと踏み

シテ柱の方へ寄る。ワキが「ハヽア聞えた、いつもの猿めぢやな、嬲つてくれう」と扇を前に挿して、右の手を伸し、犬を呼ぶやうにして「來いく〳〵〳〵〳〵」といふ。シテは徐々と出ると、ワキが「表には誰もゐぬか」といふ。シテ「表に馬や乘物、侍八人、大將共九人なり」といふので、ワキ「ハテ仔細らしい」といつて正面を向くと同時に小鼓のあしらひで、シテは「龜井がのうだる盃を、武藏坊へとお獻しある」と謠の拍子でいふと、ワキも拍子を取つて、「さてその次の盞を何方へお獻しある」といひながら扇を開き、右の足を出してかゝり、扇を持つた右の手を、シテの鼻の先へ出すと、シテ「やれこりや、それは知りませぬ」と扇でワキの鼻へしつぺいを當てる。ワキ「あいたく〳〵」と左の手で鼻を押へ、「己れ大名を鼻くたに仕居つた、それへ出おらう」シテ「御許されい」ワキ「これ見おれ、鼻の穴が一つになつた、憎いやつの八幡許さぬぞ」といふ。シテはワキの鼻を下から覗きながら、「若し矢張二つござりまする」ワキ「何處に、これ見おれ鼻の穴が一つになつたわ」と怒る。シテ「はてさて二本の指でいろふてごらうじませ」といふ。ワキ「どれ」と右の二本の指を鼻へ當て、取つてそれを見、「何樣二つあつた、ハヽヽヽヽ」と笑ふので、シテも笑ふ。ワキ「時に猿よ、この中は己に隱いて何處へいたぞ」といつてシテと向合になるので、シテ「この間御前に隱しまして、伊勢參宮をいたいてござりまする」ワキ「何ぢや伊勢參宮をいた

いたか、定めし道中は面白かつたであらうな」シテ「面白い段ではござりませぬ」といつて正面を向くと、ワキも同じく正面を向く。シテ「先づ御威勢を借りまして、乘物を綺羅美やかに飾らせ、その上へ三つ蒲團緞子紗綾縮緬」といひかけると、ワキ「菰蓆は敷かなんだか」といつて扇でシテを指す。シテ「ハヽヽヽヽ何を御意なされますやら」ワキ「それからどうぢや」シテ「その上へ私がしやんと乘りまして」と打紐を兩手で握つて馬に乘る形をし「五十三次をしやんぐ〳〵と乘りまする」で居處で歩く振りをする。ワキ「して〳〵」と聞くと、シテ「さうすると兩側には美しいよね共が」と云ひかけるのを、ワキ「アヽこりやく〳〵そのよねとは何の事ぢや」シテ「よねをお知りなされまぬか」ワキ「いゝや知らぬ」シテ「よねとは女郎の事でござりまする」ワキ「ハヽアよねとは女郎か、そのよね共が何としたぞ」シテ「その美しいよね共が赤前垂に赤手拭」で兩手を開いて膝の邊に下げ、直ぐそれを顏の脇へ上げ、「小褄をしやんと取つて」で右で褄を取り、「彼方の方へはしやならく〳〵此方の方へはしやならく〳〵」で左の袖口を持つて振り乍ら左右へ二三歩出て、「なう泊まらんせく〳〵奥も廣ふござります、合宿もなし、水風呂も湯も沸いて居ります」と話し「これなア馬子衆、その馬此方へ引込まんせ、これなア馬子衆」と馬子を招く形をして「おゝ面憎やなどゝ申されました」といつてワキの方へ向くと、ワキ「面白いく〳〵そんならそのよね共が赤前垂に赤手拭

小褄をしやんとかう取つて彼方の方へしやなら〳〵此方の方へしやなら〳〵」とシテの眞似をする。シテは兩手を出し、ワキの後から付いて、「これはならぬならぬ」とその動きに連れて歩く。ワキ「なう泊らんせ〳〵」と右の手で招き、「奥も狹ふござります」と兩手を左の方へ出し、「溫い水風呂もあり」と兩手を前へ出して風呂の形を見せ、「腐つた飯もござります」と兩手を右へ出し、シテと顔見合し、「ハヽヽヽ」と笑ふ。シテ「何を御意なされまする」ワキ「それから後はどうぢや」と聞く。シテ「それからその美しいよね共が」と云ひかけてワキの顔を見て、「もう話はこれぎりに致しませう」と下手へ行きかける。ワキ「これはいかな事、面白ふなつて話さぬとはどうぢやどうぢや話せ〳〵」シテ「それから後は、イヤ申しますまい」ワキ「はて一つ話すも二つ話すも同じ事ぢや、後が聞きたい、話せ〳〵」シテ「話したうはござりまするが、話しましたら後で貴方がお浦山しがりなされうと存じまして」ワキ「いゝやさうではない、話して聞かせい」シテ「そんなら話しませう、その美しいよね共の中から、我等へ詞をかけましたぢや」ワキ「シテその詞は何と」と調子を付けていふと、シテも「ものと」と同じく調子を付けて云ふのが鼓の扣へで、シテは女郎の心で兩袖を抱き、ワキと背中合せになり、唄〳〵主は知らねど。で一寸退くと、ワキは囃ける。唄〳〵格子からちよいと招ぐ。が大小三地つゞけで（この内ワキは葛桶にかける。）シテは右の足を出し

て右の手を伸して招き、唄〳〵然も鹿の子の、で左の足を出し、左の手を伸して掌を鏡に見立て、右の手で白粉を塗る心で、顔の前を二三度撫で唄〳〵ずんど振袖が、で左の袖口を持つて振り唄〳〵ちよいと招ぐさ、で三足出て招き、合の手で兩手を腰へ當て、右から一つ廻つて一寸ワキの方を見、唄〳〵ずんど振袖がちよいと招ぐさ、を一杯にワキ座へ行つて、葛桶を蹴つて元の處へ逃ける。ワキは前へ轉げ、起きながら「あいた〳〵、一度ならずも二度までも、大名を皺くちやにしおつたな、八幡許さぬ、それへ出居らう」シテ「これは粗相御許なされませ」ワキ「いゝや許さぬ、それへ出居らう」と舞臺中央へ出て、扇でシテを指すと、シテ「いや、それには好い呪を習ふて參じました」ワキ「口巧者な奴でござる」で扇を戻し「早く呪をらう」シテ「然しその呪は、私が唱へまする後で、御前が仰らねばならぬ事でござりまするが、お覺えなされまするか」ワキ「何といふ呪ぢや、いふて聞かせい」シテ「はて強いお腹立かな、私が輪になれ輪になれ申しますると、御前には、何輪になれやと御意なさる分の事でござりまする」ワキ「さういへば直るか」シテ「立處に不思議が見えます」と一寸辭儀をする。ワキ「然らば早く呪をらう」とシテへ背を見せる。とシテが「何處でござりまする」と聞くと、ワキ「ここぢや」と袴腰を押へて前へ屈み、シテの顔の前へ腰を出す。シテ「ハテ、不作法な」と一寸顔を反け、「こゝでござりまするか」と腰を叩くと、

ワキは前へ蹌け、「あいた〳〵早う咒へ」シテ「畏りました」といつて打紐の房でワキの腰へ輪を描きながら、「輪になれ〳〵」といふと、ワキは屈んだまゝ「何輪になれや」といふ。シテは「も一つ返して片輪になれや」と兩手でワキの腰を突くと、ワサは又前へ轉ける。シテは下手へ逃げ、時時ワキを見ては笑ふ。ワキは起上りながら、「あいた〳〵、もう許されぬ、それへ出をらう」シテ「これは不調法な、御許されませ」ワキ「手打ぢや、直らう」と右の足を踏出してかゝり、脇脂の柄へ手をかけ、シテを睨む。シテ「ハハア」ワキ「許さぬぞ」シテ「ハハア」と笑ひながら屈む。ワキは柄から手を離し、「馬鹿奴、嘘ぢやわ」シテ「嘘でござりまするか」ワキ「ハヽヽヽ」シテ「私はつと存じました」ワキ「その後はどうぢや」「何がさて、それから岡崎の橋へ掛りまする」で右の手を上げて山の形をし、「川からは綱を引上普請ぢやと申して、山からは材木を下しまする」で右の手を上げて山の形をし、「川からは綱を引上けまするで、右の手の紐を引いて網の形をし、「その上に音頭取がしやんと上つて」で體を極め、「面白ふ音頭を取つたでござりまする」と話すと、ワキ「シテその音頭は何と」と調子を付けていふとシテも「ものと」と同じやうにいふ。こひ合になり、ワキは葛桶に掛る。唄〳〵吉田の象好法師が」で扇を翳して下手へ指し、二足戻り、唄〳〵敎へにも」で右左と二つ踏み、唄〳〵下戸ならぬこそ」で扇へ左の手を掛け、二度酒を呑む振をし、唄〳〵をのこはよけれ」で醉つた振で一寸蹌け、扇を左へ

取り、右の手を伸して二三度撫でるやうな形をすると同時に、それに連れて足を上げ、(その次の唄の「徒然草にかゝれしも」から「二世や三世や七世まで」までを拔く。)唄〳〵變らじものと契りし中を」で扇を抱き、三足入れ違ひに出て、唄〳〵ふつつりはつたり捨てられた」で足拍子を踏んで前へ出て唄〳〵引くものに取りては、山で挽くのは材木、川で曳くのは網の手、車に綱を引掛けて、えいさらさらりえいさらさらり、またも引くもの投頭巾でお茶を挽く、小唄に乘せて三味を彈く」で三味線を彈く手附をすると、鼓一丁入り、唄〳〵牛のくん車に」で兩手で前へ大く輪を作り、唄〳〵我が思ひをぶん乘せて」で兩手の示指で右左右と鼻を指し、唄〳〵何と引くとも、引くに引かれまいぞ、」で兩手で打紐を右の方へ寄せて持ち、右の足を出して二度引き唄〳〵えい〳〵で右で房を三つ振つて、右の足をトンと踏み、體を直して右から一つ廻し、唄〳〵何程引くとも何ほにも」で右に持つた房を翳して左に廻はり、唄〳〵引くに引かれぬ面白や」でドン〳〵と踏み、輕く左右後と飛び、摺足で前へ出ると前の鳴物止り、シテ「またも引くもの、猿曳がおぢやつて、面白ふ舞はせた」といふと唄二下り〳〵猿は山王で」大小三地つゞけ、唄〳〵まさる目出たき踊るが手元」と踊りながら下手へ行き唄〳〵辰巳午や春の駒は」で左の手で馬の口を取る形をし、上で結び、唄〳〵絹卷そだち」で握つた兩手を左右へ下して返すと同時に、飛び乍ら足を割り、唄〳〵小石小川、さをの水上で、左右の示指で

向を指しながら右から廻り、唄〳〵南表の泉水廊下」で両手を膝に掛けて向ふを眺め、唄〳〵萬里が間は恵方たり」で丹前姿をする、唄〳〵さて漕ぐ舟の御手を見れば、黄金の櫓を立て、十二の船夫が」で右の足を前へ出し、右の手を握つて出し、左の手で櫓綱を掛ける形をし、握つて右の手の上に乗せ、漕ぐ眞似を三つし、唄〳〵はらり〳〵と打てば八つゝ拍子は揃ふたり、」で左右で六拍子を踏み唄〳〵東下りの殿は持たぢな、東下りの殿は持たぢな」で右左と丹前姿をし、唄〳〵嵐吹けとはさアさア」でトン〳〵と踏み、唄〳〵更に思はじ、更に思はじ」で居直つて極り、唄〳〵獅子と申すは」で前へ出て三つ首を振り、唄〳〵すみ〳〵〳〵すみ〳〵〳〵、住吉八幡、普賢文珠の召されたり」で両手を腰へ當てゝ、節に乗つて右から廻つて前へ出て〳〵乗つたりや猿若、囃したりや君達」で足拍子を踏み、鼓の拍子が上ると合の手になり、獅子の段を踏むが、(この前に「天竺の天の川原で、細布織りて着せまいらしよ、えい〳〵、細布織りて着せまいらせう」といふ唄を抜く)これには鶴の舞、三日五拍子十五の曲などの祕傳があり、この内祕傳ある三味線の合の手と大小の合方と交々ある。合方の終りに打紺の房を使つて裏向にワキを葛桶から呼出すと、ワキも體を振りながら出て來てシテと向合ひ、二三度双方で體を交してワキは扇を開き乍ら附廻り、シテは下手から足拍子を踏みながらワキを押して行き、又足拍子を踏み、今度は表向になり、右の足を上げて両手で招くと、ワキは

左の袖を持ち、右の扇を前へ出し、體を振りながら中央まで出る。シテが一寸ワキの鼻を見、右の手を出して鼻毛を抓まみ、大小五つ頭の合方に合して抜くと、ワキは大く嚏をする。合方止り、両人「ハヽヽ」と笑ふ。ワキ「面白かつた〳〵、此の上は祝ひに目出たう盃を遣はさう、參れ」シテ「ハヽア」ワキ「參れ」シテ「畏つてござりまする」と両人入替り、ワキから先へ橋掛へ入る。片シヤギリを打上げて幕。

今度勤めた長唄連中の上から並び順は、三味線五代目杵屋勘五郎、唄三代目岡安喜三郎、三味線十三代目杵屋六左衛門、唄六代目芳村伊十郎、勘五郎の上に後見として十三代目杵屋喜三郎が控へた。

猿若の狂言に就て

これといつて事新しくお話申すほどの事もありませんが、元來この「猿若」と「新發意太鼓」と「門松」の三つは、私共元祖傳來の狂言でして、他では一切演れない事になつて居るのは御承知の通です。そこでこの「猿若」は私共としても代替とか、百年の壽とか百五十年二百年とかいふ

折でなければ、先代までは餘り演らなかつたものでしたが、私は今度で恰度五度目です。最初は明治十七年に鳥越座で十三歳の折、父から傳へられて勤めましたが、その時はワキが故人仲藏でして唄の人は一寸思ひ出せませんが、三味線は先代の六左衞門と六四郎の父の三郎助でした。それから次が三十三年に明治座で演じた折は、ワキが勘五郎で、三味線は植木店の杵屋兄弟でした。その後大阪で演藝會があつた時、植木店兄弟が行つたので、丁度好い機會と勸められ、この一行に加はつて浪花座で一週間、續いて京都の南座で五日間演じ、ワキは粂三郎でしたから、處々略した處があつて二十五分間位でしたが、今度は又勘五郎で三十三分位はかゝりました。最も徳川家三百年祭の折は、餘興に江戸式の物を集めるといふので、榎本武揚さんからのお話があつて出しましたが、これは一日限でした。衣裳は型の方に載せてあります通、昔から一定してをるものを用ひます。これはその都度新調する事に致してあります。

一體この狂言は大間なもので、踊といつても古風なものですから、後世のものゝやうに格別手の複雜入つてる處もなく、至つて間勝といふ方に出來て居ります。終に〳〵「天笠の天の川原」云々の唄があつて、それから獅子の段を踏むのが本來ですが、こゝは極く沈んだ調子で、一度止つてから靜かに舞ひますもので、敎はつてはありますが、父が生存中どうもあすこは趣が薄いやうだから拔いてやれ、折があつたら演つて見るも好からうと申した事がありました。そこで今度も〳〵乘つたりや猿若、囃したりや君達」で直ぐ獅子を踏みますが、これには種々と傳授事があるので、ここは三味線ばかりですから、その譜でも書いて、それに伴つて振の手を書かなければ、型として取るのは至難で、その上間が多いので、一定はして居るといふものゝ拍子ですから、猶更云ひ現すのは出來難いので、祕傳物だからといつて敢て隱す譯ではありませんが、右の次第ですから、ここだけは別項にある通、あゝいふ名目があるといふだけにして置きませう。それからこの踊は打紐を遣つて演りますが、あれは明歷三年に初代勘五郎が京都の御所へ參つて演じた節、羽織を締める帶を忘れましたので、簾に下つて居た緋の太い房付の飾紐を取つて、帶の代りに間に合せに腰へ卷いた處が、紐が長いので餘つて遣り場に困つて左の肩から右の肩へ掛けて垂して出たので、踊にも紐がぶら〳〵した處から、それを持つて踊つたので、それ以來例となりましたが、本來は手で踊るのでした。

それにこの猿若は三味線の方には大分難しい諚がありまして、只今でも植木店兄弟の外、一切彈く事は許しませんし、他には傳つて居りません。興行が濟むと、これに限つて譜付があつて、これは直に六左衞門が筐に納めて保管し、他見を許しません。

處でこの唄三味線は、一體お能の囃子のやうに一人一人出て、上調子ワキなどの別はなく、三味

線唄、三味線唄と入混つて坐ります。尤も山臺はないのですから、舞臺へ直に毛氈を敷き、社祢着用で並び、囃子は蔭でやるのです。それは一段濟むと、順に立つて幕に入り、次の唄の時に又出て來るといふのが本式ですが、當時はそれを略して、居なりにやつて居ります。

私共の系圖や、代々の勘三郎などについては、いろ〳〵お話もありますが、それは又折を見てお話し致す事にし、私が十三代目の子であり乍ら十五代目となりましたのは、義理の伯父であつた仲藏が、一時この名前を預つて居りましたので、十四代目といたしましたからでございます。

「猿若」の人形番附及掛物

すの字

「猿若」の話を聞くに就て、匏村子と連立つて、中村家の末葉たる明石氏を淺草小島町の住居に訪うた。その話は別項にある通だが、「猿若」に關するいろ〳〵な物を見せて貰ひ、許しを得て匏村子の手を煩はし、その一々を撮影した。先づ第一は大名と猿若の立並んで居る、丈六七寸位な木彫の古人形で、衣裳の彩色は芝居の通である。これは何年の昔に出來たものだか、十三代目の勘三郎も誰の時代に拵へたのか知らぬといふ事で、眼が玉でなく彫つたのだから、中々古いものに違ひないさうだ。人形の臺は太い材木二本に形取つてあるが、これは十三代目が安政の大地震後に、有名な鼠屋で修覆さした時に拵へたといふ事だ。箱は後に出來たものであらうか。桐で正面が松と竹の鏡板に氣取つてあつて、硝子の戸になつて居た。これを先年故人になつた安本龜八が見に來て、衣裳の彫に皺が付いて居ないから餘程古い時代のものだと云つたさうだし、首が抜差になるやうに出來て居るのも妙だ。六左衞門の家にもこの形の小い人形があるさうだ。人形と云へば、淺草の觀音堂にある猿若人形の額は、昔から開帳のある折には、仕事師が大勢掛りで下して修覆したもので、近い項では藏前の鳴物屋鳴岡が引受けて直したといふ事だ。それに就て一寸面白い話を聞いた。同家では二月十五日が始めて中橋へ芝居を許された日であつたから、その日は芝居の前へ、額に嵌めて猿若と翁の人形を飾るのが例であつたが、猿若町を引拂ふ事になつて、その式も無くなつたから、大きくて邪魔でもあるし、壞れかかつて居ると云ふので道具屋の手に渡して仕舞つたさうだ。それを聞いた中村勘五郎は一度買はうとして躊躇つて居る内、故人談州樓燕枝が買つた。それを悴が父の死後、猿之助の處へ持込んで金を借り、流れて猿之助の所有になつた。すると猿之助が後藤を勤める時、勘五郎から仲藏の型を敎はつた禮として、その人形を勘五郎に送つた。この事を北鞘町の勘五郎が聞いて、是非共讓つてとの事でつまり緣故のある北鞘町に納まつたのは不思議だ。翁の方

は百五十年の時に拵へたものとかで、ほろ〳〵であつたといふが、これは行方知れずとの事だ。

古番附は小形のもので、來る霜月朔日よりとあり、中村勘三郎本役者とあつて、この猿若の畫は撮影の通り師宣式であるから、何しろ古い物で、延寶時代でゝもあらうか。檜紋は舞鶴で、その下の中央に中村勘三郎、左右に藤田皆之助、玉川萬之丞とあつて、立役には花井才三郎、田宮九郎三郎、寺西治右衛門、玉川喜樂等で、この治右衛門が大名を勤めて居る。女形は鈴木傳十郎、玉川小傳次等で、小うた若山五郎兵衛、三味線八郎右衛門、勘四郎等であつた。それから二幅の掛物の一には、上に「壽」の一字を書き、「七十六老龍水篆」とあり。その下に

猿若衣裳頂戴仕

御褒美として悴に明石と申名並に内裏樣に被爲召悴召連狂言仕

明暦三年京都

御城樣に被爲召諸藝仕鳥目六百貫文

慶安四年

音頭仕金之麾を頂戴

猿若衣裝頂戴

寛永九年あたけ丸木やり

「寛永元甲子年二月十五日元祖勘三郎於中橋歌舞伎芝居始」と記し、猿若の畫を描いたのが明石事雀童で、その傍に「きさらきやはじめて鶴の拍子取　冠子」「右六世さるわかかん三郎書之、行年五十五歳、元文六辛酉年」とあつた。又一には、同じく上に「壽」「七十六老龍水書」とし、その下に

一日門松

二日新發意太鼓

三日さるわか

七日鬼やらひ

とあつて大名の畫を描き、「きさらきやつれてもふたる鶴のこゑ　七世雀童畫」として、丸に申若の印を捺し、「安永二、男歌舞伎百五十年壽」と記してある。それから今一枚ある猿若の畫は、七世勘三郎が書いて遺した「舞扇要用記」の内の自畫である。

『先代萩』の床下

明治四十一年三月於歌舞伎座、市川團藏所演の仁木彈正

床下舞臺の中央から荒獅子男之助がセリ上がつて、お約束の白があり、一卷を咬へた鼠が鐵扇で打たれてクル〳〵と廻り、花道へ逃げて切穴へ這入ると、ドロ〳〵になり、一つ板が返つて掛焔硝の煙から西向になつて、燕手生締の鬘、鼠生締紋へ四ツ花菱鼡斗目入、三つ銀杏紋附の長社衿、鼠羽二重に同模樣、同五ツ紋の着附、白の二枚下着、同襦袢の拵で、銀作の小刀を挿し、眉間に疵をつけ、口に一卷を咬へ、眼張を濃くした眼を閉ぢ、左の手で右の示指と中指を握つて鳩尾の邊（印手を結んだ形）へあてて、すつとセリ上がる。

舞臺の男之助がそれと見て

「曲者」といふので、仁本は握つた右の二本の指をすらりと外す途端、脇差から手裏劍をとつた心で、すぐその手を肩の上に擴げ、男之助に打つ科をして、又すぐ元の通りに握る。

男之助は仁木の打つた手裏劍を受取つた心に摑み、「取逃がしたか……」で幕が閉る。

ドロ〳〵になり、仁木はやはり二本の指をすらりと外し、印手を解くと同時に兩手を裏向に擴げて上げ、口に咬へた一卷を右へとつて口を結び、一卷を内懷へ入れるのに、左の手も共に入れて腹の邊へぐいと納め、樣ァ見ろといふ心持で、兩眼を細く徐に開いてニタリと笑ひ、兩手を懷から出して、右の手を長袴のマチへ掛けて揚幕の方へ向き直りながら、左の手も同じくマチへ掛けて、右から左と裾捌きをして、左右の社衿の襟を下から上へ、上から下へ扱くのが形容で、次に袴の前を右の手から左の手といふ順に持つて、グイと體を反し、眼を剝くので、太鼓のテン〳〵がはひる

これが謠の鼓のあしらひで、右の足をずつと出し、あとは萬遍なく太鼓に合はさずに揚幕まで反つた形、眼は剝いた儘で引つ込んだ。

團藏の仁木談

あの印手を解くところですが、私の心では、男之助が「曲者」といつたところで、本來なら結んだ印手を解いて手裏劍を打つわけには行かぬので、さうすると忍術が消えて何にもならぬわけですから、彼處はもう一息、うむと印手に力をいれて内へ引く加減にすると、自然と小柄が抜けて、向

ふへ行くのが本當だらうと思ひますが、それでは見物に目立ちませんから、あゝしてゐるのですがさうしなければ團藏は心持が惡いと言つてゐたと是非お書き下さい、書いて置いて貰ひませう。

それから唯ここは切穴から上がつて一卷を懷へ納めて、揚幕を向くまで、僅の間ですけれど、ここが見物に分からない、なか〳〵心配なところで、これまで十度以上も演つてゐましても、むづかしくてならんので、體が崩れずにセリ上がるといふのが一つの身上なのです。

それに本來からいふと、何も引つ込みに眼を剝いて反らなくとも好いのですが、それでは歌舞伎狂言になりませんから、嘘とは知りつつ斯ういふ引込みをする次第です。

この花道など一人役者ですけれど、これが自分として心持好く行つたと思ふ時は、見物も褒めて下さいますが、一芝居のうち、心持好く演るといふ日はまことに少ないのです。

堀越（團十郎）が黑子を付けたのです歟、あれは幸四郎に黑子があつたのを眞似たので、仁木に黑子があつたのではないのですから、私は黑子は付けません。それに堀越は齒が惡いといつて一卷を咬へなかつたのも、鼠が咬へて引込むとして變なものです。

梅壽菊五郎は切穴の處で鼠が割れて、毬栗坊主に鼠の法衣、荒繩の帶で、一卷を咬へて出て、幕が締まると、燕手鬘に社祢といふお約束の引抜きになりましたが、かういふわけですから一卷は咬へる方が本當でせう。

對決は黑羽二重へ四つ花菱五ツ紋の着附、葡萄鼠の下着、同襦袢、濃鼠返し龍紋へ細い大小霰、三つ銀杏紋の社祢で出るといふのが、先づ一通りのところなのですけれど、私の腹で言へば、いくら證據の書附が出ても宗全が控へてゐますから平氣なものですが、民部が持參の手紙にひつじよねとあるのには、心恐く氣味になり、あれから、はてあれがどうして向ふの手にはひつたといふ氣になります。

勝元が何を言つても恐入つたといふものかと、バカにしてはゐますが、願書を認めてから、印形といはれるので、こいつはしまつたといふ心恐きがあつて、願書を見てどうしたものだと考へ、鬢の毛を左で引いて印形を捺します。ここなどは一人舞臺と違ひますから、型といつたところで出た處勝負、唯相手の言ひやう出ように依つて、此方の白も科も變ります。勝元が詰寄るところは、例のサアサアの繰上げでなく、腹からウムと詰寄つて顏へ表すのですからなか〳〵骨で、ここはさうでないと勝元が引立ちません。トゞ恐入る件は唯力なく言ふのみです。

外記殺しは白の手甲、黒の素網、白の襦袢、紫縮緬の襷掛といふ兩肌脱の拵になりますが、この襷掛の拵は幸四郎の型です。

最初は黒羽二重に袴といふ形で、下手の襖を開けて下手向に坐り、外記を呼留めて願書と一卷を渡すと、外記は油斷はしないが、その中に酒井もある誰もあると、末を見てゐる隙を覗ひ白布で卷いて隱して來た短刀で、いきなり傍へ寄つて横に抱へて脇腹を突き、外記の刀を拔いて下手へ投げ外記と離れて右の肌を脱ぐと、その袖に血潮がついてゐます。次に短刀を口に咬へて兩肌脱になつて追ひながら上手へ舞臺は廻ります。

立廻りは外記をする人に依つて向ふの好いやうにしてやります。一本角の振上げなども、向ふの意氣込みに依つて持つて行くので、ここの二度の揚幕から出るところで、髪も亂し、眼張も一層濃く直して、短刀を握つた儘出を待つてゐますが、ここでその手先へ一ぱいの力を入れてゐないと、腕からずつと意氣込む體も極まりません。惣別何役でも役をとつて出てゐる間は、その人物にならなくてはいけないので、それは師匠海老藏からの話なのです。

そこで私は近年眼を痛みましていけませんが、たとへば幾千萬の御見物の内で、一人でも私に注目して、私の藝をぢつと見て下さる客を認めますれば、私はその客一人に見せてくれやうとして演

ります。

今度などは十年振で歸京しました所、この七十三の老爺を見てやらうと、御贔屓の皆さんのお蔭で毎日の賣切は何よりの仕合せ、故郷嬉しく大いに若返つて一生懸命に御覽に入れてゐるのです。

『忠臣藏』の大序

明治四十二年十月於東京座、市川團藏所演の高師直

人形式で幕が開くと、鎌倉八幡宮の社頭、正面九藏の足利直義のずつと上手へ師直は、立烏帽子に五三の桐の黑の大紋で、兩手を袖の内へ入れ、床几に掛かり、左の足を少し出して斜の形になり床の呼びで屈んでゐた頭を上げて目を見開き、口尻を二三度動かし、直義の「如何に師直」の詞に對して、

「ははあ」と頭を下げ、床のへ――當社の御藏に納る條、その心得あるべしとの嚴命なりと宣へば武藏守承り」で、

「これは存じ寄らざる御事――御旗下の大小名、清和源氏はいくらもある」といつて、首を動かし

「遠慮なく言上奉る」で、辭儀をすると、羽左衛門の桃井若狹之助が「いや、左樣には候まじ――卒爾かと存じまする」といつて凛となるのを

床のへ言はせも果てず」で、師直が

「默れ若狹殿、出頭第一の師直に向つて卒爾とは何の讒言――兜の數は四十七」で、一イ二ウ三イと首を振り、若狹之助が臨くのを

「すつ込んでおゐやれ」といふので、若狹之助が屹度なるを、梅幸の鹽治判官がこれを制して、

「――直義公の御賢慮仰ぎ奉る」といふので、直義が「鹽治が妻を召連れよ」と仰せられると、師直はちよつと思入をする。雜式が花道附際で「急いでこれへ」といふので、場幕の内から顏世が

「はあゝ」と答へるのを聞くや、師直は體を動かし、向ふを幾度となく透し見て、滿面に笑を含み、女寅の顏世が花道へ控へると、

「これは〳〵顏世殿――さあ、これへ〳〵」と面で招く形をする。顏世が舞臺へ進むと、直義が、

「召出すこと餘の儀にあらず――兜の本阿彌、ささ目利き目利き」といふうちにも、師直は始終口を結んで、顏世から目を離さないで、顏世のお受けの詞が終る頃、判官の方をちよつと見、雜式が唐櫃の蓋を明ける時分、右の手を袖から出して膝に置き、頭を上へ引くやうにして顏世を見込む。顏世が、兜を見定めると雜式が手傳ひ、その鼈頭を三方へ載せて直義の前へ据ゑて元の住ひへ下がると、師直は同じ形の儘で、顏世の姿を見込んでゐる。

兜が判官の前に運ばれ、直義は鹽治、桃の井の兩人に「寶藏へ納むべし」と申しつけ、顔世太儀」で諸大名と上手へ社參にはひると、師直はそれに頓著せず、居形で伸び上がつて、顔世の容色に見惚れてゐる。

判官が辭儀をするので、ちよつと顔世から目を外し、判官がはひると、今度は體を右へ出し、左の肩を下げて又顔世を見込む。

若狹之助が下手から辭儀をすると、顔世に氣をとられてゐて氣がつかず、ふと氣がついて徐に上手へ顔を反けるので、若狹は上手へ廻つて辭儀をすると、その體を「チエッ」と舌打ちして目をきよろつかせ、ぐつと見込んで下手へ顔を反ける。今度若狹は正面になつて辭儀をすると、又見込んで慴體に上目遣ひをするので、若狹がぷり〳〵怒つてはひると、その跡をちよつと見、人なきやと四邊を見廻す。

顔世が「師直樣には今暫し——長居は恐れ」と立つのを

「これ〳〵顔世殿、暫くお待ち下され」といひつつ石段の上寄の方から兩手を袖にして降り、顔世の立つてゐる上手から

「この書狀の御返事は、御口上にても苦しうござらぬ」と懷中から手紙を取出し、顔世の袖へいれ

て、手をちよつと合せる形をし、上手を見、後を見、人を氣遣ふ思入をし、一つ廻つて下を見ると顔世が捨てた自分の手紙があるのを見て

「我が文ながら捨てても置かれず」で、左で拾ひ上げ、兩袖を前で合せる樣をして、右の袂へしまひ

「くどうは言はぬ好い御返事聞くまでは、口說いて口說いて口說きぬく——なんとさうではあるまいか」で、右の被で顔世を抱へると、こゝへ若狹が上手から出て、この樣を見て咳拂ひするので、師直はそれと知つて上手へ離れると、若狹が兩人の眞中へはひる。

ここで師直は前に挿してゐた中啓を右の手に持ち、顔世が下手へはひつて行くのをもどかしがり、若狹に

「又しても差出たか——顔世のお賴み」と聞かせ、更に

「お身なんだ、大名でさへあの通り、小身者に捨知行——五器さげうも知らぬ」で中啓で胸を打ち、

「それでも武士か侍か」で、刀の柄を打ち、上手斜向になると、若狹が刀の柄に手をかけて切りかけようとすると、奥で「還御」といふ聲がするので、師直は

「還御〻だ」と言つて若狭の右の二の腕を中啓で打ち、徐々と上手へ行き、石段を上がつて、元の床几へ下手向に腰をかけて若狭を睨みつける。

直義が上手から出て悠々と向ふへ従者と共に引つ込むと、最後に判官が出て師直の前に坐り、辭儀をして花道附際へかからうとすると、下手の若狭が立つので、師直は腰をかけた儘

「早ええわえ」といふので、兩人とも坐ると、師直は中啓で判官に先へ行けと知らせるので判官が立つ、若狭も立つて又行かうとすると、又

「早ええわえ」で、今度は判官だけが坐る。師直は石段から降りて歩を進ませ、立つてゐる若狭と附廻りになり、若狭が又切りかけると、判官が立つて來て兩人の眞中へ坐る。師直は左の袖を横にしてこれへ中啓をあて、若狭を横に睨んだ形で幕になつた。

賀の祝

明治四十一年五月於市村座、中村歌六の主演白太夫

在郷唄で幕が明くと、佐田村の田舍家、百姓白太夫の住居。歌六の白太夫が鼠小紋の著附で、二重の下手から立つて、眞中佛壇の前邊の莨盆のある處へ下りて坐ると、薪左衛門の堤端の十作が百姓の姿で訪ねて來る。

白太夫は白髮丁髷の首を縮め、肩を四角に張らした恰好で煙管を以て構へ、

「けふは三つ子の誕生日、七十の賀の祝で禁裏から白太夫と名を改めよ」といはれたと話し、「三つ子を産むと扶持が下さる」といひ、「そちも己にあやかつて嬶に三つ子産ませよ」などいふ。

床の〻櫻丸の女房が」で、向ふから芙雀の櫻丸女房八重が濃紫裾模様の著附、赤の帶、日傘を持ち、祝物を包んだ風呂敷を片手に提げて出て内へはひり、「まだ皆さんは來られないか、氣が焦いて淀堤から三十石の飛び乘りで來たゆゑ草臥ぬ」などいふ。

十作が白太夫に「忘れものはないか」と酒のことをいふと、白太夫が

「樽や徳利は目に立つから餅の上へ茶筅で酒鹽打つてやつたので、二度の祝ひは濟んだ」といへば、十作は「どうれで嬢が酒臭い餅ぢやといつた」などいつて歸る。

床の〳〵梅王、松王兄弟の女房……」で、向ふから玉之助の梅王女房春が納戸裾模様の著附、黑の帶で菅笠へ蒲英公、嫁菜などの摘草をしながら出ると、跡から粂三郎の松王女房千代が鼠の著附、黑の帶で出て一緒になり、一い二う三いで柴折戸の内へはひり、白太夫に料理の拵へは出來てあるかと聞けば

「出來ない、お前達にさすつもり、むづかしいことはいらぬ」といふので、千代が「三人寄つて料理の支度を」といひ、白太夫にそれまで一寢入りしたら好い」といふ。白太夫は早速寢轉ぶ。千代が衝立を立てかけ、先に立つて差圖振りをする。春が「さあ〳〵支度のはじまり〳〵」といへば、千代は八重の處女らしい面倒を見る。

八重は下手垣の外、藪脇の井戸の水を角釣瓶で汲みにかかるが、力が足りないので吊り上げられない。千代はそれを見て手傳つて汲んでやる。

それから春は八重に味噌を摺つてといつて、摺鉢を持つて二重下へ降りて擂らせ、次に千代は俎の上の野菜を切らせる。八重は不馴のために過つて指をちよつと切り、三人して笑ふ。白太夫はこれらの賑しさに目を覺まし

「今行んだ十作の話には、時平殿の車先で三人の子供が大喧嘩をしたといふが、……時平殿に奉公する松王が女房、ここへ來て樣子を言へ」といふので、千代は迷惑ながら父とさん聞いてといひ、

「實は祝事の濟むまでは、父とさんの耳へは入れぬが好いと、三人ながらその心いらぬことを饒舌られて、隱せないから申しますが、松王が短氣のいひ上がつて兄弟喧嘩したが、氣遣ひはない、三人ながら怪我もなく濟んだ」といふ。白太夫は千代に

「孫めは健か連れて來て顏見せぬか」などいひ、次に「嫁達膳を出さぬか」といふ、春か「連合はなぜ見えぬか、千代さま八重さま道まで行て見て來まいか、ここで待つより三人で見に行かうか」といふと、白太夫は上手斜矢來の中に植ゑてある梅、松、櫻の三本の木を見て

「三本のあの木が子供達、梅王、松王、櫻丸、顏は殘らず揃ふてあるから影膳を据ゑて置け」といふ。三人の嫁は支度にかかる。

八重は白太夫に第一番に上がれといつて膳を出す、白太夫は坐り直す。春は膳を持つて梅の木の前に供へ、「こちの人ゆるり」といふ。又八重は櫻の木の前に置いて辭儀をする。千代は「さあ〳〵

たんとお上がり」といつて、眞中の松の木に捧げて、枝にかかつた蜘蛛の巣を簪でとり、「松が一番、櫻も梅も好い〳〵」といふ。

それから二重の下の下手へ八重、千代、春が並んで坐ると、白太夫は立つて、みんなに祝の挨拶をしろといふ。

千代は立つて莚に坐り、達者で七十の賀を迎へたのを祝ひ、「ゆるりと食べとくれ」といふと、白太夫は嬉しさの餘り尻餅を搗く。三人で助け、八重は二重へ上がる。白太夫は床の〳〵我膳に押直り箸をとる」云々で食べ、好い加減に賞味し、

「春めいたこの嫁菜、千代と食べれば、八重うまい」と洒落をいつて笑ひ、喉へ支へることなどあつて、白木の三方を見て、ぎよつとし、八重の祝物と聞き、

「春もなんぞくれるかい」で、春が「扇三本袖土産、中の繪は梅松櫻、お子達の數を祝ふて三本ながら末廣がり、目出たう祝ふて上げまする」と出す。千代が紙に包んだ茶の頭巾を出せば、白太夫は喜んで被ると、千代が背後へ廻つて形を直す。白太夫が

「大黑のやうに見えるか」といふ。そのうち膳は片付けられるので、八重に

「村の氏神へ參るから羽織を出して」といひ、八重が出す革色石持の羽織を千代が著せる。それか

ら白太夫は拵へて置いた十二銅の賽錢を神棚から千代にとらせて持ち

「三本のこの扇、末廣うに子供の生先、氏神へ賴んだり見せたりせう、八重はまだ參るまい、序ながら連れ立とう」といひ、殘る二人に

「歸るまで外へ出ることはならん」といつて、柴折戸を出て竹の杖を突く。八重は後から日傘を持つて付く。すると白大夫の突く杖が花道で折れる。白太夫ははつと愁ひの思入で、二つ一緒に腰へ廻して兩手で持つて向ふへはひる。

千代は上手で、「松王は何をして遲いか」といひ、春は門口で「梅王は何をしてゐるのか」といふ。すると春が「松王が見えた」といふので、千代は柴折戸を出て「おういく〳〵」と呼ぶ。

向ふから榮三郎の松王が紫の格子へ松を散らした著附で内へはひり、

「親父樣お目出たう」と辭義し、白太夫が見えないので、「親父樣はどこへ」と聞くと、女房は「八重を同道して氏神樣へ參詣に行つた」といふ。それから梅王と櫻丸のことを聞き、まだ來ぬといふので、「二人とも主なしの扶持放されで、用もないのに遲いのが、本當の遲いのだ」と、春に厭にいつて二重へ上がつて上手へ坐ると、向ふから勘彌の梅王か白青の市松へ梅の大模樣の著附で出ると、千代が迎へるので、二重へ上がつて下手に坐り、松王をあてこすつて「時平の扶持を有難く思ふの

は、人でなしの猫畜生」といふので、松王が聞き咎め、喧嘩になつて双方刀を拔きかける。

女房共はこれを留め、千代は松王に一、七十の賀を祝ひに來て、親父樣に逢はないうち、刀に反を打つてどうしやる」といふ。

春も梅王の刀の柄にしがみつくと、梅王は女房を取つて突き退け、「七十の賀でも祝ひ日でも堪へ袋の破れかぶれ、留め立てして怪我するな」といひ、つまりは、眞劍の勝負は親人に逢ふての後となつて、女房二人は夫の大小を持つて外へ出されると、梅王は松王を二重から下へ蹴落し、次に掴み合ひになつて左右に離れ、松王は濃い淺黄、松王は赤の肌脫になり、二重下の入口に三俵杉形に積んである米俵を一つ梅王は上手の松王に投げつけると、松王はそれを除ける。梅王が又一つ持つてかかるので、松王も一つ持ち、二人で俵の打合ひをはじめる。

女房達は柴折戸の外で、「梅王殿もう好いわいな」「松王殿もう置かしやんせ」「止めて〳〵」と心配するが、二人はなかなか止めないで、勝負が付かなければ無駄働きと、双方氣込んで押合ふうちに、一度にこけかかつた拍子に櫻の枝をぽつきり折つたので、二人は驚き「おいらぢやない」と手を打拂ふと、女房達は内へはひり「親父樣がお歸りぢや」といふので、二人は肌を入れ、「己ではない」「己ではない」「父に詫言しろ」と互にいふ。

白太夫は靜々と歸る。八重は離れて付いて來て表に入る。千代は折れた櫻を氣遣つてそれを庇ふ。二人して「親人の七十の賀御祝儀申す」といふ。白太夫は二人に

「よう來てくれた」と喜び、折れた櫻を見て驚き、誰の爲業とも咎めないで、二重上へ頭巾をとつて坐ると、八重も跡から二重へ上がる。

すると上手の梅王が懷中から一通を取出し白太夫へ「お願ひ」といふと、松王も同じく下手から願書を出し、二人して「お聞きとりを願ふ」と爭ふ。白太夫は打笑つて

「心易い親子兄弟——歷きとした此の願書」といひ、松王のから見て梅王のを見る。

八重は三人兄弟の爭ひ、親父樣に賴んで中直しと千代樣春樣と言ひ合したのも水の泡といひ、櫻丸殿は道で病氣でも出たかと中腰になり、扇子を落して心配する、白太夫は梅王に

「其方が願は旅立がしたいから暇をくれといふのか、菅丞相のござる島が」云々といふに、梅王は「左樣、下つて御奉公仕らん」といへば、白太夫が

「御臺や若君のござる處を知つてか」と聞くと、梅王が「御座所は知らぬが、たしかに御息災である噂」といふので、白太夫は

「呆氣者」といつて知らないのを詰り、「願は聞けぬ」といつて願書を投げ返す。梅王は顏を左右に

やり、中腰に立つて願書を懐中し、誤り入つて辭儀をする。白太夫は松王に
「我が願は勘當か、珍らしい聞き屆けた」といふに、松王は「主人への忠義推量あつてのことなるべし」といふを、白太夫は
「横に取つて行く道を蟹忠義だ」と詰り、「勘當を聞き屆けた、切り〳〵出て行け」といふに、千代が「心得違ひ」といつて、二重へ手を突いて詫びると、白太夫は
「默れ〳〵」といつて、先つき受けた頭巾を投げる。松王は「出て行く」といふ。白太夫は
「出て行け」で右の肌を脱ぎ、鉢卷をし箒を持つて門口へ立ち出ると、松王はそれを抑へ「あすからは前髪を剃り落して大名だ」といふ。千代は下手に坐る。松王は「親父夏は暑い」と捨白をいつて箒を投げるので、白太夫は轉ぶ。松王は千代が涙ぐんで、どかうするを、「きり〳〵失せさらせ」で、女房を先に立て、「さあ、行け」といつて追ひ追ひ向ふへはひる。白太夫は箒を取つて、花道七三まで出て行つて
「嬉しや面倒な奴を片付けた」云々といつて内へはひり、鉢卷を取つて首に掛け、二重へ腰をかけて足袋を脱ぎ、手を拂つて三方を持ち、思入をして後へ廻し、上手の障子屋體の内へはひる。春は
「お八重さま跡で好いやうにお詫して」といつて梅王と一緒に下手へはひる。

一人取殘された八重は物思ひして門に立ち、うしろに手を廻して柱へ蹲むと、そのうち三津五郎の櫻丸は、藤色に黑の肩入の著附で、正面納戸口から出て「やい〳〵女房どもさぞ待ちつらん」といふと、八重はそれを聞いて「こちの人櫻丸さま」で立つて二重下に坐り、「案じる女房を思はぬ爲方、兄弟衆のことについて、親父樣のお腹立ち」云々から、「わけを聞かして」と、二重へ上がつて、櫻丸が突いてゐる刀を持ち、坐つてゐる膝に縋ると、白太夫は三寶に小脇差を載せて一間から、しを〳〵と出て、櫻丸の前へ離して置き、上手向に坐ると、八重は
「これはなんで、こちの人、そのわけを聞かして」といひ、櫻丸がなんともいはないので、白太夫の側へ行つて
「親父樣の只一言、案じる胸を休めてたべ、御慈悲々々々」と手を合せ、又下手へ來て、櫻丸に縋つて泣く。櫻丸は
「所存殘らず言ひ聞かさん」といつて改まると、八重は下がつて手を突く、櫻丸は正面で右から左と手を突いて辭儀をして兩手で泣き、
「――三人のその中に櫻丸が身の幸ひ、人間の胤ならぬ竹の園生の御所奉公、下々の下々たる牛飼舍人、物體なくも身近く召され、菅丞相の姫君と割なき仲のお仲立仕おうせるが仇となり――生

きてをられぬ身の切なさ――切腹刀親の手づから下されたわい、女房ども我に代つてお禮申せ、死後の孝行頼むぞや」と言ふので、八重は泣き沈み

「なぜ一しよに死ねといつて下さらぬ」と歎き、白太夫の側へ行つて「好い智恵出して」で泣き「親の手づから腹切り刀」で立つて跡ずさりで下手へ來て櫻丸に縋り、下斜に泣き伏す。白太夫は正面に直り

「己のいふことを聞いて」といひ、三本の扇子を出して、「神明の加護に任さん」といつて氏神へ供へ手を拍つて、

「信を取つて御闔の立願は櫻丸が命乞ひ、中の繪は上から見えぬ三本のこの扇、初手に櫻を」といつて、明けて見ると、梅の花なので、「助けたい」で、又取直すと松なので、「頼みの力も落果てゝ」で、兩手を膝に載せて泣き、「泣きやせん、我も泣くな」で、上手斜向になつて泣く。櫻丸は

「恥を知り、義の爲に相果てる」といつて、三寶を前に据ゑる。白太夫は

「暫く、止どめやせん介錯」といつて鉦を出し、「此の刀で介錯」云々といつて、向ふ向きになつて

「チンチン」と鉦を打ち「南まいだ〳〵」といふ。

この念佛の聲と共に櫻丸は最初肌を脱いで黒襟赤の褌袢になり、それから又下の白に八重が脱がせると、櫻丸は脇差を紙で卷いて腹へ突き立てやうとする。八重が止めるのを前に据ゑつけ、突き立てるので、八重は下に泣き伏す。櫻丸は白太夫に「憚りながら御介錯」といふ。

床の〳〵撞木を振り上げ」で白太夫は鉦を打ち、撞木を振り上げて「南無阿彌陀佛」と唱へて鉦を打つ。稱名のその聲次第に亂れ行く。

櫻丸は刀を取相して喉を突いて前へ倒れる。すると梅王夫婦が走り出て

「是非に及ばぬ、あの木と共に枯れし命の櫻丸」といひ、中腰になつて折れた櫻を挿し「ああたら若者殺せしよな」いふので、白太夫は脱いた肌を入れ、白の脚袢を春が手傳つて穿かせる。

梅王は二重下へ降りる。八重は櫻丸の死骸に泣き伏す。梅王は草鞋を揃へる。

白太夫は立身で白の手甲を付ける。「チンチン〳〵」で、梅王は草鞋を穿かして蹲む。春は風呂敷包を後から腰へ付ける。梅王は菅笠を持つて杖と揃へて出す。

白太夫はそれを受取つて、花道附際まで行つて、ちよつと伏す形をして門口へ戻る。春は二重の上手、梅王は下手へ上がつて櫻丸を起し、三人は泣く引張り、白太夫は笠で顔を隠して本釣鐘がはひつて向ふへはひるので幕になつた。

『忠臣藏』の四段目

明治四十三年十一月於市村座、尾上菊五郎の大星由良之助

床の〳〵主君の有樣見るよりも、はつとばかりに揑と伏す」で、バタ〳〵になり、向ふの板戸を開けてはひつて跡を閉めて花道へ現れた由良之助は、肩衣を曲げた無腰で、兩手を膝にあてた屈み形で急いて出て、主君切腹の有樣を見て、ハッと思つて花道の中ほどへ斜向にへタ〳〵と坐り、右からちよつと下がつて平伏すると、舞臺の檢使石堂が「苦しうない近う」といふ。

斯く許された由良之助は兩手を内懷へ入れて腹帶を緩め、立ち上がつて屈み形に舞臺へかかり下手の九太夫のゐる少し前へ上手向に坐つて平伏し

「由良之助良包、唯今到着仕りました」といふと、判官が

「由良之助か」

「ははッ」

「待兼ねた」

「御存生の御尊顏を拜し……」で、ちよつと頭を上げ、判官の「定めし樣子は聞いたであらう、聞いたか、聞いたか」を

「ははッ」と受けて「無念……」で、頭を上げ

「あゝいや、此期に於いて申上ぐることはござりませぬ、唯御尋常の御最期の程を願はしう存じまする」と頭を下げる、判官が「いふにや及ぶ」で、短刀を引き廻し、「由良之助近う」といふので、由良之助は兩拳を突いた儘、三つすつて判官の疊の側に寄り斜向になると、判官が

「この九寸五分、汝……かゝかたみぢや——ぞよ」といふので、頭を上げ、體を伸し、無音で判官の意を受け

「委細」といひ、つつと疊から下がつて、

「承知仕りまする」といふ。判官がそれを聞いて凄く笑ふので、又一つ下がつて平伏する。判官は咽喉笛をはね切り俯伏すと、由良之助は目をしばだたて屈む。

それから樂師寺の白があり、次に石堂は判官の上手に寄つて上意の書面を扇面に載せ、判官の背の上に置き、下手へ行つて坐る。由良之助は體を向けて平伏する。石堂が「慈悲は上」といふので

又平伏する。

石堂が立ち上がつて行くので、由良之助は右の手で力彌に見送るべく知らせる。力彌が立つのを「そのまゝ」で向ふへはひる。由良之助は又手を突いて體を直すと、藥師寺が由良之助の上手へ來て、石堂と同じやうな白があつて上手へはひるので、由良之助は平伏する。

床の〳〵由良之助にぢり寄り」で、一ィ二ウ三ィとすつて布へ上がり、扇面をとつて左へ置き、兩足を伸させ、白小袖の襟を正して兩袖を左右へやり水色の肩衣を伸してかけ、懐紙を出して置き、短刀を握つた手を屈んで兩手でさすり、小指から放して短刀をとり、紙の上に置き、更に指を元の如く握らして、短刀を紙に包んで懐紙に載せ、扇面を元の通りに背に置き、短刀を右から内懐へ入れる。

床の〳〵御臺所は一間より」で、髪を切つた白装束の顔世が出ると、由良之助は懐紙を懐にして坐を下がつて辭儀をし、顔世との白があつて、下手斜になり、兩手を膝にして九太夫に「はからざる此度の大變、――から御葬送の式」云々をいふので、九太夫の「其許の御差圖を」から、力彌が「御臺所御供の儀を」と聞くので、由良之助は九太夫に如何と聞く、九太夫が差支へないといふので、由良之助は力彌に

「お心任せに」といひ、それから「御尊骸は光明寺へ送り奉り」から斜向になつて、後の諸士を指名して殘す。

郷右衛門が「お乘物」で、下手から乘物が運ばれ、大勢の侍が立つて乘物を圍つて判官の死體を納めると、由良之助は下手の方から其の大勢の内へはひる。一同が控へると、由良之助一人殘つて乘物について判官の屍を整へてゐる。整へ濟んで下がつて平伏する。

力彌が顔世の前に香爐を載せた經机を運ぶので、顔世は香を炷いて合掌する。力彌は更に經机を乘物の前に置く。由良之助は九太夫に向直つて會釋し、顔世に辭儀して經机の前に進み、三つに香を抓んで燒香し、一つ下がつて辭儀し、一つ抓んで一同に代つて燒香し、又進んで香を炷き、机を上手に消さして辭儀し、更に上手の顔世に對つて辭儀をする。

ここで顔世は侍女に差圖して我が切髪を運ばせ受取る。由良之助は顔世から切髪を受取る時に泣き、それから乘物に納めて蓋を締める。

顔世が乘物へ氣をかけて立つのを、由良之助は右の手を上げて構へ、兩手を上げて乘物を花道へ送らせる。顔世はちよつと思入あつて侍女を從へ乘物の跡から力彌も共にはひる。

由良之助は正面になつて袴を正して坐す。九太夫は上手から斜に、郷右衛門は下手から斜に、組

頭八人は下がつて居並ぶ。

由良之助が下向になつてゐると、九太夫は由良之助に今後の所置に就いて意見が聞きたいといへど、由良之助が默つてゐるので、九太夫は下手へ往つて八人に意見を糺すと、足利殿の討手を引受け、城を枕に討死の所存一決したといふので、かくと聞いた九太夫はそれを褒めそやす。次に郷右衛門に聞くと、御城代の意見通りといふので、九大夫は更に由良之助に所存を聞くと、やつぱり默つてゐるので、「これさ大星——どうする」になる。そこで由良之助が

「御老體の御發言、各々方の御所存御尤——由良之助におきましては、籠城殉死などとは思ひも寄らぬ」といふ。

九太夫が重ねて聞くので

「お金配分」ときつぱりいひ、「城を渡して立退く所存」といふ。

それから九太夫の件があつて、「馬鹿な侍だ」と由良之助を下けすんではひると、組頭が四人づつ由良之助の左右から詰めかけて所存を聞くも、由良之助は自若として手を握つてゐる。

そこで八人が立つて花道へかかつたのを見て、「やれ待たれよ」と止め、右の扇子を下へ突き、

「何恨みあつて足利殿へ弓引くべきや、恐れあり、物體なし」から「今九太夫がお金配分なれば知

行高に割れよと申したではござらぬか」から「鹽冶の家臣はかほどまで思慮なきものかと諸藩の嘲り」で、ちよつと憂ひの思入をし「血氣にはやるは匹夫の勇——さて〳〵御了見が」で、扇子で下をポンと打ち「お若い、お若い」から「手前が所存もござれば」で、郷右衛門に目配せして背後の襖を明けさせ、上手を見、眞ん中に坐つて「これへ」と呼び、組頭が上下から四人づつ頭を寄せるので木がはひつて廻る。

菊五郎の初役由良之助談

駈附の由良之助は樂屋から袴を著けて出て、揚幕のところで穿き直して出ることにしてゐるのは駈付けて來て、急いで社杙を著けたといふ氣持ちなので、肩衣も曲げてゐるのは亡父五代目の通りです。

初日にあの花道の中程へ、へた〳〵と坐るとき、滑つたのは慌てたからですが、以來もあの風を型としてやらうとも思つてゐます。

そこで四段目は判官をたび〳〵してゐるから、由良之助のイキは分かつてゐますが、さあ演つて見るとむづかしいもので、だれでも好いと思つてくそ落付きに落付いてはゐるものの、腹はそわそ

わして、やつぱり焦せることになります。

白廻しは詞尻へなの字をつけたら家老にならうかと大いに苦心をしました。それに呼び止めも自分は調子がないから内で弟子を二階へ集めてやつて見ましたが、なか〳〵旨く行きませんでした。

門外で烏を啼かせるのは、私だけは使はないつもりでしたが、あの日は間違つて啼かせたのです

短刀の血は嘗めることにして、提灯は紋だけを切抜いて持つて行く人もありますが、私はあゝいふ場合に何も殘して行くものでないと亡父から話を聞いたことがありましたから、弦だけ外して持つて行くことにしました。それから引込みに幕を引かせないのは、まだ藝が拙いからで、旨くやれるやうになれば引かせることにします。これに袖を卷くのは、ずつと後にしてゐます。

七段目は芝翫、八百藏、段四郎さんをはじめとして市村の兄、松助、新十郎、梅助、蟹十郎等にも聞き、赤坂の梅幸兄はお輕をたびく〻してゐるのでイキをすつかり聞きました。

そこで演つて見ないうちは、四段目よりこつちの方が醉つた風體だけに樂だと思ひましたが、さて演つて見ると七の方がやつぱしむづかしかつたのです。

あの手紙のさきを緣の下の九太夫に切らせる前に、みんなは紙を丸めて落すのを私はしなかつたら、忘れたのではないかと言はれましたが、忘れたのではなく、落さないことにしたので、うしろで卷きながら、さきが切れてゐるのに氣がつくのは、どこかの釘にでも引つかかつたのかと思ひ、見てそれと知ることにしてゐるのです。

お輕を二階から下ろしてやりに往くとき、足音をひどくしてゐるのは、九太夫にあたる心持なのです。築地の團十郎さんのは見て知つて居るだけに弱つたといふのは、をぢさんは顏が長くつて立派で調子が好いに引替へて、自分は丸顏で調子が惡いと來てゐるから、寄りどころないので、亡父のでも見てゐれば好かつたと思ひ暮します。

幕切は上がり段にポンと尻を突いて、「水離れ」といふのは彦三郎の型で、みんなは堀越系で行く方が多いやうですが、自分はをぢさんの洗ひ上げたものを眞似ても及びませんから、腹を地味にして、表を派手にするつもりで演つてゐるので、この次は彦助と龜藏のを交ぜて演る考へなのです。

こんなわけですから、私の由良之助は好いと言はれゝば儲けもの、惡くつて元々だと思つて精々努力して演つてゐます。

岩倉清玄

近松半二作
明治四十四年一月、於新富座上演

主なる人物と役者（出場順）

岩倉清玄	嵐璃珏
奴胴助	實川延二郎
櫻姫	中村成太郎

雪下しで幕が明く

清玄の庵室

とて、正面に佛壇を安置した雪の中の煤けた庵爐である。床の〻〻二人連れ」のかゝりで杣人か二人焚木を背負つて、こゝへ訪ねて來ると。〻清玄は起き上がり」で、莚屏風の中から體を横にして

起き出た姿は、痩せほうけた顔、延びた髪の毛に禿けのある頭、汚れた鼠の著附で眞ん中へ坐ると一人が早咲の梅の一枝を遣れば、兩手に持つて「有難うございます」と言つて眺め、「花を見るのも心の穢れ」と、右で胸を撫でゝ「忘れたい」で、花を見詰め、上手からくるりと廻つて佛前へ捧げ、元へ戻つて、二人して下手の爐へ粗朶を焚く火に兩手を輕く翳してゐると、こゝへ庄屋が來るので、稍上手に住ふと、「庄屋が嚴しいお尋ねもの」と言つて、給姿を出し、「櫻姫」といふので、「ちよつとお見せ下さりませ」でとり、「櫻姫かと」で、手を顫はせ立膝になり、庄屋に「知つてか」と聞かれて、「逢ひたいと思ふがお手當は氣の毒」で、前へ出して眺めるのを、庄屋が取らうとして手を出すのを、遣らぬと引いて、「これを下され」と言へば、「どうする」と聞くので「若し、尋ねて來ないものでもない」と、ぢつと見る。庄屋が、「遣れぬが、貸す」といふので、懷へ折つて入れて抱き締めて屈むと、庄屋と杣人は歸つて行く

、清玄はそれらを左を立膝にして見送り、それへ左の手を載せてぢつと考へ込むと、爐の火が燃えてゐる。

床の〻〻跡には清玄」で、顔を上げ、右の手を頭へあてゝ右へ寄せ、左を左の手で左の頭を搔くと、鐘がゴンと鳴るのを、兩手で數へて、「ありや、もう暮六つ」で、又兩手を立膝に重ね

「人に知られた清玄が、なれの果……あゝ忘れたい、忘れたい」で、右の手を懐に入れ、繪姿を出して眺め

「疑ひのない櫻姫」で、下手斜向になつて、「懐かしう」で、正面になり、繪姿に頬ずりして、「逢ひたいなあ」で、抱へて後へ倒れると、雪下しになつて、奴胴助が向うから大葛籠を背負ひ、大股で雪を蹈んで來て、門の柴折から、「お頼み申す」といふと、床の〳〵清玄は起き上がり」で、上手へ斜向に起き、「どなたで」と言ひながら繪姿を疊み、上手斜向きのまゝ立膝をし、奴の方を向くと、奴が縁の上に葛籠を置くうち、清玄は指を眺めてゐる。

奴が左で頭を掻き「少し休まして下されませ」といふので、清玄が「見らるゝ通りゆゑ勝手に……」と、心よく言へば、奴は縁に腰をかけて、「火が何より御馳走」と言つて、清玄の姿を見「加減でも悪いのですか」と聞くと、「體が悪くて困ります」といふ。奴が「如何なる病氣」と尋ねると、「病氣といふのは氣が欝いでなりませぬ」「では庭借りの返禮に胸の開くお藥を」で、懐と兩の袂を捜し、跡の宿へ忘れて來たから一走りして取つてくると言つて、葛籠を預けると、清玄は「それはお困り……」といつて、上手斜に立膝になつて下を向いてゐる。

奴はその儘門口を出て、「よく降るなあ」で、向うへはひると、清玄は横目でちよつと葛籠を見て、

「この間に火を燈して」で、兩手を膝にしてやつと立ち弱々と二重を降りかけて下駄をとつて穿き柴折戸を明けて向うを見て締め、二重へ上がつて、下手向きに爐から附木で行燈と佛壇とに燈を點け、燃えさしを爐に捨て、腰を突き出すやうにして、佛壇の前に坐り、繪姿と櫻姫の片袖を出して佛前に置き

「櫻姫どの、さぞ窮屈」といふと鐘が一つ鳴り、「こなたの映り香を――形見こそ今は仇なれ――形見のこの片袖、瞋恚の絆に迷つてゐる。不便と思つて、たつた一つ物言ふて」と、だん〳〵に寄つて、「一言物を言はしやらぬか」と、膝を立てゝ屈み、「これほどいふに怨めしの櫻姫」と、だん〳〵聲を高め、「そでない」で、後に返り、起き上がつて縁の前へ手を突くと、葛籠の中で女の泣聲がするので胸を抑へ

「たしかに女の聲……逢ひたい逢ひたいと思ふゆゑ、心の迷ひか」と、押すやうに言つて、上手から繪姿の方を向き、「但しは繪がものをいふたか」て、這ふやうに上手から居ざつて下手の葛籠に目をつけ、右の手を膝にあてゝ立ち、葛籠の紐をといて蓋の前を上げて見て驚き、上手へ跡退りして立つて、幽靈のやうな形で、早足で葛籠に寄つて蓋をやつと開け、袖を取つて出されるのが櫻姫で、吹輪の鬘に、水色地へ枝垂櫻の縫模様の振袖、床の〳〵櫻姫の喜び」で、姫は二重下へ降りると

清玄も同じく降りて、左の手を拜むやうに出し右の手で内懷を撫で、兩手を突き、思ひ切つて見ると、櫻姫は下を向いてゐる。

清玄は清春といふ許嫁のあるを知つてゐるし、思ひ切らうと思へども、この身の因果で思ひ切れぬので、床のへ我と我を見て」で、兩の示指を出して自分をさし、〳〵思ひ詰めたるを不便と思つて抱かれ寢て」で、下手向に兩手を突いて頭を下げると、櫻姫は手を合はして、御免と拜む。

清玄は「拜むはこちら」で、拜み寄るので、櫻姫は振り拂ふと、拂はれた清玄は舞臺先に頭を俯伏して兩手を前へ出し、兩足を伸した形になると、櫻姫が泣くので、頭を上げ、櫻姫を見ながら、だん〳〵と體だけ伸し、「佛罰はなんとも思はぬ」と言つて下手向になり、左の手を膝に乘せ、「それほどまでに清玄が厭かい」といふと、櫻姫が頭を振るので、「得心が行かぬか」と、さあ〳〵の繰上げになり、立つて櫻姫の傍へ行き、袖を取つて泣き

「これも誰ゆゑ櫻姫」で、袖を持つた儘下にゐて見上げて姫を上手へやり、兩手を擴げてよろ〳〵として追ひ、又入れ替つて姫の赤の扱を引つぱり、身を起して鳥渡向き合ひ、又引つぱつて、清玄は立ち身、姫が下にゐる形になり、清玄が扱を持つて姫に寄る。

そこへ奴が戻つて、この體を見て驚き、清玄を取つて投げると、清玄は立つて鎌をとり、姫にか

からうとするので、奴が抑へると、姫は清玄だといふので、顏を見て「失禮を」で、鎌を持つた清玄を上手斜に俯伏しにして、「思ひ切れ、諦めろ」といふ。

清玄は冠を振り「願つて下さらぬか」といふので、奴は「眞つ二つ」と、刀を拔きかければ、櫻姫は上手、奴は中、清玄は下手から奴に體を摩り寄せて、

「命を取られても思ひを遂げずに置くべきや」で、又眞ん中になつて、姫に掛かるのを拂ふとき、鎌があたつて咽へ傷がつき、肩先を切られる。

清玄は姫を捕へて柴折戸の方へ立ち出ようとするので、奴が「生けて置かれぬ」で かゝる途端に鎌の柄が姫の横腹へ當つて氣絕する。奴と清玄とが立廻りになつて、柴折戸の外へころがり、清玄は奴の刀を取つて滅多切りに切りかけ、二重へ上がつて刀はとられ、奴の笠を持つて行燈が倒れる。

暗の立廻りになると、雪が降り、鐘が鳴つて、〳〵なまいだ、なまいだ」の唄になり、下へ降りて切り殺すと、清玄は兩の拳を握つて動かし、留めを刺される。

奴が上手へ死骸を消すと、風の音になり、奴は櫻姫の息を吹き返し

「一時も早く清春樣の所まで」といふと、暗くなり、ドロ〳〵で、庵の眞ん中から燒酌火が燃える。

奴が「迷つたな」といふと、清玄の聲として「櫻姫なにをめ〳〵添はさうか」、奴が「恐ろしい執念」といふので、二重の上手奥に清玄の姿を見せる。奴は二重下で姫を抑へて幕になつた。

近頃河原達引

明治四十四年十月於歌舞伎座、片岡仁左衛門主演の猿廻し與次郎

萱葺の置舞臺で、正面が壁、その下手に猿を入れる竹格子の押入があつて、上手斜に中形暖簾の掛かつた出這入口がある。下手格子戸、その外に椿の木と竹藪、後が野遠見の背景である。

夕暮近い舞臺の眞中に峰子の稽古娘が一人坐り、火鉢にもたれて居眠つてゐる。芝鶴の與次郎母お種が盲目の姿で出て、例の『鳥邊山』の稽古にかゝる。二人は三味線を彈き且つ歌ふ。お種が悪いところなど直し、「手が上がりました」と褒めて仕舞ひにする。稽古娘は歸つて行く、お種は頭痛の加減である。

床の〳〵與次郎は息せき」で、仁左衛門の與次郎は、包と猿とを背に載せて懐中をふくらし、猿廻しの道具を手に持つて向う揚幕から出て、すたすたと門口へ來て

「母者人、今戻つたぞや」と言つて内へはひり、猿と包を卸すと、押入の小猿が親猿の歸つたので

騒ぐ。お種がそれと知つて「乳を呑まして遣れ」といへば、與次郎も
「そりや〳〵乳を呑まして遣れ」と親猿を格子の内へ入れて遣る。
それから猿廻しの道具を掛棹にかけ、脚絆をとつて表へ出て塵をはたき、表の四ッ目垣へかけ、入口で背後向に尻をまくつて埃を拂ひ、袖無半天を脱ぐと肩入の著物、小桶を取出して母の前へ坐り、首をくるくると廻して草臥た樣子をし、袋の米を小桶にあけて、落ちた粒を拾つて食べ、桶を下手へ遣り、次に貰つた錢を財布から出して前へ並べると、母が一人身をかこつので、米を澤山貰つて來たと話し
〳〵母に案じをかけさせぬ」で、財布を我手に持添へて母に持たせ、こんなにたんとあるといふことを利かせ、それを取つて投げて、又取り上げて戴き
「お俊のことで思はず知らず涙が」で、奥にゐるお俊の樣子を覗ひ、「どれ」と立つて下手へ行くと時の鐘が鳴り、そこで行燈へ火を點ける。
ここへ(初役)歌右衛門のお俊が地味な著附で出るので、與次郎はそれと見て表の戸締りをする。
お俊は懷手をして、立膝で傳兵衛の身の上を涙ながら話すと、與次郎が
「聞くたびにびく〳〵するわい」といへば、お俊が「その起りも皆わしゆゑ」から「今頃は半七」

のサハリになり、「心元なき」で火鉢の灰を立て、延紙を出して拭く。
母が「心配させてくれるな」といひ、與次郎は
「母のこと分かつてか、「退けばあかの他人」といへば、お俊は母兄に濟まないが、所詮死なねばならぬ、此場を脱け出さうと決心して
「母さん兄さん、お二人のお詞より合點いたしました……深いわけでもない」といふ。母が
「それなら一筆書いて傳兵衛に渡せ」とお俊にいふと、與次郎は硯箱を出して埃を吹き、兩足に前に出して硯箱を挾み、力一ぱいに墨を摺る。
お俊が延紙へ書いてちよつと止めるのを覗き、正面を向いて胡坐のままで泣き
「長いことはいらぬ」といへば、母が「よう分かるやうに書いて上げたが好いぞよ」といふ。お俊は
「この狀でとつくり御合點が行くよう、兄さん、お前から渡して」といふので、與次郎はそれを受取り
「難有い、これさへあれば千人力ぢや〳〵」と喜ぶと、母は奥へはひる。
そこで與次郎は火鉢の火を火消壺へとり、その跡へ摺鉢をかぶせ、襦袢一つになる。

そのうちお俊は上手へ夜具をのべ、帶をとかずに寢、若し今夜にも傳兵衛が來たなら一緒に死に
に出ようといふ心持を科で頷かせた。
與次郎は布團へくるり〳〵と體を柏餅に包んで寢ると、やがて鐘が鳴る。
すると羽左衛門の傳兵衛が向うから出て、門口へ來て咳拂ひをする。お俊はそれとその聲を聞き
つけ、起きやうとして、兄に氣兼ねをする。
與次郎は高鼾をして仰向けに寢返り、布團から出て胸を出す。
お俊は起きて燈火を消し、そつと格子を開けて表へ出ると、與次郎が飛び起きるので、傳兵衛は
內にはひり、お俊は外に殘る。與次郎は
「表にゐるは傳兵衛ぢや」で、格子を締めて、しつかり抑へ
「おのれを入れて好いものか」といつて胴震ひをする。お俊は外で
「わしは表にゐるわいなァ」といふのを、與次郎は眞似た口調でいつて、手探りで行燈に火を點
け、傳兵衛を見て
「お俊ぢやない傳兵衛ぢや」と指さし、眞張棒で木枕を搔き寄せて、卷いた古手拭で鉢卷をし、お
俊の

「恨みを聞くも隔てる戸口」から棒をトン〳〵と突いて振り上げ、お俊を內に入れ、去狀を竹の先
へ挿して遠くから傳兵衛に出す。傳兵衛は取つて讀む。
與次郎は二人の情實を聞いて、尤も至極と同情を寄せ、二人を落すことにする。
母が出る、水盃の件があつて、猿廻しを傳授し、割籠に飯をつめて風呂敷を包み、小遣も共に
渡し
「序に日和を見てたもれ」で、格子を開けて空模樣を見、「よい女房ぢや」と泣き
「お猿は目出たや」で、鉢卷をとつて、津義に辭義をする。
お俊と傳兵衛は對の衣裳になつて門口へ出る。與次郎が猿を肩に上げるので幕になる。

生寫朝顔日記

山田案山子遺稿
型松園主人校補

明治四十五年六月、於歌舞伎座上演

主なる人物と役者（出場順）

長岡丹六	市川團右衛門
瀧村十右衛門	坂東左門
宮城阿曾次郎、後駒澤次郎左衛門	市村羽左衛門
秋月の娘深雪、後替女朝歌	片岡我童
深雪の母槇の戸	故中村芝鶴
戎屋徳右衛門	片岡仁左衛門

岩代瀧太　　市川八百藏（中車）
秋月の下部關助　　故市川段四郎

〈露の情」云々といふ歌へ水の音をかむせて幕が明くと

宇治螢狩の場。といふが、先づ松原の道具幕、下手に掛茶屋、ここに町人達が螢狩の話をしてゐると、醫者野田桂庵が萩原遊仙と連立つて、螢見物に來り、夕方を待つ間、川端でも歩かうと言ひつゝ兎に角と床几に腰を掛け、桂庵が遊仙に借金の斷りを言ふと、

「あの宮城阿曾次郎などとは違ひ、金錢に不自由はないが、實は戀煩ひをしてゐる」と語る。桂庵が誰にさういふことをと聞くと

「秋月の娘深雪だが思ふやうに參らない、どうかあれに會へるやうにしてくれるなら、金銀に絲目はない、好い智慧はないか」と尋ねると、

「そんなら好い智慧を貸しませう」と遊仙を喜ばし、當座の桂庵料を貰つて、ほく〳〵喜び

「さあ、參りませう」と茶代を置いて去る。

あと水の音を打上げ、木頭で道具幕が切つて落ちると、向う一面薄暗く山々を見せた宇治川縁の背景、舞臺一面に波布を敷き、上手から舞臺の半を占めた立派に作つた屋形船へ青簾が垂れてゐる。

船中で彈く琴へ地唄の二上り、〳〵菊の籬になぞかけて、忍ぶ心の遣る瀬なや、ほんに籬の秋の風朝のきぬぎぬ」の獨吟がはひると、水の音で下手から小舟を漕いて來る長岡丹六と瀧村十右衞門が

「好い氣持であつた」などと言ひつゝ棹をさす。

すると、艫の方から水色紋附の帷子に業平格子樣の袴を著けた宮城阿曾次郎が立つて眞ん中に坐り、

「はて奥ゆかしい」と歌を褒めると、二人は

「吾々にはとんと分からぬが、あの聲ではさぞ顔も美しからう」など言ふのを、阿曾次郎が

「いや、いや、何を仰せらるる」と輕くたしなめ、天地金の白扇で自ら煽ぎ、酒を勸められて一盞擧げ、片手を舟の小緣にかけて唱歌に耳を傾ける。

と折から星形船の中で

「あれーい」と女の高聲がするとたんに、風で帽子が小舟へ飛んで來るのを、阿曾次郎が取上げて見てゐると、三人の腰元が舳先へ出て、その帽子は主人のだと言ふに、阿曾次郎が

「然らばお屆けいたさう」と長岡の手から帽子を腰元に渡せば、腰元達は厚く禮を述べる。

長岡と瀧村は小舟を星形の方へ漕ぎ寄せやうと言ひ出すのを阿曾次郎が

「いや〳〵遠ざけたがよい」と斥け言ふと、星形から腰元が

「お待ち下され」と留める。長岡が舳先へ出て「何か御用か」と聞くと

「今のお禮を申したいから此方へ來て戴きたい」と丁寧に言ふ。

阿曾次郎が立ち上がつて

「御挨拶だが平に御用捨」と斷ると、長岡が

「願ふてもない幸ひ」と出しやばる。腰元が

「ひたすらお出で下され」と招じるので、阿曾次郎らが

「そんなら二人で行つたが好い」と言へば、二人は阿曾次郎に乘り移るべく、無理から勸めるので

「それでは……」と阿曾次郎が蹲むと、一人が棹をとつて屋形船の後から横附になし、三人が乘り移ると、そのうちに屋形の青簾が卷き上がる。

秋月の娘深雪は、高島田へ花櫛、藥玉の簪、藤色の著附、錦の帶といふ形で、琴を前に扣へてゐたが、上がつて來た阿曾次郎と思はず顔を見合せ

「ほゝ」

「はゝ」と、双方氣味合で笑ふと、獨吟になり、深雪は左の袖を口にあて、あどけない科で金地の

扇子で輕くあふぎ、骨の間から阿曾次郎を透かし見るが、其側に母の槇の戸が扣へてゐる。
槇の戸は阿曾次郎に帽子の禮を濟まして、酒一献を勸める。阿曾次郎は腰元の酌を受けて飲む。
深雪は猶もうつとりとして、阿曾次郎の美貌に見惚れてゐる。
阿曾次郎が槇の戸に
「今の妙なる調べは誰方であつたか」と訊ねると
「娘深雪……此後ともに別懇にして下され」と言ひ、名前を尋ねるので
「宮城阿曾次郎」と姓名を名告れば
「あなたが宮城阿曾次郎樣……これ娘、あのお方が」と言ふ。
深雪がいよいようつとりすれば、槇の戸は娘の扇子をとつて、阿曾次郎に
「この扇へなんなりと、ちよいと一筆書いてやつた下さりませ」と賴めば
「お詞なれば扇子をちよつと」と受取つて開いて見て
「この扇面には金地に一輪の朝顔、はて見事」と褒めて、腰元から硯箱を取寄せ、みづから墨を摺つて筆を手にし、ちよつと考へる。
長岡、瀧村は馳走になり、深雪の器量など褒め稱へる。深雪はどこまでも耻かし氣に口に袖をあ

ててゐる。
阿曾次郎は書き終つて、扇子をよごしたと言つて詫て出せば、槇の戸は手にとつて見事な手蹟と稱へ
「露の乾ぬ間の朝顔を照す日蔭のつれなきに、哀れひとむら雨のはら〳〵と降れかし」と讀み、
「情、籠りしこのお歌、あなたへお禮を」と言ふに深雪は
「若し、あなた、お嬉しうござります」と會釋すれば、阿曾次郎は
「一つなんぞお調べ下され」と請へば、槇の戸が深雪に
「それよりも今の御作へ手を付けて、一曲此琴で調べたが好い」
「それぢやと申して」と辭むを、母が
「早う調べたが好い」と許さない。
長岡、瀧村が追從を言へば、阿曾次郎は盞を乾す。
このうち深雪は琴爪をつけ、調子を合せ、獨吟二上りで〳〵露の乾ぬ間の朝顔を」と歌ふと、阿曾次郎は首を稍左右へ動かす加減にして見詰め、〳〵照す日蔭のつれなきに」で、半開きにした扇をつほめ、合方になり、〳〵哀れ一むら雨のはらはらと」で又開いて煽ぎながら見てゐると、〳〵降れかし」

と調べ終ると、長岡が

「やんや、やんや、」と手拍子を打つて船から落ちさうになるのを瀧村が押へる。

阿曾次郎は自作の歌を調べてくれた禮を言ふと、槇の戸はそれに對して挨拶する。

一曲濟ました深雪は扇子で煽いでは、阿曾次郎に見惚れてゐれば、背景の川邊の草の上で螢はぴかぴかと光つてゐる。

時に阿曾次郎は

「最早お暇、御緣があらば又重ねて」と辭儀をすると、槇の戸は引留めて時をついやしたことを詫びれば、三人は元の小舟に乘移り、長岡が棹を突つ張る。

深雪は立つて舳先へ送り出れば、小舟が下手へと流れ、本釣鐘が打ち込まれ、屋形船は舳先を斜に舞臺鼻へ向ける。

深雪は中腰になつて袖を口にあてて阿曾次郎に見惚れる。槇の戸が上手から

「これはしたり娘」と氣をつける、深雪はにこりと笑んで坐り、袖で顏を隱し、立ち上がつて屋形の屋根に左の手を掛け、身を持たせて見送ると、また螢が光る。

木頭から又本釣を打ちこみ、三曲上下の合方へ水の音をあしらつて幕になつた。

追分甚句〳〵月はさゆれど」の歌入り驛路で幕が明くと

島田宿戎屋の場。は奥座敷で、高二重、向う一間の襖、衝立斜に立ち、行燈灯り、上手に違棚、床の間、其上へ下つて一間障子立切り、下手三尺の出入口板戸、廻り緣、下手庭、斜に屋根附の木戸がある。

合方止まると床の〳〵何國にも暫しは旅と」のあたりで、下女が桐胴丸火鉢の火を直し、鐵瓶をかけ直してはひるが、火鉢の左右に座布團が敷かれ、煙草盆が一つ宛置いてある。床〳〵つづりけん、昔の人の筆の跡、徒然侘る假の宿、夜の襖の透き洩りて、風にまたたく燈火の影も寂しき奥の間へ立ち歸る次郎左衛門」で、駒澤次郎左衛門が正面から納戸の著附、仙臺平の袴、花色の羽織で小刀を挿し大刀を持つて出ると、床〳〵何心なく座を占めてで、下手の座布團に坐るが、右の手に扇子を持つてゐる。猶床の〳〵ふつと目につく衝立の」で衝立を見て張交の歌を默讀し

「て、心得ぬ、この張交にある地紙の歌、これは先年山城の宇治にて秋月が娘雪深に某が又逢ふまでの筐にて書いて與へし朝顏の歌、其後はからず明石にて船がかりせしその折節、思はぬ互の出船にて、あかぬ別れを悲しみしが、其時女の手づから我船へ投込みしこの扇」と懷中から紙紗に包んだ扇子を取出し開いて見比べ

「然るに今また此家にて思はずもこの張交、何者が歌ひ傳へてか、はからず東の驛路に見るもはてはて不思議なことぢやなあ」と考へこむ。

床へと獨語、其折の忍ばれて眺めいつたる時しもあれ、襖押明け德右衞門、小腰屈めて入り來れば」で板戸から亭主德右衞門が小紋の著附、羽織袴で出て駒澤の下手へ坐ると、駒澤は扇子を隱し

「おゝ亭主、先刻はさて〳〵きつい働き、危き難を遁れしも全く其方が志……」

「冥加に餘るそのお詞、最前こなたへ參る砌、何か三人ひそひそ話、合點行かずと忍び聞けば、痺藥を茶に混て、あなた樣へ差上げんとの恐ろしい企、えゝ、憎さも憎し、すぐに申し上げうと存じたれど、それではどのやうな科人が出來よふも知れぬと存じ、へえ、幸ひ先日慰みに求めました笑藥、痺藥と取替へた知らずに服んださつきの仕儀」と一寸後を見返り

「此後とても必ず御油斷はなりません」と忠告する。駒澤は

「その儀は某も疾く承知いたした、ま、それは格別、而てこの衝立にある朝顏の唱歌は、なん人の手蹟、どういふことからお身が手にはひりしぞ」

「それでござりまするか、其歌について哀な話が、元は中國邊の歷々の娘さうなが、何やら尋ぬる人があるとて、親元を家出して、それより諸々方々と（力を入れ）流浪して、果はたうとう目を泣き潰し、あとの月まで濱松邊に其歌を唄ふて袖乞ひ、ところへ國元から細緣の女が尋ねて來て會ひましたが、その女は程なふ病死、それから又獨りぼつち、此邊までその歌を唄ひ歩いてをりますが何がさて盲目でこそあれ、器量は好し聲は好し、見るほどのものはいぢらしがり、「朝顏々々」といふて其歌を知らぬものはござりませぬ、わたくしも餘り不便さに、此宿に足を留めさせ、今では宿屋々々のお客の伽、旦那樣、（歎きの調子）世には不便なものもあるものでござります」と手を目に

あてて同情の深さ。

床へ涙片手の物語りも、心にひしと應ゆる駒澤、若し言交せし我妻かと、轟く胸を押鎭め」で思ひ當つたといふ心持に

「それは偖哀な話……身も今宵はなんとやら物寂しい、鬱散のため、其女を呼寄することはなるまいか」

「何がさてお安いこと、唯今呼びに遣はします、お慰みに琴か三味……」

「何分好きに賴みいる」

床へ仔細あるぞと知らぬ佛氣德右衞門、尻輕にこそ」で德右衞門は

「ちよつと行つて呼んで參ります」と立ち上がり蹲んで行燈の火を搔き立てて引込む。

駒澤がぢつと考へこむと、床へ立つて行く跡へ相役岩代瀧太、のさのさと座に直り」で上手の障子から、ひつ詰めた髷、黄八丈の著附、棒縞の袴、黒襟附黄八丈の羽織で、小刀を挿し大刀を持つて出で、上手の座につき

「駒澤氏、さぞ御退屈でなござらう」と言はれて駒澤は形を改め

「これはこれは岩代氏、殊の外お早いことでござる」と體好く受ける。

床へ上部は解けても解けやらぬ、前垂掛の下女お鍋」で下女が下手から出て

「只今朝顔が見えましたから、これへ通しませうか」と聞くと、岩代が

「なに朝顔、とは何もの」と聞き咎めするを駒澤が抑へて

「あいや、この道中で琴三味線を彈き、旅の徒然を慰むる瞽女とやら、拙者何か物寂しうござれば、ちと琴でも聞かうと存じ、亭主を賴み呼び寄せましてござる」と言へば、岩代は更に其詞を咎め

「そりや止めになされい」

「とは又なぜに」

「されば先刻身共が知音たる萩野遊仙同席如何と言はれた貴殿、乞食をば（と澄し顔に）座敷へは通されまい」と飽まで遮れば、駒澤は反して

「はて高の知れた盲女。萬更怪しい、な、それ茶箱も持參いたすまい」と言ひ籠めれば、床のへ言句に詰まれど減らず口」で岩代は

「左程御所望ならば兎も角も、併し座敷へは叶はぬ、庭へ呼出し琴なと三味なと彈かし召されて、早く此場をほつ歸せ」と荒らかに駒澤に當附けて下女に言へば、下女はどぎまぎする。

駒澤は扇子を突出して、下女に「早う呼べ呼べ」と知らすので、下女は心得て立ち上がり、兩袖を合して首を下げ下手へはひり

「朝顔殿々々々召しますぞへ朝顔殿」と呼び立てる。

床へ無殘なるかな秋月の娘深雪は身に積る」あたりで岩代は煙草を燻らす。駒澤は右の膝に扇を立て左の手の平を其上へ掛けてゐると、床へ欺きの數の重なりて、塒失ふ目なし鳥、杖柱とも賴みてし」のうち、下女は薄緣を持出して緣先下手へ敷き、次に包んだ琴を持出して緣の下手へ載せる。

そのうち朝顔は柴の額の附いた島田髷、黒縮緬の着附は、藤紫地に白く櫻の模樣ある肩入、黒繻子と鶸色御殿模樣の腹合帶、草履穿で、屋體の後から廻つて、木戸へ左の杖をあて、右の手は行くへを探りながら來ると、下女が其手を取る。

すると床では〳〵朝顔はもろく朝露と消え残りたる身一つを流石に棄ても縁先の飛石探る足元も、危き木曾の丸木橋、渡り苦しき風情にて、やうやう坐して手を支へ」で下女に連れられて薄縁の上に上がり、脱いだ草履に杖を挿して坐り

「召しましたは此所のお座敷でございますか、拙い調もお笑草、おはもじさま」と濕んだ聲で兩手を結んで會釋すると、床〳〵顔も深雪がなれの果」で駒澤は朝顔を見て驚き、床〳〵不便のものやとせぐり來る涙呑込み」で素知らぬ體を粧ふ。

續いて〳〵岩代はそれとも知らず」で好ましからず

「やあ、見苦しいその態で、我々が目通りへうせたは、聞き及んだ朝顔めな、えゝ、きりきり立ちうせよ」と荒立て言ふに駒澤は

「あいや、岩代氏、さうもぎだらに仰せられな、此方に呼寄せたればこそ思ひ掛けのう……あいや思ひ掛けのう來たものを吐るは武士の情にあらず」と言ひ、更に朝顔に

「こりや、こりや女、太儀ながら朝顔といふ歌、うたうて聞かせよ」と望み、床〳〵望む心は千萬無量」で思入れする。

朝顔が兩手を膝の上に重ねれば、床〳〵知らぬ岩代面ふくらし」で面ふくらして

「さて、さて駒澤氏に、いやもう強い御執心」と言ひ、朝顔に

「こりやこりや盲、なんなりとも、えゝ、歌へ歌へ」と焦き立てるので、朝顔は

「はい・はい歌ひまするでござりまする」と兩手をちよつと上げ、下女が琴を取つて前に据ゑると床〳〵焦るる夫のあるぞとも知らぬ盲の拠り手に」で、下女が手傳つて琴の袋を捲つて下の方へ寄せる。駒澤は扇を前に滑らして見とれ、さうしてそれを右の膝に立てて打沈む。

すると床〳〵戀ゆゑ心づくし琴・誰かは憂を斗爲吟の絲より細き指尖に挿す爪さへも八つ橋の」で朝顔は琴爪を出して指尖に嵌め、〳〵窶れ果てたる身をかこち、いゝゝゝ」で調子を合せ、腰を立て琴爪を一つ落し、下女に拾つて貰つて嵌め、〳〵涙に曇る爪調べ」て又調子を合せて彈き、「露の乾ぬ間の朝顔を照らす」と歌つて泣き崩れ、「日蔭のつれなきに」と歌ふのを、駒澤は元の形の儘でぢつと聞いてゐれば、岩代は朝顔の一舉手一動作を怪訝な顔をして見てゐれば、下女はぢつと下手で立膝になつてゐる。

朝顔が合の手を彈くと、岩代はその音色に聞き惚れゝば、朝顔は涼しい聲で

「哀れ一むら雨のはらはらと降れかし」と歌ひ終ると、駒澤がその形の儘で

「夫を慕ふ音律の我々が身にも思ひやられて思はず感涙いたした……のう岩代殿」

「如何さま琴といひ、器量といひ、いやもうなかなか感心仕つた」と答へて朝顔に

「いや、なに、朝顔とやら、そこは定めて冷るであらう、身共が側で今一曲、さあさあ所望だ〳〵」

と強ゆるを駒澤が

「あいや、岩代殿、もう赦してお遣りなされ」

「さりとては駒澤氏、身共が望むを止めさつしやるは、そりや、意地の悪いと申すもの」

「いや、さうではござらねど、彼も定めて疲れませうと存じて」といふあたりで、朝顔は袋を手探りに引寄せて琴を包むと、それを下女が運んで去る。

岩代は駒澤と朝顔に

「はゝあ、然らば曲は止しにして……こりや〳〵女、そちも腹からの非人ではあるまい、身の上話も又一興、話して聞かせ、ささどうぢや〳〵」と突つ込んで所望する。

朝顔は合點して

「はいはい、よう問うて下さりました、お詞に甘えお話し申すも耻かしながら（耻ろみ）元わたくしは中國生れ、樣子あつて上方住居、一とせ宇治の螢狩に、思ひ初めたる戀人と」と右の手を反して伸ばすと、床の〳〵語らう間さへ」で腰を立て、床〳〵夏の夜の」で體をしなして腰を下して兩手を

突き、〳〵短い契のほいない別れ」で兩手を袖に入れ、〳〵尋ぬる便りさへ」で腰を立てて兩袖を左右へ突き出し、〳〵思ふに任せぬ國の迎ひ」で右の手を出し、〳〵親々に誘はれ、難波の浦を船出して、身を盡したる憂思ひ」で兩袖をすくつて左右へ出し、〳〵泣いて明石」でちよつと身を反し、〳〵風待に、たまたま」で腰を浮かめて兩手を出して、うろうろとなり、慌てて縋るやうな形をし、〳〵逢ひは逢ひながら」で兩手を後へ遣り、〳〵つれなき嵐に」で左の袖を拂ひ、〳〵吹き分けられ」で腰を立てゝ一寸前へ出で、〳〵國へ歸れば父母の思ひもよらぬ夫定め」で帶の左前に挾んであつた白地の手拭出して涙を拭ひ、〳〵立つる操を破らじと、屋敷を拔けて」で手拭を抱へ、〳〵數々の憂目を凌ぎ都路へ登つて聞けば其人は、東の旅と聞く悲しさ」で聲を震はせ、〳〵又も都を迷ひ出で」で右に持つた手拭を左へこき、〳〵いつかは廻り」で左へ上げて右へ下げ、〳〵逢坂の關路を跡に」で左右に振り、〳〵近江路やみのをはりさへ定めなき」でそれを寄せ、〳〵戀し戀しに」で右へ投げるやうにし、〳〵目を泣き潰し」で卷いて遣る瀨ない思ひのやうにちよつと泣き、〳〵物のあいろも水鳥の陸にさまよう」で左右に擴げて中程を口に銜へて、〳〵悲しさは」で涙を拭はうとして落し、手探りにして、「チン〳〵チン〳〵」の三味線で探り得ず、右の袖で目を拭ひ〳〵いつの世如何なる報にて、重ね重ねの歎きの數」で上手へ二三と膝で行き、正面になつて拜み、〳〵憐れみ給へとばかりにて、聲を忍びて歎きけ

る」の床の切れで、おのづと膝の下へはひつてゐた手拭をとつて口へ銜へ、屈んで泣くと、岩代が「さて哀な話、併し男日照もない世界に、えゝ氣の狹い女だな、いやもう、しづんだ話で氣が滅入つた、寢酒でも食べ氣を晴さう」

と獨語に言つて朝顔に

「いや、なに女暇くれる立歸れ」

「はい、はい有難うございます、さやうなればお客樣、もうお暇申します」と辭儀する。駒澤は朝顔に

「おゝ、朝顔とやら太儀であつた、初て聞いて身の上話、若しその夫が聞くならば、さぞ滿足に」

とちよつと詞をうるませ、氣を變へて岩代に

「のう岩代殿」

「左樣、左樣」と受けて煙草を喫む。

朝顔は駒澤に

「これは御親切なお詞、有難う存じます」

と禮を言ふと、床へ杖探り取りながら」で手探りで草履に挿した杖を拔いて草履を穿いて蹲み、右の肩に杖を寄せて突くと、〻蟲が知らすか何とやら耳に殘りし情の詞、名殘り惜しさに泣く泣くも」でちよつと思入れをして立ち、帶の間に挾んだ手拭を左に持ち、〻心は跡に探り行く」で下手へ一つ大廻りに廻つて杖を突き、出た時の形で木戸を出て行く。

床〻折しも奥より若侍」で侍が出て

「夜も深更に及んだれば、御兩所共に早お休み如何、明日は正七つの出立」と勸める。岩代は駒澤に

「お休みなされぬか」

「拙者は今暫し用事もございればお構ひなく先づお先へ」

「然らば臥せらう御免下され」と立ち上がると、床〻胸に一物心をあとに奥の間へ伴はれてぞ入りにける」で侍が先に立つて岩代は上手へはひる。

一人殘つた駒澤は手を鳴らして下女を呼び、「亭主を呼んでくれ」と言付け、矢立を取出し最前の扇子へ何事か認める。ところへ亭主が出て下手へ控へ

「召しましたは何の御用でございます」

「德右衞門、折入つて賴みたきは、先刻の朝顔といふ女、今一度呼寄せてたもるまいか」

「畏りましたが、借しいことに、只今清水と申す方へ招かれて參りましたから御用なら呼びに遣は

しませうが、今夜の間には合ひかねませう」

「はて殘念至極、身は正七つの出立、ま、よくよく緣の……」と殘念といふ思入、亭主は審り

「なんと御意なされます」

「あいや、なに、德右衞門、今の女に謝禮のため、この三品を朝顏が參らば渡してくりやれ」と祕法の目藥と扇子へ金包を添へて渡す。亭主は受取つて

「それはさぞ喜ぶことでござりませう、しつかりお預り申します」

「然らば宜しくそちに賴み置く」と襖へはひるのを亭主は立つて送り、岩代を惡く言ひ、駒澤とは雪と炭と譬へて坐り

「目藥、結構な扇子、おびただしい金子……はてな」と合點行かぬ心持で行燈の戸を明け、扇子を開いて見るのが木の頭、首を傾けて考へ込むので幕になつた。

追分甚句で幕が明くと

戎屋店口の場。 上手の門に本陣とした高張提灯が二張立ててあつて、宿屋店先の體、こゝに若い者、女中、番頭など五六人ゐると、表に乘駕籠が二挺來てゐる。

やがて上手から合羽姿の高足駄で岩代と駒澤が出ると、侍四人、赤合羽の供廻りが五人從ふ。

亭主が見送りに出ると、岩代は亭主に

「よくも恥辱を與へたな、きつと返報いたすであらう」と言つてゐれば、駒澤は「お先へ」とばかり駕籠に乘る。岩代も續いて乘り花道へ舁かれて行く。亭主は奉公人一同を勞つて休ませる。

床〳〵深雪は何か氣にかかり」で下手から朝顏がそぞろに杖を突いて來るのを亭主が見て手を取り店先へ腰を掛けさせ、

「雨がぼろついて來たぞ ……それは兎も角、宵の內にお客樣があれから、も一度呼びに遣つてくれと仰しやつたれど、淸水へ行つたと聞いたゆゑお斷り申したれば、今の先お立ちなされた、併し、まあ悅べや、藥は妙藥、大枚な金子と結構な扇子まで我が身にやつてくれと言つて下すつた」と手渡しすれば、朝顏は

「これは冥加に餘る下されもの、お禮申さいで殘り多いが」と言ふうちに、亭主は袴を脫ぐ。朝顏は扇子をさすつて

「申し旦那樣、この扇になんぞ書いてはござりませぬか、ちよつと見て下さりませ」

「おゝ、どれどれ（手に取り）、金地に一輪の朝顏、露の乾ぬまが書いてあり、裏に宮城阿曾次郎事駒澤次郎左衞門と書いてあるぞや」

「えゝ、あの宮城阿曾次郎事駒澤次郎左衛門とその扇に」

「あいのう」と亭主が答へる。

床〳〵はつとばかりに俄の仰天」で朝顔は驚き

「えゝ、知らなんだ、知らなんだ、知らなんだわいな、どうりで好う似た聲と思ふたが、そんなら やつぱり阿曾次郎樣であつたるか——申し申し旦那樣、そのお客樣はいつお立ちなされました」と 寄添つて聞けば、

「おゝ、いんまの先のことぢやが、我身はまたお馴染か」

「えゝ、馴染どころか年月尋ぬる夫でござんすわいな」と泣き伏し起き直り

「かういふうちも心が焦く、追つ付いてたつた一言」と帶の上から手拭をぐつと締めると、どろど ろと雨音になる。すると、床〳〵行かんとするを引き留め」で亭主は店先から下り

「あ、これこれ、まあまあ待ちや、えゝ、折惡う雨が降り出し、此暗いに一人は危ない危ない」と 留めるも

「いえ、いえ、たとへ死んでも厭ひはせぬ」

「さゝゝそれはさうでも盲の身で、危ない、危ない」とで、朝顔は上手、亭主は下手になつて、

遣らじと杖を取り合ふと、床〳〵折しも告ぐる」で時計が七つ打つうち、朝顔が

「いや放して」で杖を手にし、床〳〵杖を力に降る雨もいつかな厭はぬ女の念力、跡を慕ふて追つて 行く」で杖を力に駈け出し、花道の七三で杖が中程から突き折れたのを投げ棄て、指尖を動かし手 探りの形で、體を伸しつゝ、狂氣の如くよろよろと肩を搖する加減にして揚幕へ雨の音ではひる、

舞臺の亭主は、飛んだことになつたといふ面持でまごまごするのが木の頭、早目の合方雨の音を かむせて幕になつた。

早目の合方に水の音で幕が明くと

大井川附近の場。で向う河を隔てた山の背景、河縁に葦、上手に松の立木がある。

舞臺の眞ん中に、下郎關助が旅形で下郎姿で立つと、上手に九人下手に七人の川越し人足がゐて 各自に蓮臺を持つてかゝると、關助が見得を切るところから、床〳〵遠州濱松」の歌入り、双盤になり、 跳への立廻りが十分あつて、關助が上手から一同を將棊倒しにして、花道から向うへ追込むのが早 双盤で

「この上はちつとも早く」と行かうとすると、隱れてゐた一人がかゝるのを投げ退け

「さうぢや」と獨り頷いて上手へはひるのが早目と水の音、木頭から同じ鳴物で道具が廻り、半廻

りから雨の音、波の音になり極まると

大井川渡し口の場。で向う山の背景。下手から上手へ約三分の二は堤、下手に上り口、藪壘、正面に柳の木、その上手に「大井川渡し場」とした榜示杭。上手に蛇籠を斜に置いて、一面の波布は水嵩が増したといふ有様である。

床〳〵名に高き街道一の大井川、篠を亂して降る雨に打ち交りたる霹靂、漲り落つる水音は、物凄くもまたすさまじく」で川越しが二人柳の木の下に雨宿りをしてゐると、續いて床〳〵夫を慕ふ念力に道の難所も見えぬ目も厭はぬ深雪がこけつ轉びつ」で朝顔は前幕の形で向うから出て、堤へ滑りながら上がると波の音、稲光がする。

朝顔は川越し達の聲を耳にし

「のう、川越達、駒澤次郎左衛門様といふお侍、もう川をお越しなされたか」と聞くと、床〳〵まだか聞かして聞かしてと、いふ聲さへも息切れの」で猶聞かうとすると、川越しは

「おゝ、その侍は今の先渡つたが、俄の大水で川が止まつた、笑止」といふのを床にとつて、床〳〵笑止、笑止とばかりにて」と可笑しがつて二人は急いで行つてしまふ。朝顔は

「川が止まつた」と言つて驚くと、床〳〵はゝあ悲しやと張りつめし力も落ちて伏轉び」で泣き伏し

〳〵前後不覺になりけるが」で立つて上手へうろうろ、下手へうろうろ、上手寄になつて、兩手で身を抱き緊めるやうにして伏し〳〵また、起き上がつて見えぬ目に空を睨んで」で坐つて空を見上げ、〳〵天道様、聞えませぬ、聞えませぬ、聞えませぬわいな」（サハリの掛かりから段々前の鳴物打消す）で右の袖で泣き、

「この年月の艱難辛苦も、どうぞ、も一度その人に逢はしてたべ」と言ひ、床〳〵と片時も祈らぬ間とてないものを」で手を合せ

「けふに限つてこの大雨、川止めとは、えゝ何事ぞいの」と泣き床〳〵思へば此身は先の世に如何なる程の罪せしぞ、さても、さても」で腰を立て、〳〵あぢなき」で兩の袂を持つて振り、右で左の袖を打ち

「焦れ焦れた其人に逢ふても知らぬ盲目の」と言つて、指尖で盲目を示し、床〳〵此身は如何なる悪業ぞや」で兩手を顔にあてて泣き、〳〵夫の跡を戀ひ慕ひ、石になつたる松浦潟」で着附の右の肩を脱ぎ、〳〵巾領振る山の悲も身に比ぶれば數ならぬ」でよろよろとして榜示杭にあたると、その途端に髪がほどけ、杭に體を寄せて

「三千世界を尋ねても、こんな因果が又と世に」と言ひ、〳〵あるべきかはと口説き立て」で川縁へ

片足を踏み落し、〻拳を握り身を震はし」で兩腕を交る交るに打ち、〻泣涕焦れ歎きしは餘所の見る目も哀れなり」で下手へ斜に泣き倒れる。

更に床〻稍あつて起きあがり」で起き上がつて正面になり、

「さうぢや、さうぢや、とても添はれぬ身の業因、この川水の増りしは、所詮死ねとのことなるべし、未來で添ふを樂みに、こゝを三途の岸と定め」と右の手を下に突いて言ひ、床〻弘誓の船に法の道、急がんものと泣く泣くも」で中腰になつて兩袖を持つて泣き、〻夫を戀し」で左の膝へ手を掛けて立ちかね、〻小石の數」で波の音がして、手探りに小石を拾つて、〻袖や袂に捨ひこみ」で兩の袂に入れて立ち上がると、時の鐘が薄く聞えて、浪の音打ち込む。

朝顔は兩袖を上げて持ち、上手の堤外れへ行つて石を投げこんで、其音のドドンを聞き、覺悟の體を見せる。

この時關助が下手から出ると、床〻南無阿彌陀佛の聲諸とも」で朝顔は「南無阿彌陀佛」と言つて身を投げようとするを、關助が背後から「まあ〳〵」と抱き留め「お待ちなされませ」

「いや〳〵誰かは知らねど放して〳〵」

「どういたしまして、關助奴でござります」と言ひつゝ、榜示杭の手前へ連れて來て坐らせ、下手へ中腰になつて

「尋ねましたが盡きせぬ御緣、宮城樣にお逢ひなされましたか」

「折角逢ふたが盲目の悲しさ、それとも知らず別れたれど、どうやらお聲が氣掛りゆゑ、戻つて聞けばやつぱり其人、おのれやれ追つ付かうと、跡追うて來たればこの川止め、えゝ、どうせうぞいのう」と兩袖を顔にあてると、碪樣の合方になつて、關助が

「おゝ、御尤でござります、拙者奴もあなた樣のお行へを尋ね廻るうち、一昨日の夜の夢に淺香殿に逢ひましたら、あなた樣は島田宿の戎屋德右衞門方にござると言はつしやると、思へば目が覺め、なんでも不思議と夜を日について參つた甲斐あつて、すんでのこと危いところを、やれやれ嬉しや下郎奴が、お目にかかる上はお氣遣ひなされまするな、駒澤樣にお添せ申します、併し淺香殿は阪東順禮の姿になつて、東海道へ尋ねて見える筈、お逢ひなされましたか」

「さればいの、その淺香には跡の月、濱松で回り逢つたが、その夜惡者に出會ひ、數ケ處の手疵、死ぬる今端にわたしを呼び、中山の邊に、わしが生みの親古部三郎兵衞といふ人あり、この守刀を證據に尋ね行き、秋月弓之助が娘と名告つて逢へと敎へてくれしが、可哀やつひに死に遣つた

わい」

「すりや淺香殿には最期とや」と驚き、向うを見ると、德右衞門が下手から出て、その短刀を見せてくれと言つて、見てびつくりし

「そんならお前は秋月弓之助樣の御息女、その淺香といふは我が娘であつたるか」と眞ん中に坐ると、朝顏が上手に坐り、關助は下手に立つ。德右衞門は朝顏の懷から目藥を取出し

「これを服すれば立所に眼病は治ります、どうぞ上げて下され」と言ふので、關助は用意の水呑を出して、川水を汲んで朝顏に藥を服ませると、ドロドロで仰向きに倒れるのを介抱する。

德右衞門はその際に双肌を脫いで襦袢になり、短刀を拔いて腹に突き立てたので、關助は驚いて側へ寄り

「何故の生害、早まつたことをした」

「その驚きは御尤」と言ふので床のメリヤスに空笛がはひり

「わたくしことは、そのお尋ねなさる古部三郎兵衞と申すもの、お孃樣の祖父秋月兵部樣には三代相恩であつたりしも、若氣の至り、奧女中と忍び合ひ、お手討になるところを弓之助樣に助けられ女諸とも國を立退き、生み落せしが女の子、貧苦の中に育つうち、二つの年に母は病死、男の手で

育てもならず、伯母が方へこの短刀を添へて養子に遣りしが、回り回りて思はずも、親が命を助けられし秋月樣へ御奉公、死んでも忠義を忘れず導きをつたか……おゝ出かしをつた娘淺香」と身の上を語つて、死せし娘を稱へる。

やがて、關助は朝顏を呼び生け

「心が付きましたか」

「おゝ、關助か」と立ち上がつて我と我が兩手を見る。關助は目が見えたと知つて、ほんと小膝を打ち

「明いた、明いた」と喜んで、德右衞門の側へ行つて

「辱けない」と兩手を合す。

朝顏は川水に姿を映して見て嬉しい思ひ、鴉がカア〳〵〳〵と間を置いてカア〳〵と啼いてはひると、

床へ露の乾ぬ間の朝顏も開きしこの目は盲龜の浮木、優曇華の花にまさりし夫の賜の……うちに朝顏が扇子を見ると、へ早明け渡る鳥の聲、山田の惠みいやまさり、重れる朝顏物語り末の世までも」で、本釣鐘を打ちこみ、へいちじるし」と切れの間に德右衞門はぐつと前へ乘り出し、左の

手を持添へて吹笛を搔き合掌する。

關助が下手から德右衛門の死に對して兩手を合すと、朝顏は上手から同じく德右衛門の此體を見て愁ひの科で、木につき床の三重へ又木鈎鐘、送りへ薄く浪の音をかむせて、東が白む有樣で幕になつた。

「奥州安達原」の一ッ家

（袖萩祭文の後段）

大正二年二月於明治座、市川小團次（老婆岩手）主演

時の鐘、風の音、禪の勤めで幕が明く。

屑屋賣の平舞臺。上手一間反古張障子の屋體。その上手夕顏の搦んだ垣根、臼の手洗鉢、正面暖簾口に續いて戸棚。下手鼠の破れ壁、横に竹格子の窓。蔦の搦んだ簀戸。入口に高燈籠吊しあり。

茫原の中の一つ家、彼誰の頃である。

床の〳〵黄昏かゝる片里の草に育てど草ならぬ、花は鄙でも都でも可哀らしさと憎さげは跡から付いて藥賣」で、砧入の合方になり、向うから米藏の田舍娘（新羅三郎義光）がすつと澄まして先に立つと、小文次の旅の藥賣（鎌倉權五郎景政）が合羽姿、兩掛を肩にし、付いて出「これこれ娘、己をどこまで連れて行くのぢや」

「もちつとぢや程にどうぞ送つて下さんせ」
「もちつとぢやと云つて日は暮れかゝる、幸ひあたりに氣遣ひのない安達ヶ原」
「あゝ、もし〳〵まだ日は暮れ切らぬ薄明り、誰ぞ見たら恥かしい、袖すり合ふも他生の緣、遠い所まで送つて貰つたお前、わたしが使ひに行く内はもそつと先直き口上を言つて戻るわいな」
「すりやその内には暗うもならう」
「その時には」
「どうなとなるか」
「まあ、送つて下さんせいなあ」
「そんなら送つて遣りませう」と舞臺へ來て、男女は内へ這入り、藥賣が「見れば内には誰も見えず、ひよつと用が長くなつたら、藥を賣らずに油を賣らにやあならねえ」
「そんならお前は藥屋さん」
「越中富山の反魂丹と諸々の在々をせり賣り歩くわしが商賣欲しくば遣らうか」
「藥に用はござんせぬ」
「それなら二本松の市で買ふて來た朱塗のこの櫛を遣らう」と包から出す。

「ほんに好い櫛、そちらにあるのは」
「これは秋田貝ぢや」
「美しいその櫛、わたしにどうぞ」
「欲しくば己が云ふことを聞くか」
「さあ」
「こゝまで送つて奇應丸、そもじを色に消毒丸、試みは十六娘反魂丹、御承知ならばこの間に」と袖を捉へると、娘が「あゝれ」と逃げるのを追ひ廻す。
日ぐらしの聲がして、障子の内から「陸奥の安達ヶ原の黒塚の隣り家なき一つ家に物騒がしい、誰ぢや誰ぢや」と嗄聲に言つて、小團次の老婆（安倍の後室岩手）が白髪の結髪、茶の着附、黒の帶で前を締め、小紋の袖無しを被て、煙草入と煙管を持つて出て片膝を立てゝ坐る。
屋體の内には、絲車、苧桶、古櫛箱の上に紙紗包の燭臺、線香が立てゝある。
男女は下手に坐る。
老婆は娘に「これ〳〵娘、見れば知らぬ人と、とち狂ふて、どこの人ぢや」
「日が暮れ掛かつて道がこはさに途中から送つて貰ひました」と答へると、藥賣が「反魂丹の藥賣

ぢや」といふ。

老婆は「すりや旅の商人衆か、やれ〳〵御親切、娘ようお禮を申しや」と云ふに、藥賣は、不審しく思つて「そんならそもじはここの」と云ひかけると、娘が「あい娘でござんす」老婆は「わしは母でござります」で、藥賣は「ぢやあ己をここまで」

娘は「一しよに來たはお前に」を、藥賣は受けて「送らせて」「內へ戻つつたのぢやわいなあ」「そんなら己を一ぱい嵌めたか」と焦へば、老婆は「はめたとは」

「さあ深い所へ、えゝ馬鹿々々しい」

「嵌めたの深いのとは谷川へでも落さつしやつたか」

「さあ、つひ出て來る待つてゐろ」

「つひ出るとは」

「さあ、もう月が出さうなと待つてゐると云ふことさ」と反して藥賣がいふ。

老婆は「月で思ひ出したは、暮れかゝるのに高籠籠、戀慕の闇を照らして置きませう」と獨言のやうに言つて、藥賣に「太儀ながら卸して下され」と頼む。

「こゝまで使つた上にまだ使ふか」

「今宵の月の出汐は初夜過ぎ、待たずと照らすあの燈籠」

「何も後生だ、どれ卸してやらう」と、外へ出て燈籠を卸す。

內の居爐裏には粗朶が燃えてゐる。

娘は火を燈籠に移せば、藥賣が吊り上げるうち、行燈にも火を點ける。

老婆は燈籠を吊るすのを見てゐて、「工合が悪くなつたか、あす直さう」など云ひ、藥賣に「御明しが濟んだら行んでくれ」と嘗なくいふ。

藥賣は「娘を送つて遣つたも燈籠を世話したも今夜にしり込んであの娘を」老婆は「娘は無病、藥屋に用はござらぬ」

「どうあつても反魂丹賣に」

「反魂丹ではない、あんほん丹ぢや」

「えゝ己をあんほん丹とは」

「この婆が名附親」

「お置やがれ」

「おとゝひござれ」と笑ふ。

床の〳〵戸口ぴつしやり立て切れば、あんぽん丹はけゆん顔」で老婆は戸を立て切る。

藥賣は「なんの事ぢや、むごい目に逢はしをつた」と云ひ床の〳〵何思ひけん裏の方忍んでこそは入りにけり」で思入をすると、風音になり、藪に忍び入る。

床は〳〵かくとも知らで母岩手」と續け、老婆は娘に「今の藥屋奴が赤い櫛や秋田貝を置いて行きをつた、呼び戻して遣りませう」と云へば「わたしが呼んで遣りませう」で門口を出て向うを見、「もう影も形も見えませぬ」と内へはひる。

老婆は煙草を喫みつゝ「入るなら取りに戻るであらう。それはさうと此れ娘。わしにも知らさず日の暮れまで出歩いて、どこに行つてござつた、人に送られて戻るとは大膽な」と云つて、氣を變へ「娘といふは表向き、大事な御身、ちとたしなんだがようございます」と輕くたしなめる。

娘は行燈の前に坐り「お前に云ふてからと思ふたが、供の人雇ふのと、世話になるが氣の毒さに沙汰なしに行つて來たのは、御病人への御願掛けの神參り、これからは斷つて參ります」と詫びる。

老婆は「神參りとあればなんの否やを申しませう。このやうにながゝしう云ふも、世間の手前世を忍ばるゝ筐の内侍樣、人に見られてはならぬ身の上、用があるならこの婆を呼ばはしやりませ」

「合點でござんす」

「必ず端近ふ出まい」

「あい」と娘はしをらしくして云へば、床の〳〵奥の一間へ入りにけり」で包を持つて、一寸思入をして暖簾口へはひる。

老婆は「利發のやうでも若いしどなさ、頭の雪ともろともにおかぜを亂す老が胸、いつかは解けん小車の、どゝりや取り掛けた糸操つて置かうか」で煙管を持つて上手へはひる。

床の〳〵杵に操り卷く拝車、くる〳〵廻つて旅飛脚」で韋駄天になり、向うから升紅の飛脚三四郎が菅笠を手にして出て舞臺にかゝり「いくら歩いても歩いても芒原で」門口に行き「あゝ草臥れた草臥れた、道に迷つて心が焦く、息が切れる、もし〳〵御無心でございます、煙草を一服やらして貰ひたい」と訪ふ。

上手から老婆が「どなたでござる」と出て戸を開け「見れば旅のお人、暮るゝまで歩かつしやるはなんぞ急な御用でも、これからどこへ」

「ちつと急ぎの爲替金を持つて福島まで行くものでございます」

「なに爲替の金を」と思入をするので、飛脚は「南無し、いやなに、爲替ではない袷を持つてゐる

と云ふ事ぢや、なんと工面が好からうな」

「金があると云はつしやらうが、見る通り年寄りの一人住み、わしに氣遣ひはなけれども、この物騒な安達ヶ原」と薄氣味の悪い思ひをさせるので、飛脚が「あの追剝でも出ますかの」

「いや、出る所ぢやない、きのふも丁度今時分に、あれ向うの森の中で旅人が殺されて」

「えゝ」

「隨分氣を付けてござらつしやれ」

「これ婆さま、そのやうに追剝がうろ付く所へどう行かるゝものぞ、どうぞ今宵は泊らして下されと無心すると「そのやうな金を持つた人は泊らすも心遣ひ」と斷わる。

「それが慈悲ぢや情と思つて」と手を合す。

「それ程に賴まつしやるなら、何をするも浮世の爲め」

「そんなら泊らして下さるか」

「泊めて進ぜませう」

「やれ〳〵嬉しや」で内へ這入り、老婆に出された盥の水で足を洗ひ、内へ上がつて刀へ豆絞りの手拭を結はへ、四邊を見て氣みの悪い心持になり「泊らうと思つたが泊つてはをられぬ、時限りの

早飛脚」と斷つて震へ、逃げ支度をする。

老婆は平氣な顏をして「すりや物騒な夜道でも」

「行くとも〳〵樣々な文句を付けて泊めたがるは旅の習ひ、そんなものぢやごんせぬわい」

「はて年寄の云ふこと疑ふなら行かつしやれ、したが跡で後悔さつしやりますなへ」

飛脚はいよ〳〵ぶる〳〵震へながら「なんの後悔するものぞ、かう見えても早飛脚の三四郎樣だ、夜夜中の道がこはくて飛脚の役が勤まるものか、これ己は偉いものだぞ、かう見えても劍術は無敵流、柔術は馬場流ぞや、なんと豪いものであらうがや、なにか出たら斬り出して遣らかすべい」と鉢卷をして、兩脚をぐらぐらさしてゐる。

老婆は手を前に合せて「口ばかり達者なこなさん、それ〳〵足元が震ふてぢやないか」

「え」と心附いて「力瘤で體に地震ひがいるのぢや」と足を踏みしめて行き掛ける。

老婆は「これ〳〵お飛脚、この行先は猫芒原、咽をうるをす水もないぞや」

「え、清水もないとや」

「水の飲置き澁茶なりとも飲んでござれ」

「清水もないと聞いたら急に咽が乾いて來た、溫くして一ぱい」

「一ぱいと云はずになんぼなと飲んで行かしやれ」と、古土瓶と茶碗を出して進めるので、飛脚は注いで飲むのを、老婆は行燈に兩手を掛けて「なんの〳〵」と勞る心持で見てゐるうち、飛脚は腹を押へて「こりや急に腹が痛むわ、あゝ痛い〳〵」と苦しみ出す。

老婆は「これ〳〵飛脚さん、なんぞ中りものでも食べやせんなんだか」

「晝暑いから西瓜を喰つて、それから蕎麥を食ひました」

「なんぢや、蕎麥を、それは大敵藥、こりやこなさん死ぬるぞや」

「なんぢや死ぬる、やれ〳〵悲しい苦しい」と云つて苦しみつゝ「あゝ、これ〳〵蕎麥を食つたのはきのふぢや」

「それにまあ、どうしてその苦しみ」と澄まして言ふので、飛脚は氣付いて「こりや己を毒で殺すのぢやな」

「どうしてそのやうな」

「さうだ〳〵とても死ぬなら己れ婆ばあ奴」と刀を拔いて斬つて掛かる。

二人の立廻りがテンテツンで風の音、老婆は財布を奪らうとすると、飛脚は遣らぬと揉み合ふうち、毒が廻つて苦しんで落ち入る。

床の〳〵今は樣子白髮の老女、金に眼も暮合時で」鐘の音。「財布捻ち込む懷の胸三寸も心から善と惡とを一つ家の、老の爲業ぞ」で死骸を消す。

老婆は取り上げた財布の紐を括つて上手に向き行燈に寄つて戴くと、鐘が鳴り、風の音凄く、床の三重送りで鳴子半廻しになる。

一つ家の横手で、秋草が交つた芒原、松の立木がある。

床の〳〵廻る月日の關の戸をやう〳〵遁れ生駒之助」で禪の勤になり、向うから野衾の八、魔魅の六が、寬博股引草鞋掛で、提灯を付けた山駕籠を舁いで出ると、市藏の志賀崎生駒之助は、大小脚袢、合羽掛の旅形で菅笠を持つて跡から付いて花道で留まり、「これ〳〵駕籠のもの、なんぼ夜道ちやといふて、ちつと徐にやつてくれぬか」と聲を掛ける。

八が「はい〳〵徐にやる方が勝手でございやす」といへば、六も口を揃へて、「併し早くお泊りへと存じやして」と、二人で急いだのだと云ふ。

駕籠の中で樂之助の戀衣(岩手の娘)が、「ほんに旅駕籠に似合ぬ優しい人達ぢやわいなあ」といへば、生駒之助は二人に「いやもうその方達がそのやうに云ふてくれるので、安堵いたしてゐる、時に先の驛へはもう何程あるな」と聞くと、八と六とで「えゝもう少しでございますが、これから先

は芒原、奥州名代の安達ケ原」

「ことに夜道は物騒なれと」

「わたくし共がお附き申せば」

「大丈夫でございやす」

「安心なさいまし」と納つてゐる。

生駒之助は「併し夜道の原中ゆゑ、早く宿へ付きたいゆゑ急いでくやれ」

「おい棒組もう一肩やらうか」

「おつと合つてんだ」で舞臺へ來て、駕籠を卸し、二人は原中へ胡座を掻く。

生駒之助は「これ〳〵、もう一肩やらうといふ間もなく、駕籠を卸して、どういたすのぢや」と聞く。

二人は脚氣が起つて一足も出ないとすねる。

戀衣は「そりやまあ困つたことではある、なんぞ好い藥が」と心配すると、八と六が「えゝ、なに好い藥といつたつてわつちの脚氣は萬金丹」

「金粒丸のずつしりした」

「重みのあるので直ります」と落ち着きくさる。

生駒之助はそれと見て取り「むゝ、さては己れ等は盜人ぢやな」

「知れたこと、跡の宿から目を付けて、おためごがしに乘せて來た」

「街道ならぬ脇道へ引きずり込んだは剝ぐ爲めだ」と威す。

戀衣が「えゝ、そんならこゝは道でない所かいなあ」で、駕籠から出ると貝絞りの旅形で、夫の側へ行き「生駒さん、どうせうぞいなあ」と縋る。

生駒之助は「氣遣ひいたすな、たとへどのやうに企むとも、彼等如きを物の數とも思はんや、こゝ構はずと行きやれ〳〵」と男女は連れ立ち行かうとする。

駕籠舁は「さういや、いつそ」で、早禪になり、左右から息杖で打つて掛かつて立廻りになり、生駒之助、刀の柄袋を取つて口に銜え、身構へるところへ上手から老婆が出て「これ〳〵あぶない、待たつしやれ」と留めると、戀衣は腹が痛む心で押へてゐる。

「この一つ家の」

「婆ばあどん」といふ。

老婆は「二人して女中連の旅の衆をとらへてどうするのぢや」と聞くと、二人は「どうと云つたら、この爲事を」といふのを「えゝ惡いぞや〳〵」で、「二人の惡いとは」を耳にも掛けず「はて、こなさん達は半商賣ではあらうが、わしがさゝぬ、年こそ寄つたれ一つ家に住ゐするこの婆ばあ」といつて、男女に「お前方はまあ落ち着いてござらつしやれ」と安心させる。

生駒之助は「途中の難儀何分よろしく」と賴む。

老婆は駕籠舁に「はて、惡い〳〵……さ惡いものに逢ふたと諦めて、早うこゝを歸らつしやれ」と云ひ二人が「でも折角」と口惜しがるのを「達つてと云へば庄屋殿へ附き出して」など云つて、「早う行つた〳〵」と目で知らせる。

二人は「惡い所へこなさんが出たばつかりに」

「はごへ掛かつた鳥を逃すたあ」

「今夜の爲事の間の惡さ」

「棒組行かう」はこい合、禪の勤めになり、空つ駕籠を舁いで下手へ行く。

生駒之助は「これは〳〵いづれのお方か存じませぬが、何かとお心添へ忝ふ存ずる」と老婆に挨拶し、戀衣に「これ女房ようお禮を申しや」

戀衣は「どうなることかと、びつくりいたしました、……お婆あさん難有う存じまする」と禮を述べる。

老婆は「いえ〳〵、なんのお禮に及びませう、あいらはこゝら邊で名うての惡もの、油斷も透きもなるこつちやあござりませぬ」

戀衣は「あゝ嬉しや」と云ふものゝ、今のびつくりで腹が痛み出し「あいたゝゝゝ」と蹲んで腹を押へる。

生駒之助は「どういたした〳〵」と側に寄る。

戀衣は苦しむ。

老婆は「これお女中、どうしなさんした」と立ち寄つて「こりや餘程のこと、この儘に夜道は行かれまい。まあ〳〵わしが内で養生してござりませ」

生駒之助は渡りに舟と「然らば御老母、誓の内」と賴めば、老婆は「御遠慮なしに」との氣輕さに、戀衣は「てもお優しい」と喜べば、「なんのまあ、旅は道連れ、世は情ぢや」と親切らしく云ふ。

床のへ奥底もなき挨拶に、夫婦は安堵、微なる灯影目當に打連れ伴ひ來たる我が家の軒」で、舞

臺は元へ戻る。

床の〳〵詞に二人は立ち寄つて」になり、老婆は先に立ち、三人して門の内にはいる。

生駒之助が「これは〳〵佗びたお住居、月の最中はさぞ好い景色でござりませうな」と言へば、

老婆「いやもう人里離れた一人住ひ、何不自由しようと氣儘に暮すが一德ぢやわいの」

「いやもうそれが老の樂み」と受けて、戀衣に「これ女房、夜も大ぶ更けたれば、御老母の御親切

といひ、今夜はこゝへ泊めて貰はふかへ」と優しくいふ。

「方角さへ知れぬ道、又今のやうな惡者に逢ふよりいつそ」で老婆に向ひ「お婆あさん、お泊めな

されて下さんせんか」と賴めば「そりやもう、御不自由さへお厭ひなくば」と受け合ふ詞に、生駒

之助は「そりやお泊め下さるか……やれ〳〵嬉しや難有うござります」で二人は喜ぶ。

床の〳〵夫婦が悅び杖草鞋、脚袢の紐を解く〳〵と、二人を誘ひ内に入る」で、老婆は盥を出す、

二人は足を洗ひ、内へ上がり、戀衣は上つ羽折りを取り、二人して上手、老婆は下手になつて「見

ましたところがお侍、お前さん方はどれからどれへお出なさるのでございますか」と聞く。

戀衣が「わたくし共は都のもの、はる〴〵此の陸奥へ參りましたは、搜ねる人が」と答へるのを

生駒之助が「あゝこれ女房」と押へて「いや、我々は當國松島見物の爲め」と云ひ紛らし「いやそ

れは格別、月見月に時ならぬ盲燈籠はお國の風、但しは又お志の常燈ともいふやうな」と、謂は

れを聞く。

老婆は「御尤のお尋ね、こゝは山なり原なり、道の知れぬ街道に、難儀する人がござるゆゑ、

あのやうに燈籠を灯し、往來の衆の助けにするも、先き立たれた夫の未來を弔ふ心」などと語るの

で、生駒之助は感じ入り「いかさま、それは限りもなき大功德、御殊勝なことでござる」といふ。

床の〳〵話しの内に戀衣が、又も差し込む苦痛の體」で、戀衣は「あいたゝゝ」と、いよ〳〵差し

込みが烈しくなる。

生駒之助は「こりや女房、まだ治まらぬか」と心遣ひすると、「時を切つてお腹の痛むのは、どう

でも月の」と言ひ掛ける。

老婆はそれと見て「あゝこれお女中、時を切つて痛むのは、こりや水變りのせいであろ、つひぢ

きに直りませうわいなあ」と慰さめる。

生駒之助は「いえ〳〵、さやうなことぢやござりませぬ。何をお隱し申しませう。女房はこの月

が臨月でござります」

「すりや、この女中が」と老婆は合點す。

床の〳〵さてはと岩手は心の工面、夫は慌て立つたりゐたり」で、生駒之助が「これ申しお老婆どこぞこゝらに餅屋があるなら、取上げ婆あを味噌汁で焚いて喰はして下さりませ」

床の〳〵なにを云ふやら、うろ〳〵きよろ〳〵」で、立騒ぐのを老婆が見て「これはしたり、お前方も溢れ掛かつたものを連れて旅するとは大膽な、どれ〳〵わしがお腹を見て進ぜよう」と床の〳〵懐へ手を差し入れ」で戀衣が懐へ手を入れ「いや、まだ〳〵今やちやつとのことではござらぬ。おゝそれ〳〵この痛みはさすつてつひ直ります。わしがさすつて遣りませう」と、床の〳〵そろ〳〵胸を撫でさすれば、戀衣は心地好く」で、撫でさすつて介抱される。

生駒之助は、どうしたら好いかと途方に暮れる。

戀衣は「とんと痛みが忘れたやうに直りました、ほんとに功者なお婆あさん」と喜ばしげにいふので、生駒之助が「すりや直つたか、やれ〳〵それで落ち着いたわへ」と安心する。

老婆は「いや〳〵、落ち着かれませぬ、何時知れぬ出もの破れもの、したが道中の冷えが入りて、心安うは生まれまい」といふに二人は「えゝ」と驚けば「あゝこれ、なんぞ好い藥が欲しいものぢやが」と一寸考へ、思ひ付いたやうに、おゝ、幸なことがある、この野外れの庄屋殿に、結構な安神散がある、ありや早目になる藥、わしが行つて買うて來て進ぜたけれど、年寄つて夜道は叶

はぬ、大義ながらこなさん往つてござりまして」と一寸間を置き「と云ふたところが道の案内知らず、わしがそこまで送つて進ぜませう」

「それは千萬忝い、何分宜しう願ひまする」で、生駒之助は老婆に付いて門へ出ると、老婆は門口で戀衣に「これ女中、わしはつひ一走り一しよに往つて來る程に、留守の内納戸の障子開けまいぞや、必ず覗いてはくれまいぞ」といひ置く。

床の〳〵念には念押す老の坂、道の助けは生駒之助、伴ひてこそ出て往く」と、老婆が花道へ先に立ち、これでよしと思入をするが、生駒之助はなんの氣も付かず、跡から付いてはいる。

戀衣は門口で二人の往くのを見送る。

床の〳〵跡には一人戀衣が、心細くも行燈の火を搔き立てゝも」で行燈の火を搔き立て〳〵かき曇る空も」で立ち、物憂き旅の宿で坐り、獨言に「ほんに思へば水の流れと人の身ほど、世にも分からぬものはない、都の人が陸奥三界までさまよつて、然も兒まで生むやうになると云ふは、思ひ廻せば女ほど、あぢきないものはない」と、身の上をかこちて萎れ、思ひ直した體で「あゝ、そのやうなことは愚痴、たとへ野の末山の奥でも、いとしい人と一しよにゐるが此の身の本望、どうぞ好い男の子生んで、内の人の喜び顔が見たい」と、腹の子の女でないやうにと心配し、「二つ取るなら男

の子を安々と生み落し、夫婦の中に添乳の枕」で紫の包を赤子になぞらへて一寸寢て、床の〳〵ねんく〳〵ころが云ふて見たいと女氣は、それ者の果もしどけなき」で子をあやす科をする。

床の〳〵次第に更くる夜嵐に」で風の音、時の鐘が鳴り〳〵身に泌み渡つて物凄き、安達ヶ原の軒漏る月」で慄とするやうな身振りをし「てもまあ、氣みの惡いこゝの内」で木戸の柱に寄つて「わたし一人置いて行て生駒樣はなにして、早う戻つてくれゝば好い」で左の袂を横に持ち「したが、今お婆あさんの仰やつたにはこの内見ることはならぬと、もし見て惡いなら止しにせう、だが一寸覗いて」と行き掛け「いや〳〵なんぞこはい物でもあつたら惡いが、又見たいものである」といひ、床の〳〵氣み惡ながら、そろ〳〵と」で上手へ行つて障子を開けて覗き「なんであらう、こゝに白いものが見える」で手に取り、髑髏であるに驚くと床の〳〵氣も魂も消え入る思ひ、がた〳〵震ひ、やう〳〵と逃げんとなす、背後にすつくり白髪の婆ば」で逃げやうとするのを、「これ〳〵女中、どこへ行く」と聲を掛け、床の〳〵呼ばはる聲に又びつくり」で、又驚くのを「こはいものぢやない、此の家の婆ばでござるわいのう」と云ふ。

戀衣はこは〳〵ながら「おゝ、ほんにお前はお婆あさん、いつの間にお歸りなさんした、定めて主も一しよに」

「いや、その連合はまだ跡に、わし一人戻りました」

「えゝ、それでは連合はまだ跡にでござんすか、えゝもうちやつと戻つてくれたが好い、ほんにもう髑髏が出るやら」

「や」と老婆はぎつくりする。

戀衣は立ち掛けて獨言に「どうやら氣みの惡い内、どれ主の迎ひに」で行かうとする。

老婆は「あゝこれ女中、なんぢや髑髏ぢや、なんのそんなものがあつて好いものぞ」とあたりを見廻す振りをして、絲車の後に隱し、以前の貝を出して「これ〳〵髑髏ぢやと思ふたは、此の秋田貝のことであらう」

「そんなら、その秋田貝かいなあ」

「こはい〳〵の心の迷ひ、こちの内にそんなものがあつて好いものぞいのう」

「そんならさうでござんしたか、やれ〳〵びつくりしましたわいなあ」といふ。

老婆は立膝になつて「これ〳〵女中さん、わしや」でチヽヽへ一つ鉦を打ち「こなさんに無心がある、なんと聞いて下さらぬか」

「わたしに無心と仰しやるは」で坐る。

「さあ、こなたの腹の子が欲しい」

「えゝ」と驚き、氣を變へて「ほゝゝゝあのお婆あさんとしたことが、そんなことならお前のお世話で片輪でもない子を生んだら、その時はどうなりと」

「いや、生んだ子は役に立たぬ、腹にある内を子籠といふて大妙藥、それゆゑ無心といふのぢやわいなあ」

「えゝ」とびつくりして逃げようとする袖を捉へ「いや、めつたに此處は動かさぬわえ」といふ。

戀衣は身を顫はして腹を抱へ「あゝもしお婆あさん、胎内の子が欲しいと言はしやんすからは、わたしを殺して金にすると云ふことでござんせうが、今に夫が戻つて來たら、路金もみんな上げませう、どうぞそれまで待つてたべ、つらい命をながらへて、この陸奥までさまようたも、この子を安々生みたいばつかり、よく〳〵深い縁なればこそ」といひ、床の〴〵わたしがお腹を假初も十月に及ぶ舍り子に、せめて此世の明りを見せ、一日なりとも親よ子と、互に呼びつ呼ばるゝまで命が欲しい死にともない」で嘆く、老婆は出刃を磨いて下手に立つ。

床の〴〵慈悲ぢや情ぢや許してたべこれ申し」で戀衣は右の手を出し、左を腹にあてると〴〵取り付き嘆けど聞かぬ顔」と語る。

老婆は「なにやら言はしやるさうだが、年寄と云ふものは、耳が遠い、どれそろ〳〵と遣り掛けう」

「そんならどうでも」と戀衣は左の手を出して右を腹にあてる形になり、逃げようとするのを老婆は捕へて帶を解いて端を銜え、行燈を眞ん中にして、上手になつて出刃を振り上げ、「かう云ふ内にも時刻が延びる、邪魔のない内手料理に掛からうか」

床の〴〵小褄引き上げ片肌脱き、戀衣目掛けて突き掛かれば」で前を端折り片肌脱ぎになつて切り掛け、交はされて花道の附際へ行つて向うを見込んで戻り、簀戸を締め、見得をすると〴〵子は安方」の唄になり、立廻つて戀衣が「あれえ」と聲を立てるのを「大音立てな」と云ふ。

床の〴〵又突き掛かる刃をば、除けても〳〵除けさせぬ」で、戀衣が「あゝもし」といふと床は〴〵これのう少時待つてたべ、これのう〳〵」と戀衣が、逃げんとするを引戻し、逃がさじものと一心になり、一つ鉦を打ち戀衣は薙屏風を持ち、老婆は入れ替つて立ち、戀衣が薙屏風を持つて反身になり、髪を押へられ、出刃を取り合ひ、床の紘に連れて立廻り。老婆の持つた出刃は下手へ落ちる。

戀衣は上手の障子の内へ逃げ入るのを老婆は出刃を拾つて追ひ掛けると、床は〴〵附けつ廻しつ追ひまくりなんなく肩先き切り込まれ、立つ足さへもたぢ〳〵たぢ、戀衣苦しき聲を上げ」で戀衣が

障子を破つて出ると、もう肩先は切られてゐて「これ程云ふても聞き入れず、どうでもわしを殺しやるの、えゝこなたは鬼が蛇かいのう」で肩を押へ「舎りし兒は闇から闇へ」といへば、老婆は上手の柱に寄つて、出刄を逆手に持つて下ゆてゐる。

戀衣は詞を續け「どうぞ御慈悲に我が夫の歸られるまで待つてたべ」で聲を上げ、「生駒樣いのう、我が夫いのう、死ぬるこの身は厭はねど、せめて一と目生駒樣の顏が見たい、死にともない」といひつゝ創の痛みに堪へぬ體で屈む。

床の〳〵聲さへいとゞをちこちの空吹く風の音ばかり老婆はいとどもどかしく」で「えゝ七面倒なよまい言その連合も跡から遣る。先へ往つて待つていや、どれ息の根を留めてやらうか」といへば床の〳〵髪摑かんでさし通ふせば、その儘息は絶えにけり」で捕へて上手の戸棚の前へ切り倒すと、薄く風音になり、ふら〳〵として出刄を口に銜え、屏風で死骸を隱し、壺を抱へて來て屏風の内にはいるのが、赤子の血汐を壺に絞り込むので、薄どろ〳〵になり、上手屋體の内にある髑髏へ血がにじむのだ。

そして其の髑髏を持ち出して見て、「この髑髏に血汐の浸みしは」と審かり、足元に守袋の落ちてあつたのに爪付いて取り上げ「この守袋はどうやら覺えの」で屏風の内へはいり、壺を抱へ髑

髏を持つと、足音のする。

床の〳〵人や來るかと燈火吹き消し奥の一間へ入りにけり」で行燈を吹き消し上手へ這入る。

床の〳〵かくとも知らず生駒之助」で、ばたばたになり、向うから早目、風の音で生駒之助は、前の駕籠屋二人と立廻つて出て、門口へ來て二人をほんとあて、内へ這入らうとすると、錠の卸りてゐるので、外から「女房ども戻つたぞや、戀衣々々と」呼んでも答へはない。

床の〳〵呼べど叩けど音せねば、はて不思議やと簀戸打ち破り」で、戸を破つて内にはいると眞つ暗なので高燈籠を卸し、それを持つて屏風の中の死骸を見て、床の〳〵見れば血に染む女房の死骸」で、不審に思ひ、「何者が手に掛けしぞ、戀衣やい、女房やあゝい」と呼び立てるも、床の〳〵言ひ甲斐更に亡骸を」で「えゝ、遲かりし殘念や、かう云ふ姿になるといひ、嘸や我れを待ちつらん」で刀の柄袋を取つて、不便なことをいたせしよな。此の創口の樣子では、盜賊の業とも見えず、なににもせよ我れを出し抜き歸りしと云ひ、最前の雲介ども又も途中で刄向ふは、彼等も共に一身の曲者、引つ括つて一詮議、それ」と力み、立ち上がると、風の音になり、駕籠屋二人が心付き「いゝやならぬ」と支へる。

生駒之助は「今の手並に懲りもせず、邪魔するからは、うぬ等も婆ばあの同類よな」と責めると

八が「おゝ、金を持つたる旅人を泊めて、澁茶の中へ毒を入れ」六が「飲ませて置いてそれからが剝いて取るのが頭の世渡り」と云ふので、生駒之助は「むゝ、さう聞くからは猶の事、助けて置かれぬ老女が惡逆、妻の敵、世の助け、討つて捨つる、そこのけ〳〵」で兩肌脫いで淺黄の襦袢になる。

八と六は「頭の身の上妨げすれば、捨てゝ置かれぬ野倉八藏」

「魔魅の六もろともに」

「行かるゝものなら」

「行つて見ろ」と云ふ。

生駒之助は「何をこしやくな」で砧入り風音になり、二人を相手に立廻り、簀戸を出ると月が出砧入の合方で三人して花道へ行く。そのうちに舞臺が廻る。

舞臺は四間、高足二重の古御殿、高欄附、正面古びた金地の瓦燈口、生駒之助は舞臺へ戻つて二人を斬ると樂になり、「いでこの上は老女奴を」と氣込み、床の〳〵奥を目掛け行かんとなす、御簾の内に聲あつて」で、破れた簾が上がると、上手二重臺に金冠裝束で座す紀與松の環の宮（義家の一子八つ若丸）を小團次の老女岩手が十二單衣、緋の袴で守護し官女四人が控へてゐ並ぶ。

岩手は「やあ、無禮の若者すさりをらう」といへば生駒之助が「なんと」と身構へると音樂になり、床の〳〵曉の姿に引替て、十二單衣に緋の袴、見るに生駒も進み兼ね、暫くためらひゐたりしがちつとも臆せず大音聲」で「やあ、そちは最前の老女よな、身に羅綾を纏へども禽獸に等しき奴、妻の仇、子の敵覺えがあらう覺悟せよ」と詰め寄る。

岩手は「やあ、すさりをらう、これなるは忝なくも當今の弟君環の宮、玉座間近く尾籠の振舞ひ」と下ゲすむので「やゝなんと」と又詰め寄ると、「斯く云ふわらは奥州六郡の司安倍の太夫頼時が妻岩手、情なくも我が夫は義家が爲めに亡され、無念の月日を送るうち」といへば、床が〳〵環の宮を奪ひ取りしが」と語り「如何なればこそ此の若君、我が國へ下向の時より物言ひ給ふこと叶はず」といへば〳〵いかなれば此の病、これ世に云ふ止聲病」と語り「この妙藥を尋ねしに、けふ思はずも、そちが君のお役に立つたるとは」と嘆き〳〵たぐひ稀なるこの身の冥加」と語るので、生駒之助は「あゝ始めて聞いたる物語り、さりながら君にかしづく身を持つて、人を害し盜みをなせしぞ」と詰問すれば、亂國の世になにか厭はん。金銀衣服を奪ひしも、皆軍用の助けの爲めと答へる。

床は〳〵實に貞任宗任を生み落したるその骨柄、生駒之助感じ入り」で「おゝ、驚き入つたる老女

が心底、貞任の母とあるからは、手に掛けられし女こそ、そなたの娘と御存じあつてか」と聞く。

岩手は「いゝや知らぬ」

「や」

「娘と知つたはたつた今、無念の最期を遂げられし夫頼時がその髑髏に、女の血汐の染み込みしは親子の血筋に疑ひなし、と捜し見れば手にありし此守、中に入つたる我が家の系圖書、さてはと知つたる娘が身の上、都九條へ賣られしと聞きつれど、尋ね問ふべき暇なく、打ち棄て置きしがあれが仕合せ」と、いへば床はゝ思はず知らず我が娘が、君の病の藥となり」と語り「おゝ出かしをつた、これ娘、なんにも知らず死にをつたか、不便な最期をさせしよな」で、床のゝ流石我強き心根も、子故の闇に目もくらみ」で泣き、「落つる涙は」で檜扇で顔を隠し「陸奥の谷間の水や増さるらん」で泣き落す。

生駒之助は「ほゝ、女に稀なる大丈夫、さりながら玉簾深き若君を如何して奪はれしぞ」と尋ねる。

「おゝ、それこそ君のお乳の人篋の内侍を密に頼み、御所を立ち退かせ申したり」と云ひ、奥に向つて「いざ〳〵篋殿、その妙藥を君樣へ疾く〳〵進め申されよ」

床のゝ呼び出せば、一間の内より賤の姿を改めて立ち出で給ふ篋の内侍」で、米藏の内侍が壺を持つて出て「おゝ、それこそ待ち兼ねました、君樣のお爲めにて親とも姉とも譬へん方なき老女の情――廿日餘りの月影を寫して用ゆるこの藥」といへば、床のゝ空に冴え行く月影を寫し取るよと見えけるが、器ばつたり谷底へ落ちて血汐に染めなす岩角、俄に渦く水のあし、寶劍とうとう湧き上がれば」で壺を谷へ落すと、薄どろ〳〵になつて、水氣が立ち登り、十握の劍が出ると「内侍は取つてきつと見やり」で内侍は見込み「あら不思議やいぶかしやなあ、今産婦の惡血が深谷へ滴れば、忽ち逆卷く水中に、日頃尋ねる十握の御劍、あら嬉しや忝けなや」で劍を取り上げ、床のゝ勇み立つたるその勢ひ」で、勇み立つと「岩手の前は聲を上げ」

岩手は「むゝ、すりや篋の乳人と僞はりしは、寶劍詮議の手段よな」

「ほゝう、御劍失せさせ給ひしは、汝等親子が業ならんと、内通の心を見せ、義家が一子八つ若君を以て環の宮と僞り、まつた某は女姿と樣を變へしは、八幡太郎義家が末弟、新羅三郎義光成るは」と名乘り、捕手が掛かり、引き脱き鎧姿となる。

床のゝ女姿もいつしかに引替りたる變生男子、威有つて猛さその有樣、流石の岩手も驚きて、只忙然たるばかりなり」で、驚いて呆氣に取られる。

床の〳〵生駒之助は進み寄り」で「さては義光公にてありつるか、君稚き時よりも他家に育ち給ひしゆゑ、斯く申す某とてもお顔を知らざりしが、驚き入つたる御術計、さは去りながら八つ若君、物言ひ給はぬ病とは」と尋ねる。

義光は「おゝ、それこそは稚きものに何事のありとも物言ふなと言付け置きたる止聲病」と云へば、環の宮は「事現はれては一大事、慎みをりしも義光様の皆言付け」と云ふ。

義光は生駒之助に「只今御剣手に入つたは、汝の妻が死したるゆゑ、莫大の功なれば、兄に代つて勘當赦すぞ」

「すりや、御不興を御赦免とや」

「元の如く主従なるは」

「ちえゝ、忝ふござりまする」と、喜ぶ。

義光は詞を改め、「汝はこれより先へ参り、貞任が隠れ家の篤と實否を糺して見よ」

「はつ、然らばこれより、我が君、御免」と立てば、床の〳〵情の詞に生駒之助、かしこをさして走り行く」ではいる。

床の〳〵岩手は無念の歯がみをなし」で「ちえゝ、殘念や口惜しや、現在娘を殺すといひ、これまで心を盡せしも、皆無駄事であつたよな、この上はなんとせん敵の片割れ八つ若を今ぞ殺して冥土の道連れ」と急き込む。

揚幕で小文次の鎌倉權五郎が「やあ〳〵岩手暫く待て、鎌倉權五郎景政が今改めて見参なさん」とさらしになつて出て、花道に留まる。

岩手はこれを見て「やあ、そちは最前の旅商人、この體は」

「愚や岩手」で肥前節になり「我が君の仰せを受け、藥賣と姿を變し、この國へ入り込みしも、斯くいふ時の後詰の某」といへば、義光も「この三郎も景政と兼て示せしこの手立、今又汝が計略の裏をかいたる此義光、寶劍手に入る上からは」といひ景政が「敵はぬところ」と云ひ次いで兩人で「降參なせ」と迫る。

岩手は「やあ、降參なぞとは汚らはしや、かゝる手立のあるとも知らず、夫の敵、國の仇、子供に討たして高名させんと思ひしが、天罰忽ち報い來しか、ちえゝ殘念やなあ、さはさりながら心を盡せし十握の劍、汝等如きに渡さんや」で、二人と立廻りあり「鬼も佛も心から、この世の名殘りさらば、これを見よ」で、自ら刀を首へあてる。

義光は上手、景政は下手、侍女は八つ若君を守護す。

床は「鬼籠れりと讃みなせし、安達ケ原の黒塚の、その古事を末の代に語り傳へて殘しける」で引つ張りで幕になる。

本來はこゝで山幕を被せ、切つて落すと、大薩摩があつて、一面の谷間で、上手奥深に山塞の門へ岩根を置き、谺入の鳴物でせりになると、貞任寶劍を持ち、星を操り、搦み一人を引き付けてせり上がり一寸立ち廻つて振りほどく。こゝへ義光、生駒之助、景政が出る。

貞任は「懸河渉々として、巖峨々たるこの谷間、知る人稀なる貞任が隱れ家へ來たる三人のもの、そも又うぬらは何者だ」といへば、義光が「おゝいしくも問ふたり、某こそ義家が弟新羅三郎義光、汝が母の隱れ家にて、手立てを以て谷間に寶劍隱しあらん事」と云ひ生駒之助が「血汐の汚れに推したり、その母岩手も計略の裏をかゝれ」と云へば、景政が「自滅なせば最早叶はぬ安倍の貞任」と云ひ、義光「寶劍渡して」と、三人で降參を迫る。

貞任は「愚や義光、いつぞや君の館にて義家に回り逢ひ、我が欝憤を散ぜんと思ひしが、女房舅の落命に、その場を立ち去り、一度大望成就と時節を待ち、我が面前へ、うか〳〵來りし源氏のやつばら、いでやその首刎ねてくれん」と意氣込むと、景政が「やれ待て貞任、汝が何程申すとも、岩手がそつ首打ち取つたり、それにて篤と實驗せよ」と云ふ。

貞任は「なに、母が」で驚き「すりや、いよ〳〵生害とや」と首を取つて「えゝ遲參の誤り殘念や、いまはしきこの御姿、不孝の罪御赦免あれ」と降參の意を表すので、義光が「ほゝ敵將ながら孝あり勇あり」と云へば生駒之助が「女に稀なる母御が最期」と云ひ、景政が「跡懇に弔はれよ」と云ふ。

貞任は「ほゝゝ今戰場の街に於て敵に首を送ると云ふ情ある源氏の法令、我れもこれにて何か惜しません、この寶劍その方へ」と義光に渡すので

「すりや寶劍を某へ給はるとや」

「いかにも弟宗任が助命に報ゆる恩返しこの上に軍せんは心好からず」と禮する。

生駒之助「然らば勝負は又再會」

貞任「この貞任もそれまでは」

義光「老母の別れ取り亂す」

生駒之助「絲の亂れの苦しさに」

景政「衣のたては」

貞任「法會の手向け」
義光「流石は敵將」
三人で「安倍の貞任」
貞任は「かたゝく」
皆々で「去らば」で引つ張りの見得になつて片しやぎり遠寄で幕。

涙橋（お七と吉三）

山崎紫紅氏作。
大正三年八月、於帝國劇場出演

主なる人物と役者（出場順）

釜屋武兵衛	澤村宗之助
針醫玄伯	澤村春五郎
お七の母お安	村田嘉久子
下女お杉	河村菊江
八百屋娘お七	小林延子
寺小姓吉三	澤村宗之助

宮神樂で幕が開く。

湯島天神境内

とて正面に石の鳥居が向へを向き、その下に石段のある體。上手に額堂、下手に唐金の天水桶、處々に松の立木、紅白の梅があしらつてあり。背景は下谷から遠くまでの町々の屋根が見晴しになつてゐる。

綺麗に著飾つた町家の娘達が五人で、追羽根やら鞠をついてゐると、三人の町人が見てゐる。娘達は遊び手を息めて、「けふは家へ火を放けた友達の八百屋のお七が鈴ケ森で火焙のお處刑になるといふが、可哀さうなことである」などと口々に噂をしてゐると、お七の壻になつて嫌はれた釜屋武兵衛が出て、娘達に「お前達は何を話してゐた」と聞く。みんなが「お七さんの噂をしてゐた」といふので、「あんな、けたいくその惡い女」とけなせば、「惡いと言つても」と、いふのを、「お七は火焙りになる女」と、不便にも思はなく言ふので、娘達はその厭らしい武兵衛の體を見て立ち去らうとする。

武兵衛は娘達のうちのお町の袂を取つて引き留め、「あの片輪車の模樣のある衣物を著てゐるのはどこの何といふのだ」と、目尻を下げて聞くと、お町が「あれは小間物屋のおたかさん」と答へるので、「壻があるのかい」などと又聞き、あとを聞かうとするので、娘達は袖引き合つて、上手へ逃げて行く。

武兵衛はおたかを慕ふ心で見送つてゐると、針醫の玄伯が上手から出て突き當り、武兵衛の劍突で、玄伯はその怒つた顏を見て「なるほど、ぞつこん惚れたお七殿がけふ火焙りになるので、おむづかりか」と、氣を取るのも、「なんのあんな恐ろしい女、もう疾うに思ひ切つた」とさつぱりいふので、「それでは冥利にはづれませう」、「あんな女に用はない」で、天水桶の臺石の前へ腰を掛けて「今大勢行つたあの中の小間物屋の娘おたかを是非取り持つてはくれまいか」

「八百屋の娘の爲に骨を折つたが、あんな騷ぎで禮も貰へず、又賴まれては困りいる」

「今度はきつと禮をするから一骨折つてくれまいか」

「お七殿のお處刑になる元はといへばお前さんへの義理立て、お前さんにも添ひたければ、吉三も棄て難く、思ひ餘つた無分別の結果、それを今更餘所の娘をねらふとは、不心得千萬」と諭すと、武兵衛が

「さりとてお七は女の癖に放火をしたに違ひないので、けふお處刑になる身」

「さうかな」

「だから如何ほど惚れてゐても爲樣がない、それに引替へおたかはお七に劣らぬ器量好し、嫁なら

嫁で別居せう、壻なら壻で持参金もはづむ、是非ともあれはあれで世話してくれ」と重々の頼みに玄伯は引受けて、

「けふ八百屋から迎ひに來たから行くと、老爺の久兵衞が娘のお處刑になると聞いて、男のくせに癪を起したから、一針立てゝ來ました」

「いくぢのない奴だ」と下げすんで、「あの貸した二百兩どうしても取り戻したいものだ、どうかあの娘を世話してくれ」と慾と戀との二筋道を掛けて又頼むので、

「では、若旦那、首尾好く行つたら禮金は」と念を押し、「望み次第」と言はれて悅に入り、雪駄をちやらつかせて下手へ去る。

跡に武兵衞は只一人、「あの訟訴中の二百兩が取れずば、八百屋の家屋敷を引替へに取れば儲けもの、そこでおたかと夫婦になつて、手に手を取つて物見遊山に出掛けよう」と、心に描いて氣取つてゐるところへ、上手からおたかが一人で來るのを見つけ、「この緣談が纏る……天神樣は有難い有難い」と言ひつゝ天水桶の蔭に隱れ「おたかさん」と呼んで出ると、「武兵衞さん」といふので、武兵衞は「よく私の名を知つてゐる」と自惚れかゝるのを、おたかが「わたしはお七さんの手習朋輩そこで今度のことがあつて、みなさんが知つてゐるのよ」と言ふ。武兵衞は小娘達に自分が知られてゐるといふ心で、色男がると、「憎らしいので、みんなが知つてゐるのよ」と言ひすてゝ、そつと逃げて行つてしまふ。

武兵衞が呆氣に取られてゐるところへ、手代と丁稚が石段を上がつて出て、「旦那樣、御奉行樣からお達しがありました」、といふのを聞いて喜び顏で、「なんとお達しがあつた」、「一旦壻入せし武兵衞、本來なれば久兵衞夫婦の先々をも見るべきところ、却つて取込みの最中へ金子の訴訟、殊の外お憎しみとあつて金子は久兵衞に下さる」、「やあつ」と驚き、「二百兩は」、「あなたのものではございません」、「うん」と言つて癪を起す。手代共はびつくりしてゐるところへ、玄伯が立ち戻つてこの體を見て、早速針を立てるので氣がつき

「玄伯さんか……おたか坊は」

「おたかには歷きとした許嫁があります」と言はれて、また「あいたゝ」と倒れかゝる。みんなして立騷ぐので幕になつた。

水の音で幕が明くと

鈴ケ森に近き涙橋

とて上手寄斜に橋が架かり、下手に葭簀張、上手が立木、その中に田舍家、川の流れを見せ、下

手一面の海を見渡した鈴ヶ森へ行く途中である。

こゝへ旅の夫婦連が出て「あの位な娘なら一晩で首を取られても口惜しかねえ」と、お七の引廻しを見て來たので、皮肉なことを言ひながら行かうとすると、葭簀の蔭に隱れてゐた、お七の母お安が出て、「引廻しがあるさうですが」と聞くと、「年寄のくせに見たいのか、なんでも小娘のくせに寺の小姓に乳繰りあひ、自分の家へ火をつけて、火焙りになるとのことだ」と話されて、お安は萎れ返り、

「もう參りませうか」

「追つつけ來る時分です」といふと、水の音になり、旅人夫婦は上手へと去る。

すると又葭簀の蔭から下女のお杉が出て下にゐて泣けば、お安は立身で、「娘が命を果すのもほんの僅の間、けふは日足が早いやうに思はれてならない」と言つて、二人して悲しみ、お安は又「あれの爲を思つた親の苦勞も仇となり、十六年が一期で燒き殺されてしまふか」とかこち、「娘が見えたらお前もお題目を唱へて遣つておくれ」

「物體ないそのお詞、吉三さんに今はの際にお顏が見せたい」と、心配してゐる内、人の聲がするので、お安が「來たかいのう」と言つてゐると、淺黄の法被を著た男が二人出で「どけ〳〵」と言つて斥ける。

お杉はお安に「かうお出でなさい」と言つて連れ立ち、葭簀張の蔭へ忍ぶ。

そこへお七は淺黄の着附、薄紅色の前帶で、馬に乘せられ、宰領が先に立ち、非人が前後を警固し、罪狀を書いた紙幟を立てて引き廻しになつて來る。

お安とお杉が出て、「身寄のものでございます、一目逢はせて下さりませ」と、歎願すれば、宰領が「科人に口を利いてはならねえぞ」と言つたが、それと察して、「會ひねえ」と情を籠め、一同して上下へ引き下がると、馬の側へ寄つて娘を見上げ、「これお七」と、聲を掛ければ、哀れに包まれたお七は「おゝ母さん」と、哀れにいふ。お安がその聲を聞いて、「情ない姿になつたのう」と、つく〴〵見上げれば、お杉は「お七さま」と、下手の方から裾に縋つて歎く。お安は氣を取直し

「最期の場所へ臨んでも、必ず〳〵取り亂さぬよう、思ひ殘すことがあるなら、今のうち言ふて置きや一

「思ひ殘すことはないけれど、母さん、先立ちます不孝をお赦しなされて下さりませ」と詫び、お杉に

「年寄の母さん、氣をつけて」

「心配なさるな、お世話いたします」と安心させるに、お七は
「若し母さん……わたしやもう參ります」
「吉三殿の顏は……」
「……」
「名殘りを惜しみに來ても萬更罰も當るまいに、人でなしの恩知らず」と、吉三を怨んで言へば、
お七は
「結局見ぬのがわたしの爲合せ」と諦める。お安が「あの人に情立てう火焙になるのが不便」と、
可哀がれば
「厭な男の情より、火焙になるがまし、火をつけたお蔭で、吉三樣に逢へたのぢや、只喜んで死に
に行く」と言つて、お杉から櫛を借り、鬢の後れ毛を搔き上げる。これを見たお安は、「こんな姿に
なつても氣に掛かるものか」と言つてゐるところへ、「もう好い時分」と、宰領が出て、「科人に口
を利いてはならないぞ」と言つて、お七から二人を引き離す。引き放された二人はお七に向つて名
殘りを惜しね。お七が切ない思ひのうち、行列は元の通りに立てられて、上手へと行つてしまふ。
お安はお杉とともに橋の欄干に摑まつて脊を伸して見送り歎きのうちにも

「お杉、あれだけでも話が出來たのは嬉しかつた」
「あれだけ隙があつたから、吉三樣にお逢せ申したかつた」
「吉三のことは言ふてくれるな」と、お杉の思ひ遣る詞を抑へると、行列を見送りつゝあつたお杉
が、「あれ〳〵もう影が見えなくなりました」といふとき、法華の太鼓が鳴る。
そこへ吉三が、前髮立で鬢の毛が少し亂れ、黑の著附、袴形で下手から引廻しの跡を追つて來た
體であるを、お安がそれと見て
「死にに行くのをなぜ一目逢ひに來てくれなかつた義理知らず」と詰れば
「疾つくに言つてある筈、義理知らずとはお情ない」と恨む。お杉は向うを向いて泣いてゐる。
お安が又「あゝなつたのは」と、娘のけふの哀れさを言ひ出せば、吉三が
「それと申すも元はわたしゆゑ」
「そんなら忘れはなさるまいに」
「なんの忘れて好いものか」
「それほどならなぜ傍へ寄つて見て下さらなかつた」
「いえ、來たが遲れました」

「それでは親切が足りなかつたではないか」

「いえ」

「それほど親切なら牢屋を出るのを待つても好い筈、情知らずと言つたが惡いのか」と責めれば

「欄間に彫つた天人は忘れても、お七殿を忘れよう」と、むきに言ふも、お安は「それは言譯」と斥ける。お杉も「なんで顔を出さなかつた」と責める。吉三は「必ずさやうなわけではなし、お七殿に呑ませる藥を調へる爲」といふも、お安は「そのやうなことを譫だ」と肯じないので、吉三は少しむつとして、「それがしをなぶらるるか……お七殿に」で、懷中から藥包を出すも、お安はなんのかのと無にする。吉三は

「情ないその言ひぶん、これは南蠻祕法の眠藥、服する時はうつらうつらと死んで行く、これをお七殿に呑ませようと辛苦を盡せしも、あんまりな惡口、それがし立つ瀨がござりませぬ」と、眞心から言譯するのを聞いたお安は、ちやんと坐つて「おゝ、さういふ心とは知らなかつた、赦して下され」と詫びれば、お杉も下手から「さりとて最早處刑場へはひつた上は、如何やうともしようがない」と、主從して思案に暮れる。吉三は思ひついたやうに

「坊主になれば後世を弔ふ爲に囚人の側に行けますゆゑ、髮を剃つて下さるなら、手渡しが出來ま

する」と言へば、お安が「情ないこと」といふ。吉三が「でもお袋さま」と歎いてゐるところへ、折も好く旅僧が來るので、二人が木蔭へ忍ぶと、吉三が旅僧に「衣を貸して下さい、お處刑があるから」と賴むと、坊主は變な土地と言ひ、願のことを聞いて承知する。

吉三が「お杉どの、わしの髮を」と言へば、坊主が剃刀があると出す。吉三は「お袋さま、戀しい人に只一目逢ひたい爲に剃りますのぢや」と言ひ、お杉に「お杉どの早う」で、法華の太鼓が鳴る。旅僧が衣を脫ぎかけるので舞臺が廻る。

鈴ケ森處刑場

とて向う一面の海で、街道を隔て、竹矢來をしつらへ、矢來の內は、上手の南無妙法蓮華經の大石塔が背面で、その傍に紙幟を立て、焚火、眞ん中に突棒、刺股が三本立てあり、その前少し上手に莚を敷き、下手に石地藏が矢張り向ふ向いてゐる。

役人が指圖の下に、お七は莚の上に据ゑられ、非人や警固の人々がそれ〴〵控へれば、見物人大勢は竹矢來の外に立つ。

僧に身形を變へた吉三は、駈けて來た心持で息を切り、矢來の外から

「お願ひのもの、囚人に題目を遣はしたうございます」と言ふに、宰領が取次いで役人に「題目を

遣はしたいといふ坊主が參りました」と告げると、役人がお七に、「どうだ」と聞けば、お七が「受けたくない」と斷る。一同が「さう言つて來たのは、吉三の外にはあるまい」と言ひ合ふ。役人は宰領に、「科人は受けたくないと言ふ」と言ふ。

この時お七はお願ひといふ聲が吉三に似てゐるので心づき、「その坊樣に逢はして下さいませ」と賴めば、宰領が又取次ぐと、役人が「どんな坊主だ」と聞く。宰領が「美しい若い坊主」と答へるので、「逢はして遣れ」と許す。

吉三はその詞を聞き、慌てて正面稍下手の入口から出るので、役人は「その方は何と申す」と尋ねると、吉三が「妙吉坊」と答へる。

お七が「吉三殿」と呼ぶと、役人が「なんと申す、吉三がこゝへ來る筈はない、妙吉といふ坊主だ」と、思入れをするので、お七が合點する。吉三はお七に

「末期の際の罪人に難有い題目を授ける爲に參りました」

「今更何を聞くもなんにならう」

「臨終の一念は五千生にも當るとやら」

「男ゆゑに棄つる命、棄てる覺悟したものが、なんで最期に題目を……」と、取り合はないので、

吉三が「幾ら覺悟しても」と、懷中から藥包を出して授けようとするのを、宰領が留める。お七が

「藥は長生きがしたいゆゑ、わたしに藥がなんの用に立つ」

「これは淑光淨土へ行ける妙藥」と言ふ。かくと聞いて役人が、「飲める食物なら上の慈悲」と、暗に呑んでも好いと言ふも、お七は

「藥は呑まぬ、末期の苦しみは苦しむだけして見たい、自分の體に火のつくのは兼ねての覺悟……お七の體は戀の火で煙が立つてをりまする……」と斥ける。吉三が

「劫の火が燃えついたら、どうにもならぬ、呑んで下され」

「苦しむのが本望ぢや、男の爲に苦勞するのは、女に生れた甲斐といふもの」と、きつぱり斷るので、役人は「狂氣」と言へば、「なんの狂氣」と、お七は火焙りを覺悟してしまふ。吉三は是非なく

「お七殿、では、存分苦しんで下され」と言ふ時、七つの鐘が鳴る。役人は「最早時刻」と、吉三を引き離して矢來の外へ引つ立てる。又鐘が鳴る。

お七が「吉三樣……」と、別れの一言を、矢來の外で聞いた吉三が、「お七殿……」一人は遣らぬ我等も續いて」と言ひつゝ、手早く藥を呑むと、又鐘が鳴る。

お七は二人の非人に兩手を持たれ、中腰に立つと、又鐘が寂しく聞えて廻る。

元の涙橋

になり、お七の處刑を見に行く人、歸る人などの男女が行き交ふ。

吉三は上手から、うつら〳〵と歩んで來て、橋の中程で藥の包を手から落す。待ち兼ねてゐたお安とお杉が出て吉三に

「娘は藥を呑んだかい」

「呑まれましたか、なんと言ひましたか」と、左右から絶つて聞くに、吉三は

「藥はわしが呑んだ、わしも一しよ……」で、上手の向うを見て「火の手はまだ上がりませんか」と聞いて、橋の欄干へ手を掛ければ、上手に火の手が上がるので、お杉がそれを見て「あれ煙が……火の手が……」と言ふので、吉三は伸び上がつて

「女が死ねば男も死ぬ、お七殿、一しよに、一しよに」と、すがれた聲で言つて、よろ〳〵と橋の柱へ攀まると、お杉が傍へ寄つて介抱する。お安は橋の上手の欄干に泣き伏す。幽に法華の太鼓が打ち込まれて幕になつた。

お夏狂亂

大正三年九月於帝國劇場、坪内博士作尾上梅幸所演の狂女

〳〵行く秋の名殘をとどめおく手田」の置唄があつて、里の子四人が出て踊り、狂女を見つけた心で隠れると、〳〵笠よかさ、梅の花笠その花笠を」で、梅幸の狂女お夏が現れ、何か見つけた心で上手へ駈出し、急に氣を變へて、ぼんやり――下手へ廻り、下手で右の手を翳して、ちよつと振向くのが、〳〵染むる間もなき晩紅葉」の切れで、納手拭の竹を持つて振事になり〳〵風に散りそろ、紅葉が風に」で、少し陽氣な振になつて、帶に挿んで持つて出た、經木流しを紙へ刷つたのを、のつけに一枚撒いて拜み、五枚散らしては拜み、三枚――七枚――五枚と落葉のやうに散らし、急に誰か來て耳に囁いたかのやうに

「なんぢや……嫁入ぢや……誰が嫁入ぢや」といひ、又今いつた人に聞く心持で「して花嫁御の名は」と問ひ、〳〵たわいも浪の浮寢鳥」で、初は他人の嫁入りだつたが、だんだん自身が嫁入の心持

になつて嬉しくなり、盃事をする心で清十郎へ献すと、清十郎がゐぬので、どこへ行つたらうといふ思入で、きよろ〳〵と四邊を捜して揑となり、下にゐてぼんやりと四方を見て、丁度夢路でも辿る面持でゐるところへ、里の子四人が出て囃し立てる。

〳〵通つた〳〵、今ここを通つた……」で、里の子の振をたわいもなく眺めいり、〳〵逢ひたか逢はそとそやされて」で、不意に氣がつき

「なに、菅笠がどれ〳〵〳〵」といひ、〳〵行かんとすれば口々に」で、子供達が遮り、「いや、いつもの唄をうたつて踊らぬうちは、致へぬ〳〵」といふので、

「なに、いつもの唄をうたへとや、おゝ〳〵唄ふとも〳〵」と答へ、〳〵わしがナア、お母さと絲とつてゐたれば……」で、竹の棒に結びつけた納手拭をとつて肩にかけ、唄につれて、その手拭をかぶり振になる。

里の子供等はいつも「お夏の歌」をうたつて泣くので、けふも泣かしてやらうと思つたに、他の唄をうたつたので、あてが外れ、

「いや、さうぢやない、お夏の歌ぢや」と註文する。狂女はそれをいはれると無情に悲しくなつて泣き落してしまひ、氣を變へて立ち〳〵清十郎殺さば」で、目先にその死が迫るやうに見え、〳〵お夏

も殺せ」で、わたしも殺してくれといふ振をし、〳〵生きて思ひをさしよよりも、思ひを生きて、生きて思ひをさしよよりも……」で振事があつて、ほうつと夢心地のやうになり泣き落す。子供等は案山子を持出して來て立て、

「あれ〳〵あそこへ清十郎が來たぞや〳〵」といふので、狂女は、

「えゝ、どれどこへ」と少しく氣がたしかになり、〳〵ほんにすげない浮世とは」で、下手にある案山子が清十郎に見えるので、追つかけるのを、子供が支へて隱し、今度は上手へ行かうとすると、また稻叢の蔭に隱され、見えないので泣き倒れると、里の子の一人が鳴子の紐を狂女の帶へ結びつける。

上手へ又案山子が出るので行きかけるのを、下手からその紐を引張るので倒れると、子供達は「わい〳〵〳〵」と囃し、下手へ更に案山子が出るのを、下手の子供が教へるので、又行きかけるのを上手にゐる子供が引張るので、又倒れると「わい〳〵」と囃す。

狂女は起上がりながら、腰の繩に氣がついてとり、子供に向つて投げつける。すると、上手から一人の子供が竹の棒に鳴子の付いたのを持つて打つて來るのをかはし、下手から一人の納手拭の結びつけてあつた竹の棒で打つて出るのを、左右の手で支へ、子供に拂はれて前に倒れると、手明き

の子供二人が、左右の手をとつて起し、ぐる〳〵と三つばかり廻されるうち、前の子供が鳴子の繩を取上げて、下手へ行つて引張る。このとき、一人が上手から鳴子の竹で打込んで來るのを押へてとると、取られた子供が「わい〳〵」と囃すので、下手へと追廻し、張つてゐる繩にかかつて倒れるので、子供四人は上手へ廻つて又「わい〳〵」と囃すので、狂女は持つてゐた鳴子で上手へと打つて行くと、子供等は逃げて下手へ行き、囃しながら笠をとつて投げるので下手へ追つて行くと、子供達は又笠を持つて上手へ現れ囃し立てるので、それを追つ駈けて引込のが、〳〵亂れ狂ふぞ無殘なる」の切れで、ここで電燈が少し薄暗くなると、

〳〵石部金吉かなつんぼ、金には地體緣薄なれど」で、狂女は左は著物を脫いだ下著、右は著物も下著も脫いだ襦袢姿で、裾もしどけなく、帶を長く引き擦り、島田も崩れて取り亂した狀態で、以前の笠を左の手に持ち、ぼんやりして現れるのを、馬士（幸四郎）が認めて「とう、こりやどうぢや、とつてもえらい美しい」といひ、〳〵女子にや果報ありやうは」で、この間馬士は搦んで踊るも狂女は上下へ行つて相手にならないやう相手になり、〳〵寒さ凌いで喉元を、過ぎりや浮氣の小あたりに」で、馬士が抱きついて來るのを、ちよつと拂つて輕く袖で打ち「いえいえ獨りで渡るわいの、オホ、、、、……ても仰山なといふのを、〳〵螢狩」に取る。

狂女は「皆もおじや、さあ〳〵〳〵」で、さながら大所の娘が乳母や女中、手代、小僧を引連れて螢狩に行く思ひとなり、〳〵ここやかしこと手を引連れて、螢來い〳〵甘い水やろに」で、この間螢狩に行く氣分で笠に躓きそれを拾ひ、次にその笠で螢を「ふう」と我れ知らず無心のうちに逐ひ〳〵そちも可愛いや夜すがら身をば」で、笠を使つてちよいと浮かれた振事になるのが、〳〵焦す水にも消えぬ火に」で、螢が全身に集つて來た心で、手にする笠でこれを振拂ふと、フウと消えるので、おや、どこへ行つたのだらうといふ心持で、笠を突いて見上げる。折から、

〳〵あら怖ろしや焦熱の」で、その螢火が一團となつて火の車のやうに上手へ見えるので、怖いから袖で顏を隱し、またどうなつたらうと見るのが、〳〵苛責の杖、この世から受くるぞ人の淺間しや、助けてたべの悲しやと」の文句に、清十郎が火の車の中で責苦を受けてゐるのが歷々と見えるので、どうかして助けたいと氣ばかり焦つても、夢でよく出會ふやうに、行かうとして往かれず、立たうとして起てないと同一に、手の下しやうがなく困じ果ててゐると、そこへ獨りの男が立つてゐるから、馬士ともなんの分ちなく引張つて上手へ行くと、見えなくなつて、下手に清十郎の姿が見えるので、馬士を突飛ばして下手へ駈出す、馬士が上手から帶際とつて引戻すのを振拂ひ、〳〵かなたへ走り、こなたへ迷ひ、狂ひ亂るる有樣に」で、上手と下手へ二度づゝ往來して、炎の亂れ身の亂れ

に自身も怖ろしくなつて倒れると、〽あつたら笑止や氣ちがひ殿」で、馬士の醉が醒め、行きかけるのを、やらぬと留め、入替つて上手へ行きかけるのを、こつちは下手から見ながら我れ知らず左で襟髪を掴んで引戻すのを、馬士がそれを拂ひ、狂女を突き倒して上手へはひるのが、〽わが里さして走り行く」のを一ぱいに納ると、電氣が暗くなるのが、三段目で、

〽次第に迫る烏婆玉の無明を破る鐘の聲」で、狂女は起上がつて馬士を追ひながら眞中の上から裏へと追ひかけ、躓いて仆れると、狂ひ勞れが出てだんだんに横になつて寢るので電氣が暗くなるのが四段目で、空に閃く星、入相の鐘、いづくからか御詠歌が漏れ聞える、〽普陀羅や岸打つ浪は三熊野の」の唄の間に弓張月がほのかに中天に現れる。

それから〽都の春も程近く、端なく流れあふみ路や」で、狂女は頭を上げてツカ〳〵と上手へ行き、何もゐないので下手を見ると、笠をかむつた人がゐるので、オヤ清十郎かと覗き込むと、男巡禮は驚いて、狂女の姿を見ながら附廻して上手へ行く。と狂女は空を眺め、又も下手を見ると巡禮がゐるので、同じやうに覗き込んで、今度は下手へ廻り「はてどうしたのだらう」と探す。

男巡禮は氣味惡く、女巡禮に早く來いと目配せして上手へ行きかけ、氣ちがひの娘だと知りながらも、なんとなく自分の子供のやうな氣持がするので、立ち去りかねてゐるのを、狂女は下手

から菅笠の後姿を見て、婆の笠へ手をかけるので、爺が中へ割つてはひり、何をするといふ思入で顔を見合せ、爺は裏向きに二足三足行く、その後姿を狂女は見て、又笠に手をかけ引戻し、笠をとつて上手へ行かうとするのを、爺はさうさせまいと下手へ引く、そこへ婆が割つて眞中へはひつたのを上手へ突退けると、爺は笠で狂女を上手へ二三歩押して行く。狂女はそれを振拂ひ、爺を下手へ突くと、爺は笠を持つた儘撞と下に住ふ。この間に婆が割つてはひり、持つてゐる笠で狂女の帶際を押し、片膝を突いて極まる。

狂女は上手へ立つた儘押された菅笠を手に持ち、向ふを見込むのが、〽堅き誓ひぞ頼もしき」の切れで靜に幕が下りる。

狂女お夏の鬘と表裝

鬘は西川祐信の畫に基いた元祿島田に掛物は白の葛引、髱は鷗苞、おくれ毛は固まらぬやう絹の絲を用ゆ。

著附は水淺黄地の羽二重へ群青色の遠山と蛇籠の疋田模樣へ百合と芒あしらひの縫取り、薄鸚色の空と三色四段に染出してある。下著は褪紅色の羽二重地へ蒲黃、朱、紺で葛の葉の模樣を縫取り襦袢は朱縮緬へ白拔きの柳の枝、葉の中に疋田模樣、朱縮緬無地の襟を掛け、帶は黑繻子へ銀色の

破れ霞と、金銀で色取つた捻菊の散らし、淡紅色の扱き、朱縮緬の褌なり。

梅幸の『お夏狂亂』談

坪内博士の『金毛狐』を演じました際に、同博士の作『お夏狂亂』の全篇を通讀いたしまして、折もあらば博士のお許を得て演じて見たいと存じました念願が屆き、帝國劇場の九月に上場することになりましたので、種々舞臺上に工夫を凝らし、一生懸命で演じてをります。

私はこの『お夏狂亂』を稽古中、餘丁町の博士お邸へも兩三度伺ひまして、博士自ら立つての教を受けましたが、その時、國子さんと大造さんが舞臺に立たれて、お夏の振りを見せて下さいました。踊が熱心で格に入り、思入れなぞの極りかたは實に恐入つたものでした。

狂亂して居るお夏はいつもの氣ちがひのやうに無暗に駈出すやうなのでなく、ぼんやりと唯物狂はしく、凄味よりは愛らしく、大所の娘が預られて居た寺からスウと拔出した心で、始終笠のみが氣にかゝり、泣くにもいつものやうな科をしず、處女の泣くやうな生野暮に兩袖を顔に押宛てゝ泣く、といふ風にいつもとは大分いきかたが變つてをります。が一口に申せば、夢路を辿つてゐるといふのがいひ盡してゐる詞です。

お夏の風俗は祐信の錦繪を見るやうに、里の子は田舍者の穢いのではなく、いつもと違つて美化してくれるやうに、と博士からのお指圖に從ひましたが、只大道具を間接に伺ひました爲め、寫實風に作りましたは遣り損ひでした。博士の御腹案では、廣重の東海道五十三次の名所畫を鼠ぼかしたやうな氣分の浮ぶ大道具といふお望みだつたのださうで、下手の松並木も、もつと奥深に飾つて斜に奥から通ふ風情を見せたかつたと、初日を御覽になつてのお詞でした。

それから〳〵わしとナァ」の唄のところで、ナァといふところを引張つて尻上りあげてうたひますのは、博士からのお指圖でして、これは博士が御病氣の時に熱海へ轉地療養をされ、土地の田舍婆婆が歌ふ臼引唄の、節といひ唄といひ、優美で古雅なところがあるので、殊更らにその年寄を旅宿へ呼寄せて聞直されたといふ、其節の一端を取りましたので、手拭も納手拭は普通の手拭よりは短かく、二つ繋ぎ合せた心で用ゐて居りましたが、七日目に講中から出した手拭の、丁度格好なのを見つけ出しましたので、それを用ゆることに改めました。

お夏の性根はこの一節の唄にあるので、最初はこの唄だけ自身でうたつてはといふ說も起つたのでしたが、後日の研究に讓りました。よく故人團十郎が目的のない所作は嫌だ〳〵と申しましたが